

中内遺跡

—県道バイパス鳴門・池田線改良工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—

徳島県教育委員会

1981

序 文

この調査概報書は、本県の北部を東西に結ぶ幹線道路である県道「鳴門池田」線の改良工事の施行に先がけ、徳島県土木部の依頼をうけ実施したものであります。

中内遺跡は、古墳時代から江戸時代にかけての遺構や遺物が多く検出され、この時代の板野郡を中心とした吉野川北岸の文化を解明する上で重要な資料を得ることができました。

この調査に関しまして、御指導・御協力を賜りました関係各位に対しまして深く感謝申し上げますとともに本書が埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、本県の歴史の解明にあたり少しでも役立つならば幸甚であります。

昭和56年3月

徳島県教育委員会
教育長 藤野井 親 仁

例 言

- 1 本書は県道バイパス鳴門・池田線改良工事に伴う中内遺跡^{****}の発掘調査概要報告である。併せて山の下東遺跡を付載した。
- 2 発掘調査は徳島県土木部道路建設課の要請をうけて県教育委員会文化課が実施した。
- 3 本書に収録した中内遺跡は昭和54年11月2日から55年4月26日まで、山の下東遺跡は昭和53年11月24日から54年2月14日まで行なった。
- 4 収録した資料の実測は遺構は調査員が分担したが、遺物は古墳出土遺物を小笠原が、その他の遺物は菅原が担当した。撮影は主として菅原・小笠原、製図は菅原が行なった。
- 5 本書で用いた絶対高は標高をあらわす。方位はすべて磁北である。
- 6 土色の判定に際しては、小山正忠・竹原秀雄編「新版標準土色帖」1967に、古墳出土土類の色調判定にあたっては、色彩企画センター編「配色色名帖」によった。
- 7 Fig. 1の地形図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図（板東図幅）を転載したものである。
- 8 今回の一連の調査において、徳島県文化財保護審議会の森浩一委員（同志社大学）、秋山泰委員（鳴門市史編纂室）のほか、阿子島功氏（前徳島大学助教授）、石野博信氏（橿原考古学研究所）、水野正好氏（奈良大学）、本田昇氏（鳴門市史編纂室）、鳴門市史編纂室からは御指導と御教示をうけ、また島巡賢二、井上章生（県教育委員会文化課）、大宮恵美子（奈良大学学生）の各氏には調査を通じて協力をえた。
- 9 調査は以下の組織で行なった。

中内遺跡

調査主体 徳島県教育委員会文化課

調査総括 立花博（文化課文化財保護班長）

調査担当 菅原康夫（文化課主事）、松永住美（文化課研修生）

調査員 河野雄次、菊谷富男、小笠原賢（文化課文化財調査員）、結城孝典（文化課文化財調査員・当時）

山の下の東遺跡

調査主体 徳島県教育委員会文化課

調査総括 立花博

調査担当 菅原康夫

調査員 喜井廉平（文化課文化財調査員・当時）

- 10 本書の構成は菅原が企画、立案し、河野、小笠原、菅原の三名が分担執筆した。それぞれの分担は以下の通りである。

中内遺跡

I 章 菅原・河野

II, III, IV 章 菅原

V 章 1 節 菅原

V 章 2 節 小笠原・菅原

V 章 3 節 河野

VI 章 1, 4 節 菅原

VI 章 2 節 河野

VI 章 3 節 小笠原

山の下東遺跡

I—III 章 菅原

中内遺跡本文目次

	頁
I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経過	3
III 層序（土層の堆積状況）	8
IV 遺構各説	13
1 A調査区の遺構	14
2 D調査区の遺構	14
(1)第Ⅰ遺構面の遺構	14
(2)第Ⅱ遺構面の遺構	18
(3)第Ⅲ遺構面の遺構	19
3 E調査区の遺構	21
(1)第Ⅰ遺構面の遺構	21
(2)第Ⅱ遺構面の遺構	22
(3)第Ⅲ遺構面の遺構	23
V 遺物各説	28
1 古代～近世の遺物	29
2 古墳出土の遺物	40

3	包含層出土土器の集計	45
VI	調査の成果と今後の課題	47
1	包含層出土遺物について	47
2	近世水田址の検討	48
3	宝幢寺3号墳出土の玉類について	50
4	宝幢寺3号墳と大麻町周辺の古墳について	52

付載 山の下東遺跡本文目次

I	遺跡の概要	90
II	出土遺物	94
1	中世遺物	94
2	その他の遺物	95
III	まとめ	96

中内遺跡図版目次

PL 1	A調査区全景，D調査区第Ⅰ遺構面（近世水田址）全景
PL 2	E調査区第Ⅰ遺構面全景，E調査区第Ⅱ遺構面全景
PL 3	A調査区第Ⅰ遺構面自然流路全景
PL 4	D調査区第Ⅰ遺構面（近世水田址）の細部状況
PL 5	E調査区第Ⅰ遺構面（近世水田址）足跡検出状況
PL 6	D調査区第Ⅱ遺構面土塚墓群全景，D調査区第Ⅲ遺構面全景
PL 7	D調査区第Ⅱ遺構面の土塚墓
PL 8	D調査区第Ⅲ遺構面SD301全景
PL 9	D調査区SD301遺物出土状況
PL10	D・E調査区SD303各部状況
PL11	D調査区第Ⅲ遺構面の遺構
PL12	B調査区弥生土器出土状況
PL13	E調査区第Ⅲ遺構面宝徳寺3号墳全景，F調査区宝徳寺3号墳周溝検出状況
PL14	E調査区宝徳寺3号墳墳頂部礫群全景
PL15	E調査区宝徳寺3号墳墳頂部礫群検出状況
PL16	E調査区宝徳寺3号墳須恵器出土状況
PL17	E調査区宝徳寺3号墳遺物出土状況，E調査区宝徳寺3号墳主体部全景
PL18	E調査区宝徳寺3号墳墳頂部礫群と内部主体の関係
PL19	E調査区宝徳寺3号墳棺出土状況
PL20	E調査区宝徳寺3号墳遺物出土状況
PL21	E調査区宝徳寺3号墳細部状況
PL22	E・F調査区遺物出土状況
PL23	唐津産陶器
PL24	須恵質片口鉢
PL25	須恵質土器

Fig. 22	E調査区SD201土層堆積断面実測図……………22
Fig. 23	E調査区SD201出土土師甕実測図……………23
Fig. 24	E・F調査区第Ⅲ遺構面遺構配置図……………24
Fig. 25	3号墳墳頂部・周溝内須恵器散布状況実測図……………26
Fig. 26	3号墳主体部遺物出土実測図……………27
Fig. 27	第1玉群出土状況実測図……………28
Fig. 28	第2玉群出土状況実測図……………28
Fig. 29	B調査区出土弥生土器実測図……………29
Fig. 30	石鏡実測図……………30
Fig. 31	A調査区出土中国製磁器実測図……………30
Fig. 32	D調査区第Ⅲ遺構面直上包含層出土土器実測図……………31
Fig. 33	D調査区SD301出土土器実測図……………33
Fig. 34	E調査区第Ⅰ遺構面出土陶器実測図……………34
Fig. 35	E調査区第Ⅲ遺構面直上包含層出土土器実測図……………35
Fig. 36	E調査区SD303出土須恵器実測図……………36
Fig. 37	F調査区第Ⅲ遺構面直上包含層出土土器実測図……………38
Fig. 38	土鎌実測図……………39
Fig. 39	D調査区出土銅錢……………40
Fig. 40	3号墳墳頂部須恵器壺実測図……………40
Fig. 41	直刀実測図……………41
Fig. 42	刀子状鉄器・槍実測図……………42
Fig. 43	勾玉・小玉実測図……………43

中内遺跡表目次

	頁
表1	E調査区水田址足跡計測値表……………21
表2	勾玉・小玉観察表……………58
表3	各調査区出土遺物集計表……………61
表4	D・E・F調査区層位別出土遺物集計表……………65
表5	出土土器観察表……………69

中内遺跡挿図目次

	頁
Fig. 1	中内遺跡周辺の主要遺跡…………… 2
Fig. 2	中内遺跡地形測量図…………… 3
Fig. 3	D調査区の分層発掘…………… 5
Fig. 4	調査風景…………… 6
Fig. 5	現地説明会風景…………… 7
Fig. 6	A調査区北壁土層堆積断面実測図…………… 8
Fig. 7	B・C調査区北壁土層堆積断面図…………… 9
Fig. 8	D調査区土層堆積断面実測図…………… 10
Fig. 9	E調査区土層堆積断面実測図…………… 12
Fig. 10	F調査区北壁土層堆積断面実測図…………… 13
Fig. 11	A調査区遺構配置図…………… 14
Fig. 12	D調査区第Ⅰ遺構面遺構配置図・D調査区第Ⅱ・Ⅲ遺構面遺構配置図…………… 16
Fig. 13	土坟墓SK201実測図…………… 18
Fig. 14	土坟墓SK203実測図…………… 18
Fig. 15	土坟墓SK204実測図…………… 19
Fig. 16	土坟墓SK210実測図…………… 19
Fig. 17	土坟墓SK211実測図…………… 19
Fig. 18	土坟墓SK212実測図…………… 20
Fig. 19	土坟墓SK213実測図…………… 20
Fig. 20	E調査区第Ⅰ遺構面遺構配置図…………… 21
Fig. 21	E調査区第Ⅱ遺構面SD201実測図…………… 22

PL26	中国産磁器
PL27	D・F調査区出土の墨書土器
PL28	D調査区第Ⅲ遺構面出土須恵器
PL29	各調査区出土土器
PL30	B・C調査区出土弥生土器、石鏡
PL31	D・E・F調査区出土土器
PL32	F調査区出土土師器
PL33	F調査区宝幢寺3号墳墳丘上出土須恵器
PL34	宝幢寺3号墳出土鉄器
PL35	宝幢寺3号墳出土玉類

山の下東遺跡挿図目次

	頁
Fig. 1	調査風景……………90
Fig. 2	山の下東遺跡遺構配置図……………91
Fig. 3	中世遺構実測図……………93
Fig. 4	SD04南壁溝内土層堆積断面実測図……………94
Fig. 5	中世遺物実測図……………95
Fig. 6	第2層出土の有舌尖頭器……………95
Fig. 7	有舌尖頭器実測図……………95

山の下東遺跡図版目次

PL1	山の下東遺跡全景、山の下東遺跡SD03・04全景
PL2	山の下東遺跡遺構検出状況
PL3	山の下東遺跡遺物出土状況
PL4	中国産磁器
PL5	中世陶器・瓦器

I 遺跡の位置と環境

中内遺跡は鳴門市大麻町池谷字中内52～60に所在する。白亜系の和泉層群よりなる阿讃山脈の東端部に広がる低い支脈間に形成された小群状地の一つにある。現在の地目は水田、果樹園となっており、標高7.50m前後を測る。本遺跡のすぐ西側には前方後円墳2基を含む11基の古墳から構成される天河別神社古墳群（菅原編 1980）が、東北側には古式の柄鏡式ブランを呈す前方後円墳、宝幢寺1号墳（立花 1971）が位置する。

大麻町周辺での遺跡の展開は、検、大谷地区での有舌尖頭器の採集（天羽 1976）や森崎貝塚（鈴木 1972）など弥生時代以前に遡って認められるが、極めて限定されている。これに対し、古墳時代に入ってから遺跡の形成は飛躍的に発展する。当該地域では東を大谷川、西を板東谷川によって区画された山塊裾に数多くの古墳が造営されており、徳島県での古墳時代の提点的地域の一つであったことが看取される。このうち主要なものを列挙すると庄内～布留Ⅰ式に構築されたと考えられ、画文帯神獸鏡を出土した前方後円形状の突出部を有す積石塚を中心に、後期の小竪穴式石室墓に至るまで24基の埋葬施設を形成する萩原墳墓群、宝幢寺古墳群、半三角縁二神二獸鏡など3面の舶載鏡をもつ天河別神社古墳群が前期から中期にかけていずれも前方後円墳を盟主墳とした群構成を形づくっている。

後期古墳では小群集墳が数多くある。葛城神社古墳を中心とする地域、孫太郎谷古墳群、東中谷古墳群、東平草古墳群、西平草古墳群、大麻比古神社古墳群、水車小屋古墳群、春日神社古墳群などがあり、春日神社古墳群ではTK43の須恵器（田辺 1960）埴輪を採集した。現行では各支脈による群認識が行なわれているが、将来的には統合把握させうる可能性を温存している。これらの小群集墳については、いずれも過去の破壊・盗掘が徹底され、その実態研究に迫り難い側面を有しているが、横穴式石室はぬか塚、葛城神社古墳、東林院穴観音古墳、光勝院西古墳、宮尾神社西山古墳などに導入されているにすぎず（秋山 1976）、大半は当該地域で通有な箱式石棺、小竪穴式石室などの小埋葬施設であることが予想される。徳島県での他地域の横穴式石室の展開に比べるとやや特異な在り方を指摘できよう。

歴史時代に入ると、吉野川平野の低地部に開発が進み、大麻町板東から川崎にかけて条里的地割の遺存がみられる。東方の三俣、市場・高畠にも及び、五反田、十八という小字名も残されている（秋山 1976）が、明確な条里制としての確証に乏しい憾みがある。寺

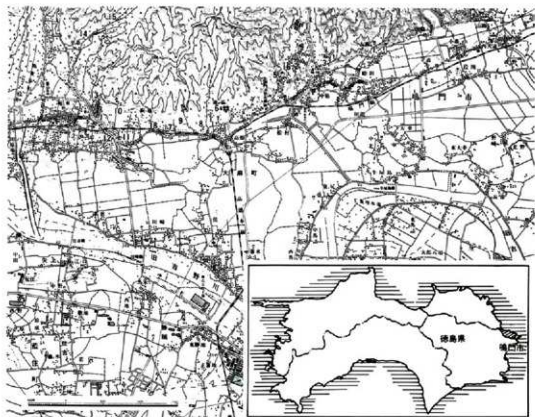


Fig. 1 中内遺跡周辺の主要遺跡

- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| 1. 大森貝塚 | 7. 中内遺跡 | 13. 東平草古墳群 |
| 2. 森崎貝塚 | 8. 天河別神社古墳群 | 14. 西平草古墳群 |
| 3. 葛城神社古墳 | 9. 萩原墳墓群 | 15. 桶殿谷古墓 |
| 4. 大谷貝塚 | 10. 光勝院寺内遺跡 | 16. 中山竊址 |
| 5. 東林院六観音古墳 | 11. 春日神社古墳群 | 17. 山の下東遺跡 |
| 6. 宝幢寺1号墳 | 12. ぬか塚 | 18. 山の西遺跡 |

院址では検の現極楽寺周辺から平安時代後期に比定される単弁蓮華文軒丸瓦や布目瓦の出土が確認される(徳島県博物館 1974)。また、平草の浄土寺跡には多数の布目瓦の散布があり(浪花・三好 1964)、いずれも寺域の規模、伽藍配置などについて不明であるが、立地関係においては古墳時代以来の限定された空間を利用してあり、低地部が生産空間としてのみ占有されたことは遺跡の乏しいことから推測される。

一方、注目すべきものとして、板東の桶殿谷古墓が挙げられる。標高65mの山塊緩傾斜地に位置する本遺跡は、凝灰岩製の印籠形式をもつ蔵骨石櫃を割石によって被覆した洗骨墓である。延喜通宝、金銅製大刀、小刀子、磁石が出土しており、平安時代初頭に位置付けられている(末永、島 1962)。古代末から中世にかけては律令制解体に伴う荘園の増加

が当該地域でも無関係ではなく、石清水八幡宮領である堀江荘の成立（保延四年 1138年）と共に地域開発の進行したことが窺われ（一宮 1966）、室町時代館址としては、土居城、野中城、保崎城、姫田城、板東城が古文書に散見される（一宮 1966）。しかし、これらの遺跡の実態は把握されてはおらず、今後中世村落を含めた考古学的検討を必要としよう。

近世に入ると大谷地区で阿波蜂須賀藩中山黨の創業（安永九年 1780年）と共に、民窯の成立が認められ（豊田 1974）、半磁器から雑器への生産が行なわれている。灰原の一部も確認され、胎土・焼成・器種もある程度明確になったため⁽¹⁾、具体的な供給量の度合いについて県下での出土量を選別、分析してみる必要がある。

極めて粗い素描を行ってきたが、当該地域での考古学的調査は端緒についたばかりであり、今後検討すべき課題は多いといえる。

II 調査の経過

県道鳴門・池田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和51年春の分布調査の結果に基づき、鳴門市大麻地区では昭和52年度の『大谷貝塚』（立花ほか 1979）に始まり、昭和53年の『天河別神社古墳群』（菅原編 1980）、『山の下東遺跡』、昭和54年の『萩原墳墓群』第1次調査、『中内遺跡』、『孫太郎谷遺跡』などが相次いで行なわれてきた。今回報告の対象とする中内遺跡は、昭和54年度の調査の一つで、昭和54年11月2日から昭和55年4月26日までの間に1400m²にわたって行なったものである。調査区の設定にあたっては、現行の水田区画を基にA～F調査区の大地区を設定し、さらに道路建設用中心杭N.O.83を基点とし、東西南北に5×5mの地区割を行ない、小地区表示とした（Fig. 2）。この間、道路工事計画の調整に伴い、調査の中断、調査地区の変更などを余儀なくされ

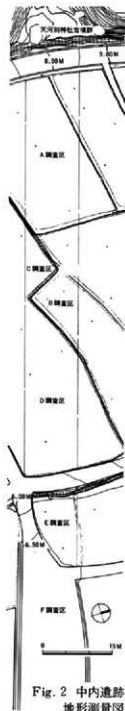


Fig. 2 中内遺跡
地形測量図

たこともあり、必ずしも順調に調査が進んだ訳ではない。

以下、調査日誌を抄述し、経過の記録とする。

調査日誌抄

1979. 11. 2 調査を開始する。現行の水田区画を基に調査区をA-E調査区に設定、E調査区の耕作土、床土の除去、地形測量を始める。

11. 6 E調査区第7層精査。ブロック状に点在している黄褐色砂が足跡であることを確認する。同一面で浅い溝(SD111, 112)を2条検出。遺構のベースは黄灰色粘質土で遺物は細片となっており、かつ量的に僅少であることから、ある時期の水田面と考えられる。第I遺構面として把握。

11. 8 E調査区第I遺構面の写真撮影。実測準備にかかる。D調査区の表土剥ぎを開始する。

11. 16 E調査区第I遺構面の遺存の良好な足跡を石膏で型どり。

11. 20 E調査区第I遺構面の精査終了。最も新しい遺物は唐津産陶器類であり、近世水田址であることを確認する。掘り下げを始める。

11. 22-27 A, B, C調査区の耕作土除去。

11. 29 E調査区第II遺構面の流路検出(SD201)。土場、土師質皿など出土。

12. 4 E調査区第11層掘り下げ。

12. 5 E調査区第12層精査。小礫の抜き取りを検出。調査区の東側では礫層は認められず、地山にちかい黄褐色粘質土が抜がっていることを確認。この部分で多量の須恵器と共に有溝土錘2点を検出する。性格確認のため、遺物の散布状況の把握を急ぐ。D調査区では近世水田址が抜がっており、多数の足跡を検出。

12. 10 E調査区礫層の除去。D調査区は溝、畦畔と推定されるプランを検出。

12. 11 E調査区礫層の除去。流路状の落ち込み(SD303)であることが判明する。若干の土坑、ピットが認められる。

12. 12 E調査区の須恵器の散布状況を追求する過程で、周溝状のプランを検出。墓である可能性がでてくる。

12. 13 E調査区地山面の黄褐色粘質土を追う。墓と考えたものは若干のマウンドを有している様子で、古墳である可能性が強くなる。

12. 17 E調査区マウンド上に礫群が抜がる。周溝の掘り下げを始める。南壁部分では須恵器片が集中している。流路状の落ち込み(SD303)を掘り下げるが、かなり深い

様子。須恵器甕口縁部片のほか、木片が出土しはじめる。湧水のため、作業はかどらず。

12. 25 E調査区墳丘の全体が明らかとなる。墳頂部には礫群が拡がり、須恵器の散布が認められる。周溝内の資料との接合関係が確認され、古墳と判断する。墳高は極めて低く、礫群の性格を検討する。SD



Fig. 3 D調査区の分層発掘

303は湧水が激しく、調査面積が狭少であるため、完掘を断念する。古墳との関連から谷状地形と判断する。

12. 27 E調査区墳丘上の須恵器の平面実測。越年の準備。

1980. 1. 5 E調査区の調査を再開する。

1. 14 E調査区全景写真撮影。古墳の規模確認のため、道路部分の拡張トレンチ設定についての協議及び準備。

1. 18 D調査区第I遺構面の精査ほぼ終了。

1. 21 県道路建設課、鳴門土木事務所と今後の調査計画、日程について協議。

1. 22 B, C調査区では弥生土器片が出土するが遺構は認められない。

1. 24 古墳の規模確認のためにF調査区を設定し、重機にて直上のクラッシャーを除去。E調査区第12層に対応する包含層がかるうじて残っている。包含層の精査に入る。灰釉、緑釉陶器など出土。

1. 25 A調査区で検出されていた自然流路(SD102, 103)の礫堆積を重機により除去

1. 29 E調査区墳丘精査のため、トレンチを設定し掘り下げをはじめ。鳴門市大麻町大谷で蜂須賀藩窯の中山焼灰原が市の道路工事により露出したとの情報をえ、踏査に行く。

1. 30 D調査区第6層(第II遺構面)の精査。E調査区では木棺痕跡を検出するが、平面プランは砂岩風化土をベースとするため明確ではない。痕跡を追う。直刀と槍状の鉄器を一部検出する。主体部の東半分は基礎工事の終了した道路下に入り込んでおり、調査区拡張のための協議を必要とするため、ひとまず埋め戻すことにする。

2. 4 県道路建設課、鳴門土木事務所と協議。D調査区では土壌墓SK201-204



Fig. 4 調査風景

を検出。

2. 7 F調査区では古墳裾部の周溝を完掘。

2. 8 B, C調査区の精査をほぼ終了する。長崎県教育委員会安楽勉氏ら来訪。

2. 12 F調査区墳丘, 周溝の平面実測。

2. 15 奈良大学 水野正好氏来訪。

2. 18 D調査区の土壌墓群の精査。

2. 22 倉敷考古館 間豎菟子氏来訪。

2. 23 D調査区第9層(第Ⅱ遺構面直上)の精査。榎原考古学研究所 石野博信氏、秋山秀雄氏来訪。萩原墳墓群を案内する。

2. 29 D調査区地山面までの精査をほぼ終了。E調査区古墳の精査を残すのみとなる。道路工事計画との絡みで隣接地の孫太郎谷地区の調査を急ぐ必要があり、本遺跡の調査を中断する。この後残務作業, 協議, 次年度の準備, 出張などあわただしい。

4. 7 新任調査員を迎え, 調査を再開する。E調査区古墳主体部のプラン確認。組合式箱形木棺の直葬と判断する。棺の東側は道路基礎工事で破壊されていた。直刀, 棺の遺存状況は良好で, 刀子状の鉄器を併せて検出する。

4. 8 写真撮影, 平面実測。棺柄の漆被膜をP・E・Gにより補強を始める。

4. 10 遺物の取り上げ。主体部の掘り下げをはじめる。直刀下よりガラス製勾玉, 小玉が出土しはじめ, 精査に追われる。出土レベル, 配置の検討を行なう。

4. 11 多量のガラス小玉検出。写真撮影と実測を繰り返す。

4. 16 主体部棺床直上までの精査を終了。最後まで残っていた棺柄を石膏で固め, 取り上げる。連日見学者が多い。

4. 19 現地説明会。

4. 25 最終の精査。墳丘, 主体部の立ち割り。墓壇は認められなかった。全景写真撮影。

4. 26 残務作業。野外での作業を終了する。



Fig. 5 現地説明会風景

Ⅲ 層 序 (土層の堆積状況)

今回の調査では、現行の水田区画を利用して調査区を設定したが、現水田面上では調査区の高端で約1.24mの比高差があり、東に向かって低くなっている。一方、本地点における黄灰色粘質土をベースとする無遺物自然堆積層の上面はA調査区西端で8.17m、F調査区東端で5.77mを測り、傾斜角 γ_{000} で東方に傾斜している。遺物包含層は、この地山面上に累積しているが、東傾する地形を削平して開田されているため、調査区によって異なった様相を呈している。以下、各調査区の層序を概観することにする。

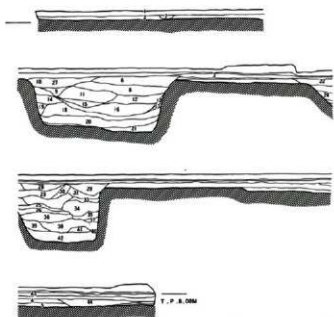


Fig. 6 A調査区北壁土層堆積断面実測図

A, B, C各調査区では地山の一部を削平して現行の水田が造成されている。A調査区の基本的堆積土は、耕作土層(第1層)、床土層(第2層)を認めるにすぎない(Fig. 6)。第2層には古代から近世にわたる多量の土器片が包含されていたが、他の地点から搬入、客土

1. 耕作土
2. 床土層7.5Y R6/8粘質土に褐色7.5Y R6/8粘質土を含む
3. 灰黄褐色10Y R6/2土に褐色7.5Y R6/8土を含む
4. 褐色10Y R6/1土に黄褐色10Y R5/8土を含む
5. 黄2.5Y 5/1粘質土(明褐色5Y R5/8粘質土を含む)
6. 明黄褐色10Y R6/8(褐色10Y R5/1砂を含む) SD 102
7. 黄褐色10Y R4/2粘質土(褐色7.5Y R6/8粘質土を含む) SD 101
8. 褐色10Y R4/1粘質土(褐色7.5Y R6/8砂を含む)
9. 褐色7.5Y R4/1砂(明黄褐色10Y R6/8砂を含む)
10. 褐色7.5Y R5/1土(明黄褐色10Y R6/8砂を含む)
11. 褐色10Y R5/1砂(5m以下の中礫を含む)
12. 褐色10Y R5/1砂(10m以下の大礫を含む)
13. 黄2.5Y 4/1粘質土(5m以下の中礫を含む)
14. 褐色10Y R4/1土(明オリーブ灰5GY 7/1粘質土を含む)
15. 褐色10Y R4/1砂
16. 褐色10Y R5/1砂
17. 黄2.5Y 4/1粘質土(10m以下の大礫を含む) SD - 115
18. 褐色10Y R4/1砂
19. オリーブ灰5GY 砂
20. オリーブ灰5GY 5/1砂
21. 黄2.5Y 6/2粘質土(明黄褐色10Y R6/8砂を含む)
22. 明黄褐色10Y R6/8砂(褐色7.5Y R6/1砂を含む)
23. 黄褐色10Y R7/8砂(明褐色7.5Y R7/1砂を含む) SD 103
24. 褐色10Y R6/1砂(黄褐色10Y R7/8砂を含む)

25. 褐色10Y R5/1砂(明黄褐色10Y R6/8砂を含む)
26. 褐色10Y R4/1砂(5m以下の礫を含む)
27. 明黄褐色10Y R6/8砂
28. 黄褐色10Y R7/8砂(明褐色7.5Y R7/1砂を含む)
29. 黄褐色10Y R7/8砂(灰白10Y R7/1砂を含む)
30. 明黄褐色10Y R6/8粘質土(褐色7.5Y R7/1粘質土を含む)
31. 黄褐色7.5Y R7/2粘質土(褐色10Y R5/1砂を含む)
32. 黄褐色10Y R6/8砂(褐色10Y R6/1砂を含む)
33. 褐色10Y R5/1粘質土(明黄褐色10Y R6/8粘質土を含む) 礫を少し含む
34. 褐色10Y R5/1粘質土(明黄褐色10Y R6/8粘質土を含む) 礫をはほとんど含まない
35. 褐色10Y R5/1砂(明黄褐色10Y R6/8砂を含む)
36. 褐色7.5Y R4/1砂
37. 灰白10Y R7/1砂
38. 褐色10Y R5/1砂
39. 褐色10Y R4/1砂
40. 黄7.5Y R7/1粘質土
41. 灰黄褐色10Y R6/8砂
42. 灰白10Y R7/1砂
43. 明褐色7.5Y R7/1土に黄褐色10Y R7/8土を含む
44. 褐色10Y R5/1土に明黄褐色10Y R6/8土を含む

されたものと思われる。一方、B、C調査区では第2層下に明褐色土層、褐色土層、黄灰色粘質土層が堆積しており、面的な拡がりをもっている（Fig. 7）。このうち、約30cmの層厚をもつ黄灰色粘質土層には畿内第Ⅰ様式（新）併行の壺を含む弥生土器片や石鏃が含まれていたが、明瞭な包含層としての在り方を示してはならず、天河別神社古墳群第2次調査でみられた状況と共通するものといえる。

D調査区は西及び北半分が水田造成のために削平されており、遺構の遺存状況は良好とはいえないが、層位的な把握を可能にしている。図示した北壁土層断面では、第Ⅰ遺構面の近世水田址は削平されているが、南壁での所見によると第4層上面に位置することになる。この近世水田址から地山面までの堆積土は、20～50cmを有している。後述する第

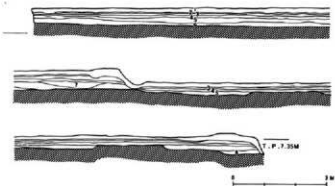


Fig. 7 B・C調査区北壁土層堆積断面図

1. 耕作土
2. 床土灰黄褐10Y R5/2粘質土に暗褐7.5Y R5/6粘質土を含む
3. 灰黄褐10Y R6/2土に橙7.5Y R6/8土を含む
4. 明褐色7.5Y R7/1土に黄褐10Y R7/8土を含む
5. 褐灰10Y R6/1土に黄褐10Y R5/6土を含む
6. 黄灰2.5Y 5/1粘質土に明褐7.5Y R5/6粘質土を含む
7. 褐灰10Y R6/1土に明黄褐10Y R6/6土を含む
8. 黄灰2.5Y 6/1粘質土（明黄褐10Y R6/8粘質土を含む）

Ⅱ遺構面として捉えた土坑墓群は第6層から掘り込まれており、明らかに近世水田址に先行するものである。第7、8、9層は須恵器、土師器のほか、緑釉、灰釉陶器片を含む包含層となっている（Fig. 8）。

本調査区中、最も模式的な整層状態を保っているのはE調査区であり、現代層から地山面までの間に12の堆積層が90cm～1mの厚さで存在している。ほぼ水平な在り方を呈しており、分層的な年代把握を可能にした。ここでは北壁断面図を基に説明を加える（Fig. 9）。第1～5層は近、現代水田耕作土層及び床土層で層厚約30cmを測り、3枚の耕作面が累積している。第6層は灰黄褐色砂層で土師質雑器、焼締陶器細片を含んでいる。同一層中に細砂礫層をバンド状に含んでおり、一時的な出水による所産と思われる。第7層は、層厚14cmを測る黄灰色粘質土をベースとする近世水田耕作土層で、炭化物を含んでいる。上面が砂層に覆われていたため、遺存状況は良好である。若干の土器片を含んでいるが、最も新しい年代様相を示す資料は、唐津産陶器であり、経営の大略の時期決定を可能として

いる。第8層は、黄灰色土でつき固められている近世水田址床土層であり、層厚約10cmを測る。第9層は、非常に固く締った黒褐色小砂礫層で、ほぼ水平な層位を保っている。土師質土器細片が多く混入しており、近世水田址造成前の整地面として把握できる。第10層は、灰黄褐色泥土層で土器細片を含んでいる。第Ⅱ遺構面として捉えた自然流路（SD 201）は本層を切り込んで流れている。第11層は層厚20cmを測る黄灰色混土礫層で、磨

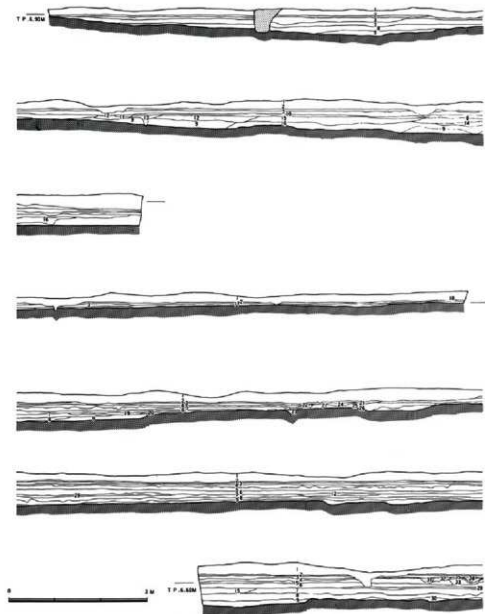


Fig. 8 D 調査区土層堆積断面実測図 (上北壁・下南壁)

1. 耕作土
2. 床土明礬7.5Y5/8粘質土に灰黄2.5Y6/2粘質土を含む
3. 灰黄褐10Y R6/2土に橙7.5Y R6/8土を含む
4. 明黄褐10Y R6/8粘質土に暗灰黄2.5Y5/2粘質土を含む
5. 灰黄2.5Y6/1粘質土に明黄褐2.5Y6/8粘質土を含む
6. におい黄2.5Y6/3粘質土に明黄褐2.5Y6/8粘質土を含む
7. 暗灰黄2.5Y4/2粘質土(黄褐10Y R5/8粘質土を含む) SD 3 0 1
8. 黄褐2.5Y3/2粘質土(明黄褐2.5Y6/8細砂を含む)
9. 黄褐2.5Y5/6粘質土に暗灰黄2.5Y5/2粘質土を含む
10. 灰黄褐10Y R4/2粘質土に黄褐10Y R6/6粘質土を含む
11. 灰黄2.5Y6/2粘質土に明黄褐10Y R6/6粘質土を含む
12. 黄褐2.5Y5/3粘質土に黄褐2.5Y5/6粘質土及び明黄褐10Y R6/8細砂を含む(3cm以下の礫を含む)
13. 灰黄2.5Y4/1粘質土に明黄褐10Y R6/8砂を含む
14. 灰黄2.5Y6/1粘質土に明黄褐10Y R6/8粘質土を含む
15. 黄褐2.5Y5/3粘質土に黄褐2.5Y5/6粘質土及び明黄褐10Y R6/8細砂を含む(10cm以下の礫を含む)
16. 灰黄2.5Y5/1粘質土に明黄褐10Y R6/8粘質土を含む
17. 黄褐2.5Y5/4粘質土に明黄褐10Y R6/6砂を含む(3cm以下の礫及び砂粒を含む)
18. におい黄褐10Y R4/3粘質土
19. 明黄褐10Y R6/8砂に黄褐2.5Y5/3粘質土を含む
20. 明黄褐10Y R6/8粘質土に灰黄2.5Y5/1粘質土を含む
21. 明黄褐2.5Y6/8粘質土に灰黄2.5Y6/2粘質土を含む
22. 黄褐2.5Y5/3粘質土(明黄褐2.5Y6/8粘質土を含む) SD 1 0 5
23. 灰 N 6 粘質土に明黄褐2.5Y6/8粘質土を含む
24. 灰黄2.5Y4/1粘質土(明黄褐10Y R6/8粘質土を含む) SD 1 0 4
25. 灰黄2.5Y6/1粘質土に黄褐10Y R7/8粘質土を含む
26. 黄褐2.5Y5/3粘質土に明黄褐10Y R6/8砂を含む
27. 黄褐2.5Y5/4粘質土に明黄褐10Y R6/6砂を含む(10cm以下の礫及び砂粒を含む)
28. 暗灰黄2.5Y4/2粘質土に明黄褐10Y R6/8砂を含む
29. 明黄褐2.5Y6/8粘質土に灰黄2.5Y5/1粘質土を含む
30. 黒褐10Y R3/1粘質土に灰白10Y R7/1粘質土を含む
31. 明黄褐2.5Y6/8粘質土(暗灰黄2.5Y5/2粘質土を含む) SD 1 0 7
32. 黄褐2.5Y5/4粘質土に明黄褐2.5Y6/8粘質土を含む
33. 黄褐2.5Y5/3粘質土(明黄褐10Y R6/8粘質土を含む) SD 1 0 8
34. 暗灰黄2.5Y5/2粘質土に明礬7.5Y R5/8粘質土を含む
35. におい黄2.5Y6/3粘質土(橙7.5Y R6/6粘質土を含む)

滅した土器片を包含する整地層である。土坑(SK301, 302)は本層上面より掘削されており、平安時代に属す土師器塚、有溝土鍾(大野1978)、管状土鍾を出土した。従って本整地層はそれ以前に遡ることが確実である。しかし、本層及び上層に生活遺構は認められず、整地の目的は本調査区内では明確にし難い。第12層は褐灰色粘質土層で、第Ⅲ遺構面直上に形成された包含層である。奈良～平安時代にわたる遺物を多量に出土した。本調査区では、この層直下に古墳、流路(SD303)が位置することになる。

F調査区は調査以前にすでに道路基礎工事によるクラッシャーが搬入されていたため、かろうじてE調査区第12層の拡がりが見逃されていたにすぎないが、遺物の出土は質、量共に調査区中最も優れており、かつ層厚を有している(Fig.10)。墨書のある須恵器杯、緑釉陶器塚等が出土した。

述べてきたように調査区の基本的層序はE調査区に典型的に示されており、各時代の包含層、遺構面が累積している。これらの層は比較的拡がりを見逃していたと推定されるが、A

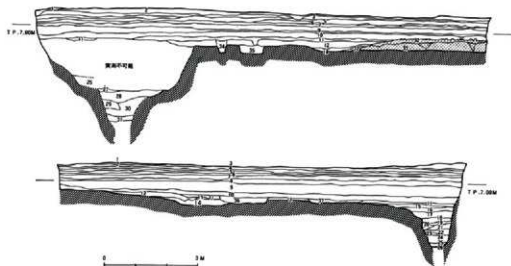


Fig. 9 E 調査区土層堆積断面実測図

(上北壁・下南壁)

1. におい黄褐10Y R4/3土 (表土)
2. 褐灰10Y R5/1粘質土
3. 橙7.5Y R6/8粘質土に暗灰黄5/2粘質土をブロック状に混える
4. 明黄褐10Y R6/8粘質土に暗灰黄5/2粘質土ブロック状に混える
5. 明黄褐10Y R6/8粘質土に灰黄褐10Y R6/2粘質土をブロック状に混えるマンガン砂粒を含む
6. 灰黄褐10Y R5/2砂層
7. 黄灰2.5Y6/1粘質土に明褐7.5Y R5/8砂質土を混える (炭化物を混える近世水田面)
8. 黄灰2.5Y5/1粘質土に明褐7.5Y R5/6砂質土を含む(砂粒および1cm以下の小礫を含む)
9. 黒褐10Y R3/1粘質土を含む砂礫 (砂礫90%以上層に粘質土多い)
10. 灰黄褐10Y R4/2粘質土に明褐7.5Y R5/6粘質土を混える(砂礫および1cm以下の小礫を含む)
11. 黄灰2.5Y4/1粘質土を含む(砂礫90%以上)
12. 褐灰10Y R4/1粘質土 (礫を粒を含む)
13. 褐灰10Y R5/1粘質土 (小粒礫を含む)
14. 褐灰10Y R5/1粘質土 (古墳 周溝充填土)
15. 褐灰10Y R6/1混雑粘質土
16. 褐灰10Y R4/1混砂
17. 灰黄褐10Y R4/2細砂
18. 褐灰10Y R5/1砂礫
19. 褐灰10Y R4/1細砂 (小粒礫をわずかに含む)
20. 褐灰10Y R5/1砂層
21. 褐灰10Y R4/1砂礫
22. 褐灰10Y R4/1砂礫
23. 青灰10B g5/1砂
24. 暗青灰10B g4/1砂礫
25. 青灰5 B g5/1砂礫 (砂主体)
26. 暗青灰5 B g4/1砂礫
27. 暗青灰5 B g3/1粘質土と細砂の混合 (小粒の礫をわずかに含む)
28. 青灰5 B g5/1砂礫
29. 暗青灰5 B g3/1細砂, 礫, 粘質土の混合
30. 青灰5 B g5/1砂礫混合
31. 暗青灰10B g3/1砂層 (細砂主体, 礫をわずかに含む)
32. 黄灰2.5Y5/1粘質土に明黄褐10Y R6/8粘質土をブロック状に混える (砂粒および1cm以下の礫を含む古墳盛土)
33. 黄灰2.5Y6/1粘質土に明黄褐10Y R6/8粘質土をブロック状に混える褐灰10Y R4/1粘質土を含む (砂粒および1cm以下の小礫, および炭化物を含む古墳盛土)
34. 黄灰2.5Y5/1粘質土に明褐7.5Y R5/8砂質土を混える砂礫 (砂粒および5cm以下の礫を含む70% SK312)
35. 灰白2.5Y7/1粘質土に明黄褐10Y R6/8粘質土をブロック状に混える (砂粒および3cm以下の礫を含む50%)
36. 黒褐10Y R3/1礫と炭化物を含む (SK301)
37. 黒褐10Y R3/1粘質土 (小粒礫, 炭化物若干含む SK302)

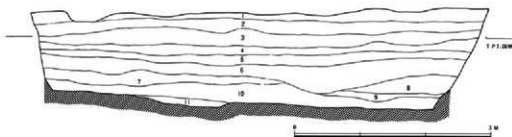


Fig. 10 F調査区北壁土層堆積断面実測図

1. 灰黄褐 10YR6/2土
2. 褐灰 10YR5/1土
3. 褐灰 10YR5/1砂層
4. 褐灰 10YR4/1土
5. 灰黄褐 10YR5/2土
6. 褐灰 10YR4/1凝礫土
7. 黒褐 10YR3/1砂層
8. 褐灰 10YR4/1小礫層
9. 褐灰 10YR5/1砂質土
10. 褐灰 10YR4/1砂と土の混合土
11. 褐灰 10YR5/1凝礫土 (古墳周溝充填土)

—C調査区では、旧地形が削平されているため、その範囲について明確にすることはできなかった。

IV 遺構各説

前章で述べた様に、今回の調査では基本的な層序が整層状態を保っており、分層的な発掘調査を可能とした。特に、D、E調査区では遺構の遺存状況は良好で、3枚にわたる遺構面が認められた。検出された主な遺構には水田址、土塚墓、流路、古墳などがあり、遺構密度は、高いといえないまでも、多岐にわたっている。これらの遺構の所属時期は、本遺跡の土地利用の頻度に応じて古墳時代、奈良～平安時代、安土桃山、江戸時代に大別され、特に中世の遺構に乏しい事実が指摘される。遺物の出土に中国製磁器が比較的多く認められるものの、積極的な生活面として把握するには至らず、土地利用の状況に一つの空白を残している。本地点での本格的な土地利用の開始は、周辺地域の在り方に呼応して、古墳群の造営が活発化する古墳時代中期末に遡り、以後遺物包含層の状況からは、奈良時代に土地利用が更に進行したことが看取される。限定された調査面積の割りには、出土土器量が豊富であり、器種のバリエーションに加え、墨書土器類を伴っている点、隣接地域を含めた該時期の遺跡の性格究明を課題としている。古代以降、再び明瞭な開発行為が認められるのは、近世における水田経営であるが、各時代を通じて居住空間として利用されたこと

は指摘できない。このことは、F調査区東側に位置する微高地が一貫して居住地区として占有されていたことを示唆するものといえ、累積した遺物包含層が微高地に近づくにつれ、層厚を増し、出土土器の質、量が豊富であること等が、この推定を支持している。

これらの問題は、今後、周辺地域をふくめた考古学的検討を通して行なっていかなければならない課題といえ、本報告では一応の見通しにとどめておくこととし、以下、第I遺構面から第III遺構面まで主要な遺構をとりあげて説明することにする。

1 A調査区の遺構 (Fig.11 PL.1.3)

溝 (SD 101) 北東から南西に走る浅い溝で上辺幅40cm、深さ7cmを測る。断面U字形を呈し、須恵器破片が二次埋積していた。

流路 (SD 102) ほぼ北方向から南方向に流れる自然流路で、天河別神社古墳群の位置する山塊裾の谷地形に該当するものと思われる。最大上辺幅約6m、深さ約1.9m、溝底は流水侵蝕により、二段に窪んでいる。遺物は認められず、砂礫によって埋積している。

流路 (SD 103) 北東から南西に流れる自然流路で上辺幅5.5m、深さ1.7m、埋積状況はSD 102と同様である。走行方向からSD 102に合流するものと思われる。

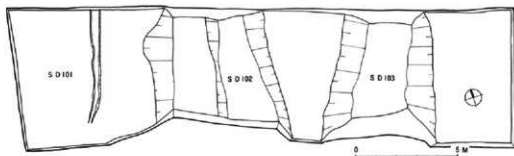


Fig. 11 A調査区遺構配置図

2 D調査区の遺構

(1) 第I遺構面の遺構 (Fig.12 PL.1.4)

水田址 表土下24cmで検出された。水田面レベル6.60m T・Pを測る。一枚の水田を区画するものと思われる水路、大小畦畔、及び足跡から構成されるが、調査区では水口は検

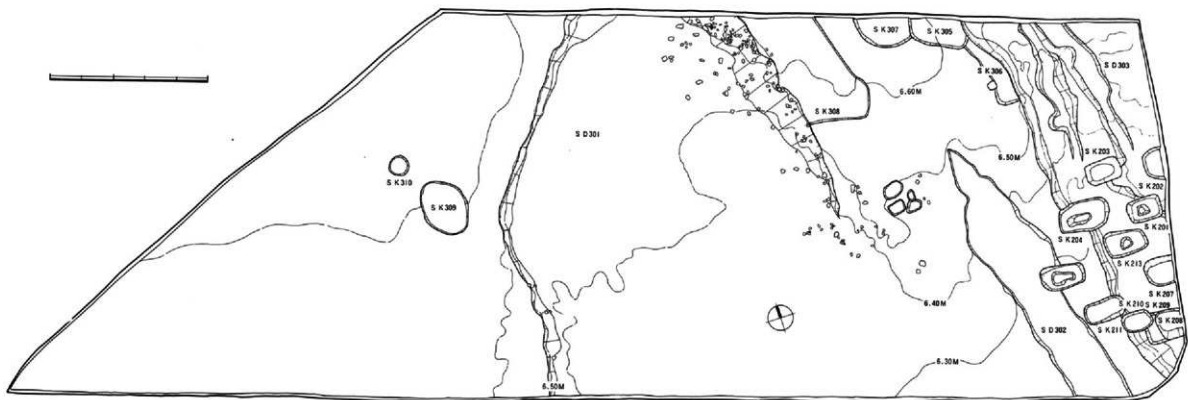
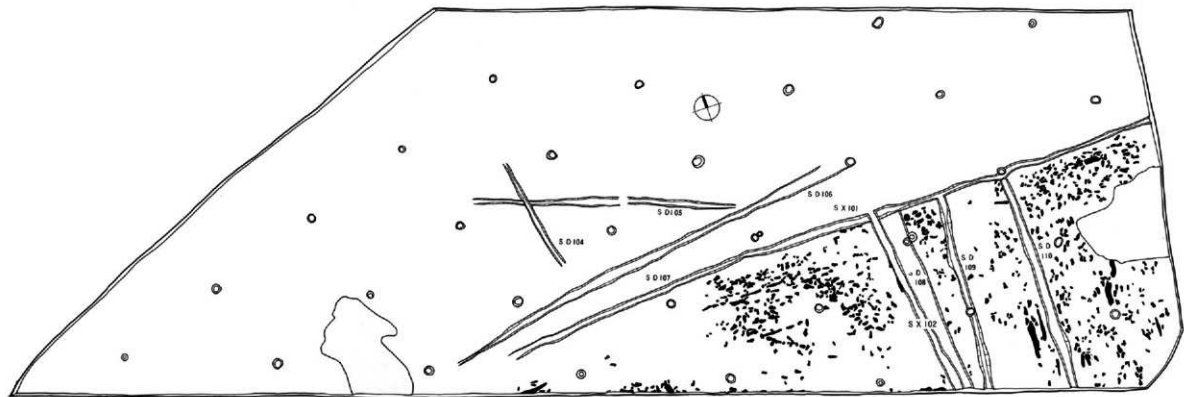


Fig. 12 D調査区第I遺構面遺構配置図・D調査区第II・II遺構面遺構配置図

出されなかった。本調査区で検出された水田址の面積は、約90㎡である。

溝 (SD107) 区画された水田址の北端を大畦畔(SX101)に南接して、南西から北東に直線状に走る小溝で、幅約20cm、深さ約5cmの浅いU字状の断面形状を呈す。東側は削平されているため、追求しえなかったが、残存長21.5mを測る。小規模ながら本調査区の水田址に伴う基幹的水路であり、SD108、109、110に分岐している。土師質土器片が出土した。

溝 (SD110) ほぼ水田中を南北方向に走る小溝で、幅約12cm、深さ約4cmを測る。溝底レベルは平坦であるが、SD107溝底より約4～5cm高い位置にあり、SD107に流れ込む機能を有している。水田内の一時的な排水を行なった溝と考えられる。

溝 (SD109) SD107に直交してT字状に南北方向に走る小溝である。幅約15cm、深さ5cmを測る。SD107溝底レベルより1cm程度高いにすぎないが、位置関係からSD110と同様に排水機能を有するものと思われる。

溝 (SD108) SD107とT字状に交わる幅35cm、深さ2cmの浅い溝である。走行方向はSD109、110と平行しており、同様の機能を考えておきたい。

溝 (SD106) 大畦畔(SX101)に北接して直線状にのびる小溝で、幅約20cm、深さ4cmを測る。規模、走行方向から本渠北側に拮がっていたと思われる水田面に伴う基幹的水路と捉えたい。

溝 (SD104) 北西から東南にのびる溝で一部痕跡を検出したにとどまる。幅約15cm、深さ1cmを残存する。水田址に付属する確証は得られなかった。

大畦畔 (SX101) 水田址に北接して南西から北東に直線状にのびる。畦畔の両側は小溝が走っており、黄褐色の混雑土で固く締められている。調査区東側では削平されているため不鮮明であるが、西側では良好に遺存している。幅1.6mを測り、幹線道路としての機能が強い。

畦畔 (SX102) SX101から分岐する畦畔で、N7Wの方位を有す。本調査区内の水田址を区画する機能を果している。幅約26cm、残存高2cmと低い。水田耕作面と同じ土質で構築されているが、固さによって明瞭に分かれる。本畦畔によって、水田面は二枚存在することが指摘できる。

足跡 (SZ101) 黄灰色粘質土をベースとする水田面に残っており、畦畔部分には認められない。検出された時点では痕跡程度に遺存しているものが多く、その状況は必ずしも良好ではない。大きさ、走行方向、形状に斉性がなく、複数の人間の所作である

ことは確実であるが、具体的な把握はなしであった。一部にたび痕をみとめるものがある。

(2) 第Ⅱ遺構面の遺構 (Fig 13~19 P L 6.7)

第Ⅰ遺構面下第6層で検出された土塚墓の一群を遺構面として捉える。11基検出された。主軸方向はほぼ東西に統一されており、楕円形状の平面プランをもつタイプと隅丸長方形を呈すタイプがあるが、棺自体の痕跡は認められない。遺構の集中度は高いが、E調査区における対応層中(第10層)には検出されず、空間的に限定された在り方を呈している。

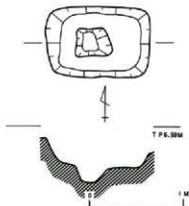


Fig. 13 土塚墓SK 201実測図

土塚墓 (SK 201) (Fig. 13) 長軸1.1m, 短軸62cm, 深さ52cmを測る。坩底中央が2段に方形に掘り窪められている。埋積土は、(1)暗灰色砂質土、(2)暗灰黄色シルト、(3)黄灰色粘質土であり、坩底より竹片、梅実種が出土した。

土塚墓 (SK 202) 調査区東壁に接して検出されたため、全体の規模は明らかにしえないが、短軸1.1mを測る。埋積土は、(1)灰黄褐色粘質土、(2)黄灰色粘質土、(3)明黄褐色シルト、(4)黄灰色粘質土である。

土塚墓 (SK 203) (Fig. 14) 土塚墓群の中ではSK 202と共に北端に位置する。長軸1.14m, 短軸71cm, 深さ49cmを測る。隅丸長方形の平面プランを呈し、断面梯形である。副葬遺物は認められない。

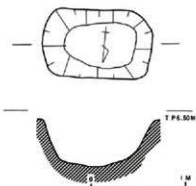


Fig. 14 土塚墓SK 203実測図

土塚墓 (SK 204) (Fig. 15) 本土塚墓中、最大の規模を有す。長軸1.68m, 短軸99cm, 深さ58cmの不整形な楕円形状のプランを有し、坩底中央部は長円形に二段掘りされている。埋積土は、(1)褐色砂質土、(2)暗灰黄色シルトである。

土塚墓 (SK 207) 調査区東壁に接して検出された。短軸97cm, 深さ31cmで楕円形の平面プランを有す。埋積土は、(1)黄灰色砂質土、(2)黒褐色シルトである。

土塚墓 (SK 208) 調査区南東端に位置する。SK 209を切って掘削されている。

隅丸長方形の平面プランを呈す。短軸97cm、深さ44cmを測る。

土壇墓 (SK 209) SK 208, 210に切られている。長方形の平面プランを有するものと思われるが、今ひとつ明確にしえない。短軸1.0m、深さ21cmと浅い。断面梯形を示す。

土壇墓 (SK 210) (Fig. 16) 楕円形の平面プランを有す。長軸98cm、短軸64cm、深さ34cmを測り、本土壇墓群中最も小規模なものである。黒色粘質土の堆積が認められた。

土壇墓 (SK 211) (Fig. 17) SK 210に接して位置する。長軸1.34m、短軸82cm、深さ40cmを測る。坩堝中央部が方形状に掘り窪められている。SK 212と同様、西側がやや拡張している。

土壇墓 (SK 212) (Fig. 18) 土壇墓群中央西端に位置する。不整形な楕円形プランを呈し、西側がやや幅広くなっている。長軸1.42m、短軸78cm、深さ31cmを測る。坩堝中央部が西側に拡張し、2段掘りにされている。(1)暗灰黄色砂質土、(2)黒褐色粘質土の堆積が認められた。

土壇墓 (SK 213) (Fig. 19) SK 210の東に位置する。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸1.34m、短軸82cm、深さ

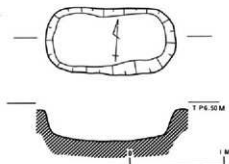


Fig. 17 土壇墓SK 211実測図

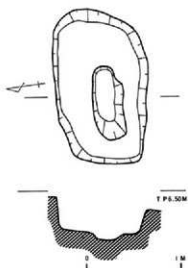


Fig. 15 土壇墓SK 204実測図

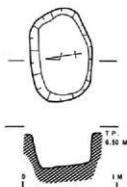


Fig. 16 土壇墓SK 210
実測図

40cmを測る。坩堝中央部が方形状に掘り窪められている。SK 212と同様、西側がやや拡張している。

(3) 第Ⅲ遺構面の遺構 (Fig. 12 P.L. 6, 8, 9, 10, 11)

地山直上に検出された遺構を第Ⅲ遺構面として把握する。明確な生活痕跡を示す遺構の

存在は指摘できず、自然流路、ピットなどが主な遺構である。第8、9層の遺物包含層が示す時期の集落縁辺部を推測させるものである。

流路 (SD301) 調査区中央部を北から南に流れる自然流路である。最大幅10.2m、深さ25cmの浅い皿状を呈している。南西側の肩部は明確ではなく、緩かに消失している。溝内埋積土は、(1)黒褐色粘質土、(2)褐色粘質土、(3)黄灰色粘質土に分離され、淀んでいた状況を推測させる堆積状況を示している。北西から南東に至る肩部、溝底際にかけては拳大の砂岩割石、河原石が集中する箇所が認められる。これらが人為的なものか自然的なものかは今ひとつ明確にはし難いが、他の箇所には指摘できない。遺物は第3層上面に集中しており、墨書のある灰輪陶器坑、土師器、須恵器片など比較的多いが、完形のものは認められない。

溝 (SD302) SD301に平行して東側を南北に走る溝である。調査区の北側では消失しており、その性格については明らかにしえない。確認長9.3m、最大幅2.6m、深さ15cmを測る。土師器、須恵器の細片が出土した。

流路 (SD303) 本調査区東端にSD301、302とほぼ平行して南北に流れる自然流路であるが、南東隅では大きく落ち込んで谷状の地形を呈している。E調査区の流路(SD303)に対応するものと思われる。完掘していないために規模については明確ではないが、谷地形に流れ込む流路状の部位では、上辺幅2.7m、溝底幅94cm、深さ30cmの2段に落ち込んだ梯形の断面形状を呈している。砂、礫、シルトの互層で埋積されており、若干の自然木がみられたが、土器類は検出されなかった。

その他土坑、ピットが、12検出されたがいずれも出土遺物に乏しく、その性格を断定し

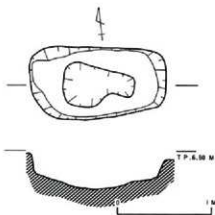


Fig. 18 土坑墓SK 2 1 2実測図

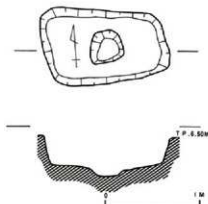


Fig. 19 土坑墓SK 2 1 3実測図

えない。

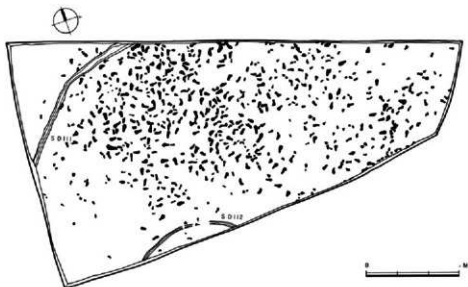


Fig. 20 E調査区第I遺構面遺構配置図

3 E調査区の遺構

(1) 第I遺構面の遺構 (Fig.20 PL2, 5)

水田址 D調査区水田址に対応するもので、標高7.14m、現地表下約38cmで検出された。確認面積71m²を測る。水田面レベルは、D調査区例より54cm高く、棚田の営農形態を指摘できる。水田面上面は、ほぼ平坦で傾斜は認められない。水田面東西には小溝2本が孤状に走っており、溝の内側には多数の足跡が遺存していた。従って溝によって区画された部分が一枚の水田面である可能性が高いが、D調査区の水田区画とは方向を異にしている。

溝 (SD111) 調査区西北端を東西に孤状に走る溝である。上辺幅14cm、深さ3cmを測る。溝内堆積土は黄褐色砂である。

溝 (SD112) 調査区南西端で検出された孤状の溝で、僅かに溝底痕跡を追求しえたにとどまる。幅10cmを測る。

足跡 (SZ102) 足跡の密度はD調査区よりも高く、遺存

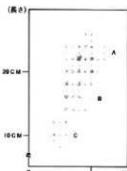


表1 E調査区水田址足跡計測値表

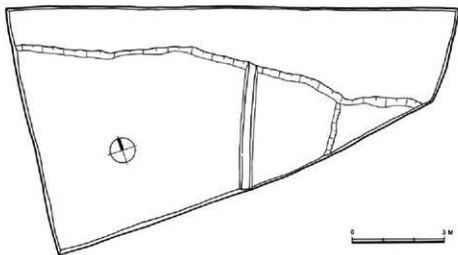


Fig. 21 E調査区第Ⅱ遺構面SD201実測図



Fig. 22 E調査区SD201土層堆積断面実測図

状況も良好である。走行方向について明瞭ではないが、複数の人間の歩行が指摘される。足跡の深さは4cm程度のもが多い。比較的痕跡が明瞭な資料200点を抽出した計測値表に従えば(表

1. 黒褐色2.5Y弱泥土層
2. 褐色10Y R弱泥土層
3. 褐色10Y R弱小礫層
4. 黄褐色2.5Y弱細砂礫層
5. 黒褐色10Y R弱シルト層

1), 長さ, 幅が20×10cm以上のもの(A類型), 15~20×8~10cm前後のもの(B類型), 10×10cm以内のもの(C類型)と, 大きくグルーピングすれば最低3類型が認められる。C類型は明らかに小児のものである。足跡は, 調査区中央部以北に集中しており, 親指が明瞭に遺存しているものが確認された。

(2) 第Ⅱ遺構面の遺構(PL2)

第Ⅰ遺構面下約24cm, 第10層で検出された落ち込みを一時期の遺構面と捉える。D調査区第Ⅱ遺構面とは, 層位的には対応しないが, 第9層を水田造成のための整地と理解する限り, 時間的な懸隔はさほど指摘できず, 一応同時期の遺構面としておきたい。

流路 (SD201) (Fig. 21) 北東から南西に流れる自然流路である。西流するが、南立ち上がり部を把握できず、D調査区第Ⅱ遺構面土坑墓群を考慮すれば、落ち込み状の溜りである可能性も残される。調査区内での確認幅6.5m、深さ28cmの浅い皿状を呈す。溝底はほぼ平坦であるが、南側に向って深度を増しており、調査区東側では約10cmの落差が形成されている。

溝内埋積土は5層に分離され、(1)黒褐色混土礫層、(2)褐灰色混土礫層、(3)褐色小礫層、(4)黄灰色細砂礫層、(5)黒褐色シルト層となる (Fig. 22)。第4層より加工痕のある木片、土塊片 (Fig. 23)、須恵質三筋壺片が出土した。

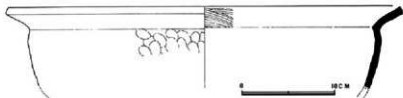


Fig. 23 E調査区SD201出土土師質壺実測図

(3) 第Ⅲ遺構面の遺構 (Fig. 24 PL13, 14, 15, 16)

現地表下88~116cmの間、地山直上で検出された一連の遺構を総称する。流路、土坑、ピット、古墳がある。土坑 (SK301, 302) は、黄灰色混土礫整地層から掘り込まれており、他の遺構とは検出レベル、構築年代に懸隔を生じているが、ここでは同一面のものとして整理しておく。

土坑 (SK301) 直径1.5mを測る円形の土坑である。調査区南壁に接しており、完掘していないが、深さは10cmを測り、古墳周溝部分に切り込んでいる、遺構内は炭で充填されており、土師器塊、須恵器、有溝土錘、管状土錘を出土した。平安時代の所産と思われる。

流路 (SD303) D調査区SD303に対応する自然流路で、推定幅11m、深さ2.5m以上を測る。谷状の落ち込みを形成しており、東側は尾根形状を呈すことになる。溝内堆積は砂、礫、シルトの互層となっており、湧水を認めた。現地形からは、北東から南西に流れるものと思われる。壁面崩壊のため層位を明示できないが、掘り方上面から1m下あたりで多数の自然木、溝状の切り込み痕をもつ木片が出土し、その下の礫層より芥

生土器片、サヌカイト片、須恵器甕・坏片などが出土したが、出土量自体は極めて少ない。

土坑(SK311) 流路(SD303)の掘り方に接して検出されたが、西側部分はSD303によって切られている。弥生土器片が出土した。

古墳(SF301) 表土下約80cmで検出された。本調査区中央部から東側にかけて、構築されており、墳丘の東漸部はF調査区で検出された。墳丘の上面は層厚20cmの第12層に覆われており、良好な遺存状態を保っていた。墳丘の西漸部から流路(SD303)までの距離は6mである。

墳丘構築以前の旧地形は、周溝西側掘り方上面の標高6.40m、東側掘り方上面の標高5.85mを測り、南に緩かに下降する状態を呈している。微地形の復元と航空写真判読によれば、本地点は宝徳寺1号墳の位置する尾根が南下する部位にあたり、現地形は第1～12層にみられる整地、堆積、水田開発行為により平坦化しているが、本来は独立した尾根であることが確認された。従って本古墳を徳島県遺跡目録による宝徳寺古墳群の一基として捉え、以後正式名称を『宝徳寺3号墳』としたい。

墳形・外部施設 墳形は調査区外での拡がりを確認しえなかったため断定できないが、直径11.3m、高さ50cmを測る円墳と推定される。墳丘基底部の高さはE調査区で6.25m、F調査区で6.10mを測り、南に下降する尾根鞍部に位置している。

墳丘は地山のベースとなる黄褐色粘質土を約40cm盛って構築されている。極めて低い墳丘を有しており、所謂「低塚」とも呼びうるものである⁽³⁾。墳頂部から6.55mコンターライン周辺にかけて、約11m²

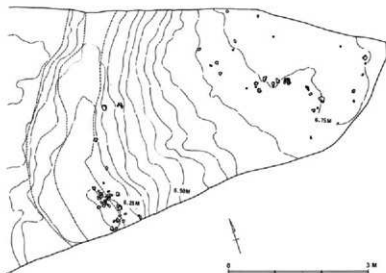


Fig. 25 3号墳墳頂部・周溝内須恵器散布状況実測図

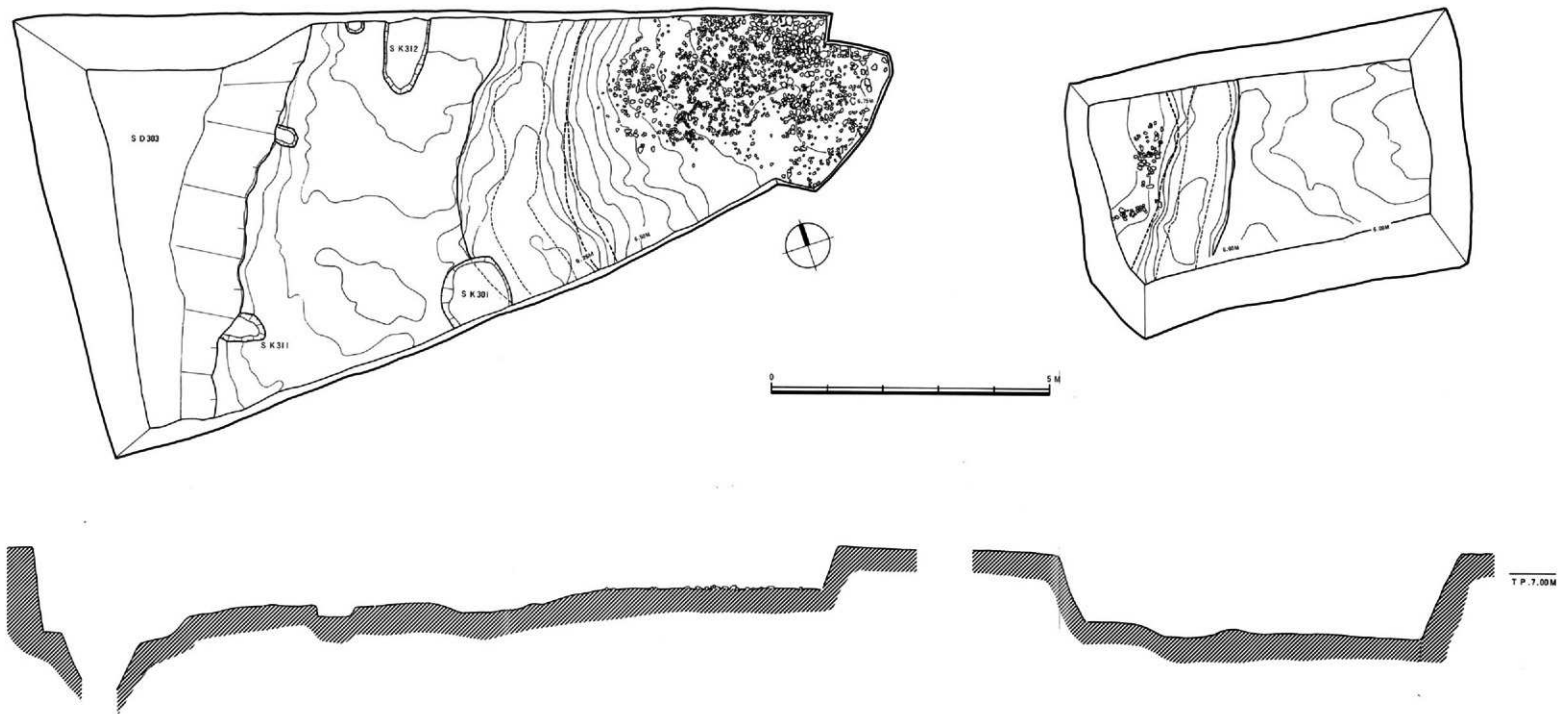


Fig. 24 E·F 調査区第Ⅲ遺構面遺構配置図

の範囲にわたって拳大の砂岩礫が不整形に拡がっているのが認められた。礫群中には平行叩きをもつ須恵器壺片が散布しており、墓上祭祀の行なわれたことが判明した。礫群は砂岩割石を用いているが、大きさ、密度にまとまりがない。葦石的な機能よりは内部主体を対象とする外部表象として捉えておきたい⁽⁴⁾ (Fig 25 P L14, 15, 16~21)。

墳丘裾には地山を掘削して、最大幅1.4m、深さ約20cmの浅い皿状の断面を呈した周溝がめぐっている。(1)褐灰色粘質土、(2)黄灰色粘質土の堆積が認められ、第2層上面に墳頂部の須恵器壺の一部が流れ込んでいた。

内部主体 墳頂部礫群下、約15cmで長方形の平面プランをもつ木棺痕跡が一基検出された。主軸をN72°30'Wに向けて位置する木棺直葬である。主体部の東側部分はすでに道路基礎工事で攪乱されており、全体の形状は明確ではないが、幅95cm、残存長1.8m、床面までの深さ40cmを測る。

棺床は、ほぼ平坦であるが、中央部から若干東に向って低くなっている。壁面の立ち上がりから組合式木棺と推定される。床面は地山面をそのまま使用しており、粘土の敷設、墓坑は認められない。盛土の小規模性ともあわせて、墳丘築成と埋葬が同時に行なわれ、その上に礫群が敷設されたものであろう。

副葬遺物

副葬遺物には直刀1、槍1、刀子状鉄器1、琥珀製勾玉2、翡翠製勾玉1、ガラス製勾玉1、ガラス製小玉164以上がある。

副葬遺物の出土状況 (Fig 26 P L17~20)

検出された副葬遺物は、棺中央部から西に認められ、玉類の出土位置から西枕の安置方法と推定される。直刀は棺中軸線に平行して南寄りに刃先を西に、峯部

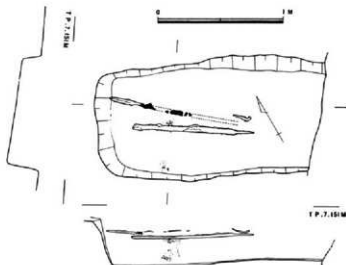


Fig. 26 3号墳主体部遺物出土実測図

を北にして置かれていた。棺は、ほぼ棺中央に刀先を西にしており、柄はやや直刀の方に向い、東のびていたが、柄の先端の状況については不明である。穂先に鞘の痕跡は認められなかった。刀子状鉄器は、直刀、棺柄の北側、棺のほぼ中央部に位置していた。

玉類は棺中央部、西小口部分より50cm東にみられる翡翠製ガラス製勾玉、小玉の一群（第1玉群）と棺南壁に接してみられる琥珀製勾玉を含むガラス製小玉の一群（第2玉群）に分かれる。第2玉群は第1玉群に比べ、数量的には劣るが、相対的に大きなもので占められており、使用目的を異にしていたことを示唆するものといえる（Fig. 27, 28）。

遺物の検出レベルは直刀、棺、刀子状鉄器が木棺痕跡検出面から10cm下、床面より20cm上位にあり、ほぼ同一レベルで並んでいる。玉類はそれぞれに若干のレベル差があり、棺床ちかくまで至っているものがある。このことから考えると鉄器類は木棺蓋上に安置されていたものと推定される。



Fig. 27 第1玉群出土状況実測図

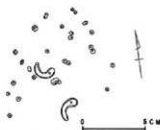


Fig. 28 第2玉群出土状況実測図

V 遺物各説

今回の調査で得られた資料は、すべての整理を終了していないが、弥生土器から古墳時代の須恵器、古墳副葬の各遺物、奈良、平安時代の須恵器、土師器、土唾、中、近世の磁器、陶器、須恵質土器、土師質土器など多岐にわたる。内訳は、表3、4に大別したが、その大半は奈良、平安時代の包含層に伴うものである。その他の資料も比較的良好な包含状況を保っていたが、遺構に伴う一括資料に恵まれなかった。従って、包含層からの出土土器の統計分析により、土地利用の段階的実態性の把握を試みようとするものであるが、もとより包含層の形成には一定の時間的幅を有しており、直ちに各包含層出土資料をもって上記の命題に迫ることはできない。この操作は後章で行うことにし、以下、主要な遺物について説明を加える。なお個々の資料についての形態、技法の説明は、巻末の遺物観察表

(表5)に示した。

1 古代～近世の遺物

弥生土器 (Fig.29 P L29, 30)

B調査区の出土が大部分である。壺の口縁部(6)、頸部(5)、底部(1～4)などがみられ、弥生時代前期に属するものである。いずれも胎土中に粗い砂粒を多量に含んでおり、全体的に脆弱化している。(6)は口径23cmの壺で、指頭圧痕をもつ断面三角形の突帯を3段貼り付け、突帯上部に3帯、下部に5帯のヘラ描き沈線文を配している。明確な包含層からの出土ではなく、一時的な流れ込みと思われ、他の出土資料も胎土からほぼ同時期に属させることができる。当該時期の資料は周辺地域では明確ではなく、数か所指摘される散布地(辻見堂遺跡、旧板東演習場遺跡、大谷川排水路地点など)(秋山 1976)も小規模であり、集落の実態については不明というよりない。

石鏡 (Fig.30 P L30) 調査区の全域から僅かではあるが、出土がみられる。すべてサヌカイトを素材とする打製石鏡である。図示した資料には凹基無茎式石鏡(2, 3, 4, 5, 6, 8, 9)、平基無茎式石鏡(7)、凸基無茎式石鏡(1)があるが、大半は凹基無茎式石鏡で占められている。概して粗い調整刻痕が加えられている。

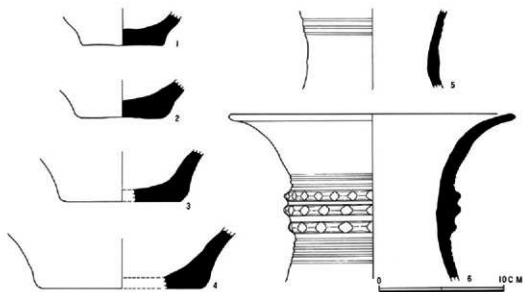


Fig. 29 B調査区出土弥生土器実測図

A調査区出土磁器
(Fig. 31 P L 23, 26)

A調査区では第2層を中心として多くの土器が出土したが、いずれも原位置を遊離している。ここでは中国製磁器を抽出し説明する。

(1)は口径8.4cm

の小型の青磁碗。

(2)は平底の青磁皿

で内底面に象嵌をとどめる。(3)は高台径5cmを測る青磁碗である。外面高台裏まで釉葉が施されており、高台を削り出す。内底面に象嵌をとどめている。これらはいずれも暗緑灰色を呈している。(4)は口径12cmを測る白磁皿で、口縁端に釉葉切れをみせる所謂「口禿白磁皿」と呼ばれるものである。(5)は断面カマボコ状を呈す口縁を付ける灰白磁碗であり、平安時代後期に通有なタイプからは退化している。

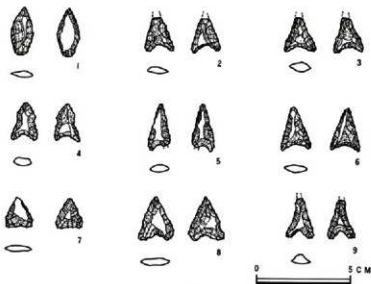


Fig. 30 石炭実測図

D調査区第Ⅲ遺構面直上包含層出土土器

(Fig. 32 P L 24, 26, 28)

第7, 8, 9層を中心とした出土資料である。第7層出土遺物(11, 12, 17, 18, 20)は、鎌倉時代後半を主体とする遺物包含層に伴うものであるが、層厚に恵まれず、量的にも乏しい。

(11, 12)は須恵質の片口鉢口縁部で口縁端がやや内傾する例(11)と外上方に直線状のびるもの(12)がある。胎土中、微砂粒を含んでおり、管見による限り、播磨神出窯系製品(真

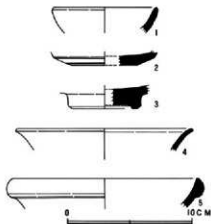


Fig. 31 A調査区出土中国製磁器実測図

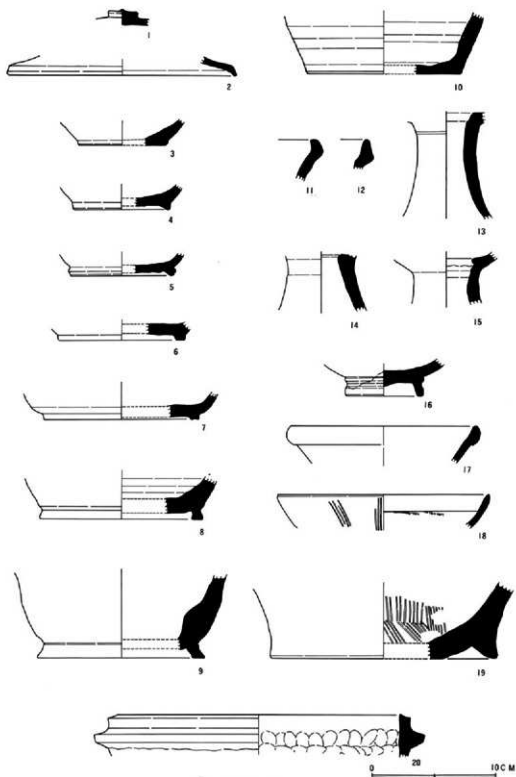


Fig. 32 D调查区第Ⅲ遺構面直上包含層出土土器実測図

野1974、岡崎ほか1976)と認定しうるものである。当製品は平安京城にもかなりの流入が認められるが(鈴木・菅原編 1977、鈴木・松藤・菅原編 1978、宇野 1978)、四国では淡路島沿岸を通じて、鳴門市域にまで認められ(菅原編 1980)、流通範囲が紀淡海峡西部まで拡がっていることは確実である。(16)は灰白磁碗、高台を削り出している。(17)は、断面カマボコ状を呈す灰白磁碗、(18)は、口径17cmを測る同安窯系青磁碗である。体部外面に帯描縦線文、内面に曲線文を施す。暗黄緑色を呈す。(20)は口径23cmを測る土師貫の羽釜で外面髷部と体部の境は入念に指オサエし、内面にも指頭圧痕をとどめる。胎土中、黒雲母片を含んでおり、鎌倉時代末～南北朝期にかけてみられる通有の形態である。

土師器・須恵器は第8、9層から出土したが奈良時代中葉から平安時代初頭にかけての年代観を示している。

土師器 土師器には坏(3、4)と鉢(19)がある。坏は平底のもの(3)と断面三角形の高台を貼り付けるもの(4)が認められる。

須恵器 坏、瓶(壺)、碗、高坏がある。蓋には擬宝珠形の偏平なつまみを有すもの(1)が認められる。坏(5、6、7、8)はいずれも断面方形状の高台を付すが、端部が弱い段を形成するもの(4)、台形状を呈すもの(8)が認められる。いずれも外底面をヘラで切り離しており、削って調整する例は認められない。高坏(3、14、15)はいずれも脚柱部のみ出土である。

D調査区SD301出土土器 (Fig.33 PL25, 27)

溝内第2層を中心とした資料であり、ほぼ奈良時代後半の時期に比定されよう。出土数211点を数えるが、いずれも小片となっている。出土した主な資料には土師器坏(15)、高坏(17)、須恵器蓋(1～3)、坏(4～8)、甕(9～12)、壺(13)、皿(14)、灰釉陶器碗(16)がある。

蓋(1～3)は偏平化したつまみを有するもので、器高も平坦なものになっている。

坏(4～8)は、方形断面の高台を付すが外下方に向かって張り出す例(4、6)と平坦面を形成する例(5、7、8)がある。外底面はヘラで切り離している。

甕は口径25cm以上の大形のもの(9、10)と19cm程度の中形のもの(11、12)に大別しうる。それぞれに口縁端を平坦にするタイプと丸みをもつタイプが認められる。

壺(13)は口径14cmを測る。E調査区第12層出土資料にも類例を指摘することができる。

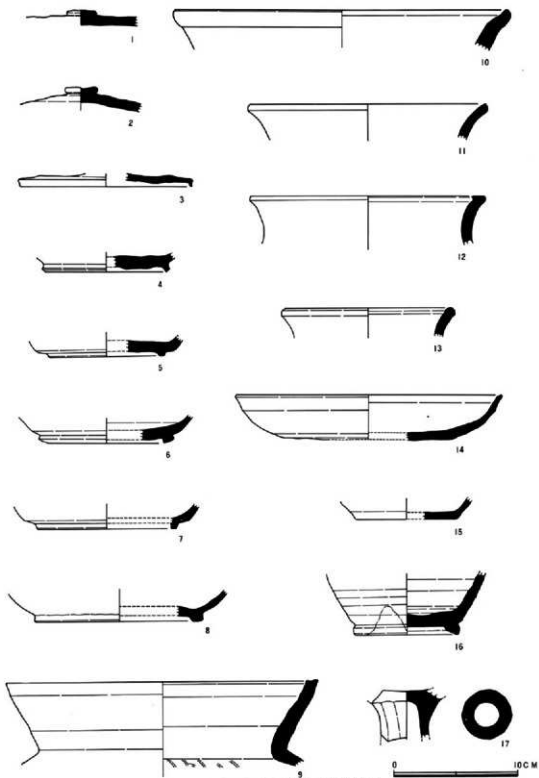


Fig. 33 D調查区SD301出土土器実測図

皿(14)は口径22cm, 器高3.5cmを測る。

灰軸陶器碗(16)は高台径8.3cm, 残存高5cmを測る。断面三角形状の高台を貼り付けており, 外底面には糸切り痕をとどめる。器壁体部外面及び内底面に灰軸を認めるが剝離が進行している。本例は外底面に墨書をとどめており, 「阿」と推定される文字が描かれている(PL27)。

土師器には坏(15)と高坏脚柱部(12, 7)があり, (7)には11面のヘラによる面取りが確認される。

E調査区第I遺構面出土の遺物 (Fig. 34 PL23)

近世水田址に伴って出土した遺物である。水田という性格上, 数量, 種類共に僅少で細片となっている。図示した資料は遺構年代を確定しうる最も新しい時期を示す唐津産陶器碗である。体部が外上方にのびるもの(1), 屈曲して外反するもの(2), 外反して端部を内傾させるもの(3)がある。(4)は高台を削り出した厚手のもので, 三日月高台を有している。

図示した資料の他に岸嶽系の体部内面に叩き目をもつ所謂「朝鮮唐津」の破片があり(PL23), 本遺構面を安土桃山~江戸時代初頭に位置付けることを可能にしている。

E調査区第II遺構面出土の土器 (Fig. 23 PL29)

流路(SD201)溝内堆積土第2層からの出土で, 口径42cmを測る土師質場である。

口縁部は, 「くの字」状に外反し, 端面をややつまみあげる様にして, 平坦に形成している。体部外面には指頭圧痕をとどめ, 口縁部内面にヨコハケ調整を施す。直線状に外反する口縁をもつ資料は, 京都市常盤井殿町遺跡, SE401, SE408出土資料に類例がみられ(鈴木・松藤・菅原編 1978), 室町時代末~安土桃山時代の形態として共通性が認められる。

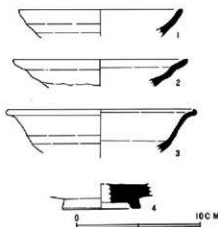


Fig. 34 E調査区第I遺構面出土陶器実測図

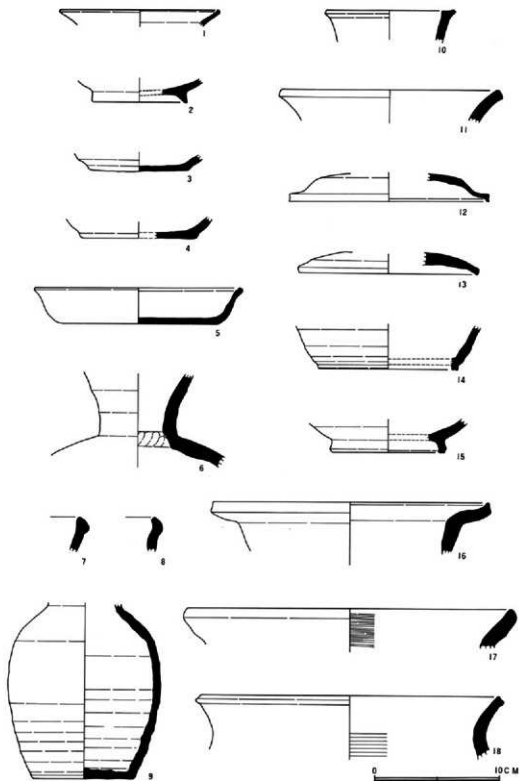


Fig. 35 E調査区第Ⅲ遺構面直上包含層出土土器実測図

E調査区第Ⅲ遺構面直上包含層出土の土器 (Fig.35 P.L.34)

第11, 12層出土資料である。第11層はD調査区第7層よりは明瞭な層厚を有しているが、拡がりに乏しく、出土量もさほど多くはない。

(1)は古瀬戸碗, 口径12.8cmを測る。(7, 8)は須恵器片口鉢である。D調査区出土資料 (Fig.32 11, 12)と時期的に対応している。

第12層出土資料はD調査区第8, 9層と対応する年代相を示しており、土師器、須恵器、灰釉陶器などが認められる。

土師器 土師器には坏(2, 3, 4, 5), 甕(16, 17, 18)があり、その他図示していないが、かまども認められる。坏には断面三角形の高台を付けるもの(2)と平底のもの(3, 4, 5)がある。(5)は口径15.5cm, 器高3cmを測る。口縁端をやや湾曲させており、ヘラ磨きは認められない。奈良時代中葉～平安時代初頭の間に位置付けられるものである。

甕は、いずれも口縁部のみ出土で、底部は確認していないが、体部が卵形を呈すもの(6)と球形を呈すもの(17, 18)が存在するようである。

須恵器 壺(6, 9, 10, 11), 蓋(12, 13), 坏(14)が認められ、土師器の年代観に対応する資料である。

蓋には縁部が屈曲するもの(12)と丸みをもつもの(13)が認められる。坏は低い高台をつける。

瓶(6, 9) (6)は高台を付けるもの。(9)は残存高14cmを測る平底のもので胴部に最大径を有す。

壺は、いずれも口縁部のみ出土であるが、平坦な口縁端面を内外に拡張するもの(10)と丸くおさめるもの(11)がある。

灰釉陶器 台付皿(15)は底径9cmを測る。ハの字形にひろく高台を貼り付けており、丁寧なヘラ磨きが施され、内底面に

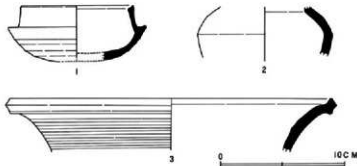


Fig. 36 E調査区SD303出土須恵器実測図

は、青緑色の釉薬が斑点状に認められる。

E調査区SD303出土の土器 (Fig.36)

環 (1)、短頸壺 (2)、甕 (3) がある。環は口径9cmを測る。立ち上がりが高く、やや内傾している。甕は口縁端を平坦に形成するもので頸部にカキ目をとどめる。陶色TK 23ないし47 (田辺 1966) に相当するものであろう。

F調査区出土の土器 (Fig.37 P L34, 35)

第6, 7, 10層出土資料で、D調査区第8, 9層, E調査区第12層に対応するが、調査区の中でも最も良好な包含状態を保っている。出土資料には須恵器蓋、環、甕、土師器環、甕、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。

須恵器蓋 平坦な天井部を有すが、縁部が直線状をなすもの (1) と湾曲するもの (2) があり、(2) は壺に伴う蓋であろう。

環 (3~6) はいずれも断面方形の高台を付すもので外底面はヘラで切り離したままで調整は認められない。体部が直線状にのびるもの (5) とやや内湾気味に立ち上がるもの (6) がある。(6) には内外底面に墨書をとどめており、判読できていないが、何かの文様を描いている。

甕 (7) く の字形に外反する口縁を有すもので角ばった肩部と高台を付する形態のものと思われる。口径15cmを測る。

土師器環 断面三角形の高台を付すもの (11) と平底のもの (12, 13) がある。(13) は口径12.3cm, 器高3.3cmを測る。内底面及び体部外面をナアで調整しており、外底面にはヘラ削りを施す奈良時代の技法をとどめている。胎土中、雲母片を含んでいる。

甕 (15) 短く、く の字形に外反する口縁部をもつもので体部外面は縦方向のハケ目、内面は口縁部と体部を貼りつけたのち、接合面を入念に指オサエして形成している。

黒色土器 (14) 口径18cmを測る甕である。内外面とも器壁が磨滅しているため、明瞭ではないが、ヘラ磨きの痕跡が認められる。胎土中金雲母片をとどめる。

緑釉陶器壺 (8) 土師質のもので口径12.7cm, 器高4cmを測る。緑釉は薄く焼成もややあまい感じを与える。削り出し高台をもち、体部と高台際には明瞭なヘラ削り痕をとどめる。

灰釉陶器 (9, 10) 高台付きの皿と壺が認められる。皿 (9) はE調査区例 (Fig.35

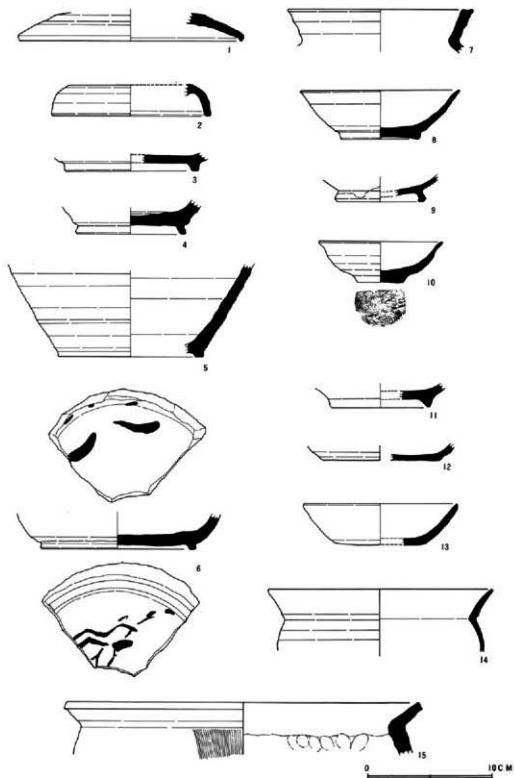


Fig. 37 F調查区第Ⅲ遺構面直上包含層出土土器実測図

—15) よりやや小形のもので、高台の外反度も少ない。内底面に青緑色の釉薬が班文状に認められるが、外面、体部と高台際には軸切れをとどめる。体部外面にはヘラ磨きが施されている。埴(10)は、口径9.8cm、器高3.3cmを測る小形のものでやや外反気味に湾曲する体部を有す。高台裏には回転糸切り痕をとどめる。

その他の資料

土鍾 (Fig. 38 P L 29) 有溝土鍾と管状土鍾が認められる。有溝土鍾はD調査区第8層出土例(1)とE調査区第12層出土例(2, 3, 4)があり、ほぼ奈良時代中葉～平安時代初頭に帰属させることができる様に思われる。平安時代に属すE調査区SK301出土例は破片となっており、形態上の比較検討は不可能である。

溝の成形は両側面から切りおとしており、断面形状が工字形を呈す共通性を有している。徳島県では他に鳴門市日出遺跡(森・白石編1968)、徳島市西警察署内遺跡(28)に類例の出土がある。管状土鍾はD調査区第8層出土例(5)とE調査区第12層出土例(6)、SK301出土例(7, 10)があり、直径3cmを測る大形のもの(5, 6, 7, 10)と1cm程度の小形のもの(8, 9)がある。前述の通り、SK301では有溝土鍾と伴出している。また他の資料も有溝土鍾と同一層位中から出土しているため、古代以降共存関係にあることは確実である。

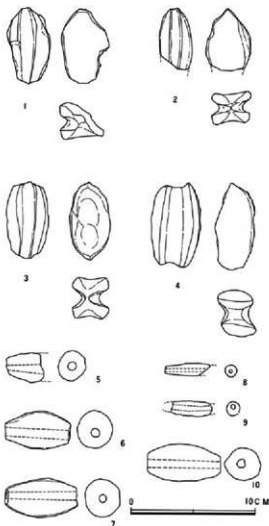


Fig. 38 土鍾実測図

有溝土錘については慣海性の強いものとされ、出土遺跡も海岸部の集落であることが指摘されている（大野 1978）。本遺跡周辺は縄文時代以降、海退現象のため陸地化している。本遺跡から東2kmに位置する森崎貝塚は三角州低地内の最奥の旧浜堤に位置しており、弥生時代までに現在の海岸線が形成されたことになる（阿子島 1979）。本遺跡は比較的内陸部に入った位置にあり、土錘出土が多い点 搬入か生業によるものかの検討課題を提供している。



Fig. 39 D調査区出土銅銭

銅銭（Fig. 39） D調査区第2層で出土した。景德元宝（初铸年代北宋景德年間1004年）である。直径2.4cmを測る。

2 古墳出土の遺物

古墳副葬物には棺外（棺上）遺物として直刀、槍、刀子状鉄器、棺内遺物として玉類がある。その他、墳丘上の遺物として須恵器が認められる。

須恵器壺（Fig. 40） 球形の胴にやや小さな口頸をつけ、肩は上部で大きく張っている。器高38.5cmを測る。体部外面は平行叩きを施したのち、ヘラ状工具で一定間隔を置き、カキ目調整を行なっている。内面は円弧叩きののち、入念にスリ消している。口縁部はナデ仕上げで一条の突帯を付している。技法、形態的には陶邑TK208から23（田辺 1966）の間に近似するものである。

直刀（Fig. 41 P L32） 全長約99cm、身部長80.5cm、柄長18.5cm、身部の幅、厚さは中央付近で3.2cm、0.7cm、間ちかくで3cm、0.9cm、背は柄とほぼ一直線で、関は直角になっている。柄幅・厚さは中央部で2cm、0.6cm、柄尻は直径約1cmの方形状の断面を呈す。身部には木質が付着しているが、錆化が進行しており、目釘穴は確認できない。鑢の有無は不明である。

槍（Fig. 42 P L32） 全長26.5cm、刃部の長さ20cm、幅2.9cm、厚さ約1cm、



Fig. 40 3号墳頂部須恵器壺実測図

基部の長さ6.5cm, 中央部付近での幅2.5cm, 厚さ0.4cmを測る。間はゆるやかに切られ, 茎へ移動している。基部の遺存状態は良好であり, 刃部の錆は明確に認められる。柄木を茎の両側からはきみ込んだ所謂呑口式のものである。柄幅約2.5cmを測り, 長さ1m程度を確認したにとどまる。柄の表面には糸が柄に斜交して, 左巻と右巻にされた格子文を形成しており, 黒漆を塗布している。糸は1cmにつき7本の密度で巻かれている。

刀子状鉄器 (Fig. 42 P.L.32) 全長15.2cm, 一方の端部が上方に折り曲げられている。刃部の先端を欠損するが, 刃部長7cm, 厚さ0.4cmを測る。奈良県火野谷山2号墳出土例(松田編1979)に類例を指摘できる。

玉類 (Fig. 43 P.L.33, 表2) 出土数160点を数える。粘質土に強く包まれていたため, 取り上げ時に破損し実測困難となってしまったものも多数ある。実測可能なもの160点の内訳は, 勾玉4点, 白玉・小玉156点である。このうち勾玉2点が琥珀製であり, 同1点が翡翠製と思われる。勾玉1点と白玉・小玉はすべてガラスによって作られている。

勾玉 (1・158・159・160) 1はガラス製(アルカリ石灰ガラス)であり, いわゆるコ字状に近い形状を成す。色調は半透明の濃灰味青色を呈し, 表面には磨り硝子様に小さな研磨痕が認められる。側面・背面は頭部⇔尾部方向に, 頭部・尾部の腹側及び腹部にかけては孔方向にそれぞれ研磨が行なわれている。腹部くびれ部分には, それが顕著に認められる。また研磨によって気泡が小さなクレーター様の窪みとして表面に散在する。大きさは長11.5mm・厚3~2.5mmを測る。孔径は約1.5mmで, 内部まで同じ径である。

158・159は琥珀製で, 非常に軽くもろいものである。取り上げ時に若干破損しており, 割れ口は光沢をもちやや赤味かかった暗い茶色を呈す。表面はわずかに風化して白くなり荒れているため, 研磨痕を認めることが出来ない。しかし研磨はきわめ

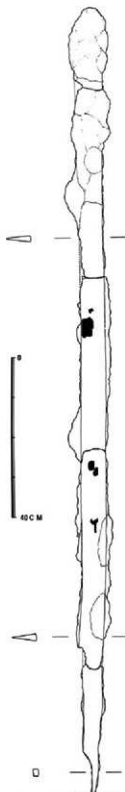


Fig. 41 直刀実測図

て丁寧にこなされたようであり、その形状は整美な感を得る。158の大きさは長18mm・頭部厚6.5mm・尾部厚5mm・孔径1.5mmを測り、159は長18mm・頭部厚6.2mm・尾部厚4mm・孔径1.4mmを測る。形状はいわゆるC字状と言えるもので、2点ともほぼ似かよっている。

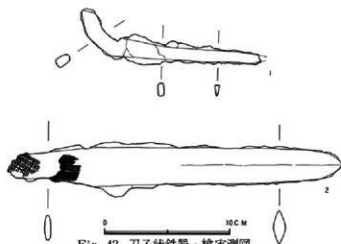


Fig. 42 刀子状鉄器・槍実測図

160は翡翠製と思われるが非常に軟弱になっており、胴部は破損し頭部の一部と尾部を残すのみである。素材には粗悪なものが使用されているうえ、風化によって結晶状に壊れ、残存部にも細かい鱗が見られる。色調は概ね青緑色を呈すが、黄味がかった部分も認められる。残存部分で見る限り研磨は丁寧にこなされ、尾部の先端はやや尖った形状となる。また頭部残存部分には、わずかに孔痕を確認することが出来る。尾部厚約5mmを測り、尾部腹側の残存部上端にくびれ部分とそれを作出するための研磨痕が認められる。このくびれ部分の立ち上がりから推定すると、長22mm前後のゴ字状に近いと思われる形状となり、4点の内では最も大きい勾玉となる。

白玉・小玉(2~157) 色調・材質よりすべてアルカリ石灰ガラス(小田 1971, 田中・小田 1972, 東京国立博物館 1978)によって作られたと思われる。最大のもので径7×6mm・厚5mm(135), 最小のもので径3mm・厚1.5mm(13)を測る。大きいもの小さいものは希に見られるが、径5~4mm・孔径1~1.5mmのものが非常に多い。色調については、濃淡はあるがほとんどが半透明の灰味青を呈す。1点だけ色調を異にする2は、みるあい(あるいは濃い青緑)色を呈す。孔の形状は両端・中央部とも同径のものが多く、片方の径が大きいもの(3・8・19・35・89・99・107など), あるいは中央部において若干狭小気味になるもの(65・80など)も見られる。また風化によるものか熱によるものか不明であるが、表面に細かい鱗を持ち、その形状をほぼ等しくするものや、69・135のようによく似た条件の下で作られたと思われるものも存在する。69・135の側面には、研磨のちに孔を

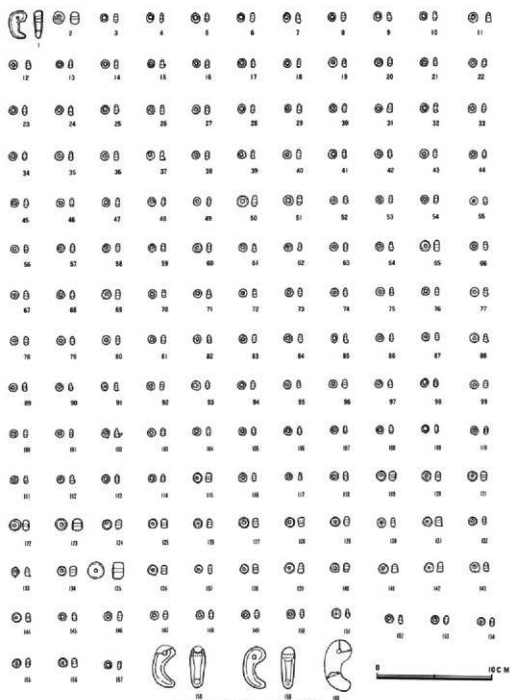


Fig. 43 勾玉·小玉实测图

中心とした磨耗痕が残り、周囲は孔と同方向のすじを縞状に残す。これはちょうど銚を伸ばしたものを輪切りにした時の状態とよく似ている。磨耗痕は他のものにも見られ、それらは孔周辺がわずかに平らになっており、おそらく玉同士の摩擦によるものであろうと考えている。

研磨痕は2・123に顕著に認められ、側面は孔に対して垂直方向に、周囲は孔と同方向に磨かれている。2点とも成形のため意図的に研磨したことが窺えるが、総体的に見ると比較的大きいものには研磨痕を認めることが出来るが、他のものには研磨痕と呼べるものを認めることが出来ない。しかしそれらの表面を詳細に観察してみると、気泡がクレーター状に窪んでおり、何らかの方法によって研磨を受けているようである。

いわゆる切り離し（小林・1964、小田・1971）については、その痕跡が半数程度のものに認められ、特に明瞭なものは25点を数える。これらの中には切り離し時に出来た瘤により、玉本来の形状を著しく損うものも見受けられる。楕円形様に変形したり（7・85・91など）、瘤が大きく突出している例（15・28・37・102・133）、あるいは単に瘤状に残る例（27・52・131・136など）も存在する。このように、切り離し時の痕跡として、瘤が残っている場合がほとんどであるため、これを切り離し瘤と呼んだ方が妥当かもしれない。

3 包含層出土遺物の集計

今回の調査では調査以前の予想に反して多様な遺物が出土した。弥生式土器、石鏃にはじまり、古墳時代の須恵器、鉄器、玉類、奈良、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、土錘、鎌倉～江戸時代の土師質土器、瓦器、陶器、磁器、土製品などがみられる。その総数は4538点を数える（表3）。出土遺物の調査区別の内訳は、A調査区583点、B調査区244点、C調査区205点、D調査区2147点、E調査区1177点、F調査区182点である。この様に各調査区から粗密はあるがまんべんなく出土している。特にD・E調査区では整層状態を保っていたため、出土比率が高い。

D・E調査区及びF調査区の包含層では、層位が対応関係にあり、相互の対比が可能である。そこで本項ではその層位別出土遺物の比較分析を試みるものであるが、対象とするのは奈良・平安時代、鎌倉・室町時代を中心とする層位毎の出土比率であり、近世水田址は除外する（表4）。

鎌倉、室町時代の層位は、D調査区では第6・7層、E調査区では第10・11層である。出土遺物は1020点を数える。調査区別ではD調査区707点、E調査区313点であり、それぞれの比率は69%、31%となる。これを器種別にみればD調査区では、土師器・須恵器が621点

で61%を占める。土師質土器は12点1.2%、瓦器1点0.1%、須恵質土器は42点4%、青磁は11点1%、白磁は1点0.1%、施釉陶器7点0.7%、焼締陶器2点0.2%となる。E調査区では土師器、須恵器が270点で26%を占め、瓦器2点0.2%、須恵質土器21点2%、施釉陶器4点0.4%、焼締陶器1点0.1%で、青磁、白磁類はみられない。この様に両調査区とも土師器、須恵器が大多数を占めているが、下層からの遊離分をかなり含んでいるため、直接の比較対象とはし難い側面を有している。他の器種ではD調査区出土例に多様性が認められる。器形的な観点からはD調査区の土師器、須恵器にバリエーションを認めるが、E調査区には乏しい。土師質土器には罎・羽釜があり、D調査区にみられる。須恵質土器には片口鉢、甕がある。青磁・白磁には碗、皿があり、D調査区にのみみられる。焼締陶器は両調査区から出土し、E調査区には鉢が認められる。瓦器、施釉陶器は器形を明確にはし難いが、両調査区から出土している。これらの結果からD調査区包含層の優位性が指摘できる。

奈良、平安時代の層位は、D調査区では第8・9層、E調査区では12層、F調査区では第6・7・10層にわたって拡がっている。出土遺物1162点を数える。調査区別ではD調査区475点、E調査区505点、F調査区182点であり、その比率は41%、43%、16%となる。これを器種別にみれば、D調査区では土師器が239点21%、須恵器207点18%で大多数を占め、灰釉陶器2点0.2%、緑釉陶器1点0.1%、黒色土器2点0.2%、土鍾4点0.3%である。E調査区では土師器337点29%、須恵器105点9%、灰釉陶器6点0.5%、緑釉陶器1点0.1%、土鍾15点1.3%、土師質かまど1点0.1%となる。F調査区では土師器141点12%、須恵器32点3%、緑釉陶器1点0.1%、灰釉陶器1点0.1%である。この様に各調査区とも土師器と須恵器が大多数を占めているが、器種的にはD・E調査区とも多様性に富んでいる。器形の上では、須恵器に坏、壺、碗などがある。土鍾には有溝土鍾、管状土鍾が共伴する。緑釉陶器ではF調査区出土例に良好なものが認められる。黒色土器はD・E調査区に若干量指摘できるが、器形を明確にしえない憾みがある。全体としてはD調査区よりもE調査区に器種、器形のバリエーションがあり、F調査区は包含層上層までが削平されてはいるものの、遺物の遺存状況が優れていることが確認される。

以上の検討からすれば、古代から中世にかけてE、F調査区からD調査区への生活空間の拡大が予想される。

VI 調査の成果と今後の課題

中内遺跡は古墳時代から江戸時代にあたる土地利用の一端を示す遺跡であり、遺構には恵まれなかったとはいえ、周辺地域での各時代の集落の存在を窺わせる知見を提供したものである。本章では今回の調査から導かれたいくつかの問題点を明らかにすると共に、遺構面として把握しえた近世水田址と宝徳寺3号墳について若干のコメントを述べてまとめにかえたい。

1 包含層出土遺物について

弥生時代の資料としては、土器、石器類が各調査区から少量ながらみられた。当該地域での遺跡の分布は前述した様に極めて僅かで、集落の実体を示唆する資料は不明である。遺跡の分布は層状地端に限定されている。前期以降開発が進んだことは確実であり、鳴門市大麻町検からは突線紐式銅鐸の出土も知られているが(梅原 1927)、弥生時代全期間を通じて概して狭少な谷水田経営形態を脱するものではなく、現在のところその後続く古墳群造営力への蓄積を説明することはできない。今後は阿讃山脈前面に広がる瀬江湿性低地(阿子島 1976)と呼称される後背湿地縁辺地域も検討対象としていく必要がある。

奈良時代から平安時代にかけての資料は多量の出土をみたが、遺構については今ひとつ明確にしえない。当該地域が古代律令制における旧板野郡内にあって、南海道が本地点周辺を通過していたことは、延喜式にみられる石濃駅、郡頭駅の間地点に位置することから明らかであり、墨書土器類を伴っている点、また多くの土錘を出土していることなどから今後遺跡の性格の究明を課題としている。

中世遺物についても比較的多くの資料が得られたが、明確な遺構に乏しい憾みがある。限定された層位、面積での土器の出土比率をみると、供膳形態としての日常土師質雑器類について、輸入磁器類が割と認められることが指摘できる。大消費地としての畿内、特に平安京内外域での出土は当然のこととしなければならないが、中世村落でのこの種の磁器類は全国的にみて粗密を呈しており、日常容器として必ずしも一律的に普及、入手し易かったとは考えられない。瀬戸内海沿岸地域での出土の増加と共に、紀淡海峡沖での出土例(森・白石編 1968, 西山 1975)などから当該地域では海上の輸入経路を含め、相対的に容易に搬入されたこと(村上 1976)は首肯でき、今後日常容器としてどの程度比重が置かれていたかの実態研究を必要としよう。一方、国産陶器類では所謂中世六古窯のうち、瀬戸系の陶器類が

認められるのに対し、近距離にある備前系の雑器類に乏しい事実が指摘される。これに対し、片口鉢などは播磨神出窯系製品が流入してきており、流通範囲の問題とも併せて、中世村落における生産地と消費地の関係検討に一つの手懸りを与えるものといえよう。

2 近世水田址の検討

本遺跡の水田址は、検出層序あるいは出土遺物などの検討により、安土桃山時代から江戸時代初頭に比定される。徳島県の水田址の調査例は極めて少なく、近世に属する本遺跡例、鳴門市土佐泊第39区遺跡例³⁰、奈良時代に属する徳島市庄遺跡西警察署地点例の3例を認めるにすぎない。

本項では、この考古学的年代決定に対する傍証方法として、古文書の緩用を行なう。

α. 徳島県の水田開発

古代から中世にかけて、徳島県では、72にも及ぶ荘園が確認されている（一宮 1966）が、開発の状況や面積などについては不詳である。

天正13年（1585）、検地が行なわれているが、この検地帳は一部が現存する（沖野 1965）のみであり、面積・石高などについては不詳である。

江戸時代には、慶長検地（慶長8年 1603）が行なわれ、阿波国の石高は約18万7千石とされた。しかし、その後、検地帳に不載の田畑が続々と摘発され、度々、検地が行なわれている。一方、山地や竹藪などの荒地の開墾が奨励され、その都度、検地が行なわれた。特に、藩は開墾奨励のため、開墾地に対する一定期間の年貢減免措置をとっている（沖野 1965）。

江戸時代初期においては、山地・竹藪などの比較的狭い面積の開墾が多い。しかし、その個々の規模は小さいが、全体量としては大きなものであった。例えば、正保2年（1645）には、村落417、石高約18万7千石に対し、元禄10年（1697）には、各々455、約19万4千石と増加している。初期の小規模開発に対し、17世紀後半になると、地主・商人による新田開発の先鞭がつけられる（出口 1965）。

享保年間（1716—1735）以降になると、特に北部における大河川下流域の三角洲・干潟などの開発が大規模に行なわれる。地主・商業資本投下によるものであり、村落・石高数は飛躍的増大を遂げる。例えば、天保元年（1830）には、村落455、石高約26万9千石に対し、明治6年（1873）には、各々585、30万8千石となり、元禄の数値との対比によっても激増の跡が窺える（出口 1965）。

この様に、中世における開墾の実態は不詳であるが、荘園数によってもその営みは否定出来ない。安土桃山時代以降になると、様々な史料の遺存により、ある程度の実態が把握

される。すなわち、藩の政策により、17世紀には全藩的な規模で荒地が、18世紀以降には北部大河川下流域の開発が行なわれた。その結果が、村落数、石高の飛躍的増大である。

b. 鳴門市域の水田開発

中世では、6つの荘園が確認されている。大麻町に比定される堀江荘は、保延4年(1138)に石清水八幡宮の所領となっている(一宮 1966, 福井 1976)。新田開発の記録としては、永暦2年(1161)の東馬詰新田、文明4年(1472)の萩原新田がある。前者は堀江荘との関連が想定され(福井 1976)、荘園の拡大と相俟っての開発といえる。

天正検地の記録として、大谷・高畠・牛屋嶋村(福井 1976)及び津基村(沖野1965)の4地区のものが現存する。その後、耕作地が急速に増大している。天保5年(1834)の阿波淡路郷村御高帖によれば、17世紀以降に新田開発をしなかった地区は、牛屋嶋・東馬詰・中馬詰村の3ヶ村にしかすぎない。他の地区では、その多寡はあるが、拡大の跡がみられる。天正年間(1573-1591)に、備前島、段岡で新田開発が行なわれ、17世紀以降に成立した村に、備前島・矢倉野・木津野・吉永・徳長村及び長江新田の6ヶ村がある。新村の立地は、旧吉野川河口付近の湿潤な荒地であり、既成立村の開田対象地は、河川周辺の荒地や藪あるいは山林などがある(福井 1976)。

当該地域は、日本の気候区上からみれば、瀬戸内気候区の特徴が強く、極めて降水量が少ない(近藤 1976)。そのため、古くから溜池が築造され、現在でも阿讃山脈南麓に多くみられる。用水路開鑿に、寛文元年(1661)の上井用水(大麻町板東)の例があり、また、旧吉野川河口付近には、九ヶ村堰が設けられ、多くの水田を潤したという(福井, 小川 1976)。

c. 池谷地区の新田開発

旧池谷村には、検地帳の一部が現存し、当時の状況がある程度、垣間見ることができる。新田開発の例として、寛政4年(1627)と正保4年(1647)の検地帳がある(福井 1976)。前者は畠を4反6畝6歩、後者は田を2反3歩、畠を1反5畝24歩開いたという記録であり、具体的地名は不詳である。これによれば、畠が6反2畝、田が2反3歩であり、畠の方が多し。そのため、むしろ灌漑出来ない土地に開発の力が向けられたと考えられる。

耕作地の増加を知る史料に、寛文4年(1664)の阿波国十郡郷村田畑高辻帳と天保5年(1834)の阿波淡路郷村御高帖がある(福井 1976)。旧池谷村における前者の石高は413.698石、後者のそれは436.775石である。この差額23.077石が増加量であるが、後者はこの数値を新田高及び改出高としている。すなわち、元禄16年(1703)に21.906石の新田高、寛政

9年(1797)に1.171石の改出高である。元禄から寛政の約90年間というより、むしろ寛文から天保の約170年間に、僅か23.077石に値する開発しか行なわれなかった。

この様に、旧池谷村においては、僅かな耕作地しか開発されていない。そのため、寛文4年(1664)までに開発をほぼ終了し、その後は切添・葎開などにより、細々と行なわれたといえる。

d. 中内遺跡の近世水田址の形成

本遺跡は、南に開けた小扇状地上に立地する。北には築造年代は不詳であるが、すいしよ池という溜池があり、用水路によって灌漑に供されている。本調査においても、数条の谷川が検出された様に、古くは様々な流路を変えながら、この扇状地を形成したのであろう。それが農業用水路としての機能を果たすことにより、耕地化への歩みが始まったと考えられる。

室町時代に比定される板碑と一石五輪塔がある(福井 1976)。これらの石造物は、今回検出された土塚墓群と同時期か、あるいはやや遅るのではなかろうか。その後、新田開発されたことを示すのが、検出した水田址といえる。

検出した水田址は3枚であるが、扇状地という立地及び現在の土地区画状況などから、それらはいずれも限定された面積と考えられる。しかし、地域総体の開発を考慮すれば、かなりの面積となる。そのため、元禄16年(1703)の約22石の新田高の頃までに収め得るのであろう。ところが、寛文4年(1664)以降元禄16年まで、新田開発はなされていない。この様に、天保5年(1834)までの史料を概観するならば、当該地の水田開発は、安土桃山時代から寛文4年までの間に設定されるべきであろう。これは、時あたかも、宝幢寺の創建と相前後する時期であり、新田開発による人口の増加及び富の蓄積があってこそはじめて、寺院経営が成り立つと考えられる。

この傍証は、考古学と文献とのクロスチェックをある程度可能にしたといえよう。

3 宝幢寺3号墳出土の玉類について

a. 勾玉

徳島県では琥珀製勾玉の出土は初めてであり、四国でも例を見ないようである。しかし、香川県観音寺市黒島林第6号墳より、よく似た材質の藁玉らしき琥珀玉が報告されている(黒島林古墳発掘調査団, 1977)。色調・風化状況等による限り、琥珀の種類も同一である可能性が高い。一般に言われている琥珀とは、石化したものであり黄色あるいは黄褐色を呈しており、本古墳や黒島林第6号墳出土の色調は珍しいようである(水野・小林編

1959, 日本考古学協会編 1962)。ここで少々無謀かもしれないが、もし当時「練り琥珀」を作出する技術が知られていたならば、色調も硬度もよく似てくるように思われる。このような推定をしたのは、石化琥珀よりも練り琥珀の方が材料の入手・加工とも容易であり、色調も赤味を帯びているためである。

また、異なった色とコ字状・C字状の異なった形状の勾玉を併用していることにも疑問が残る。

6. 白玉・小玉

大きいものには成形に対する意図的な研磨痕が見られたが、小さいものにはそれを確認出来ない。しかし全体的に角がとれ、切り離し瘤の残るものはその瘤の先端も丸くなっている。果してどのような方法で研磨されたのであろうか。厚田氏の紹介(小林・1964)した様に「先ず截断されたタマを石灰と木炭とに混ぜ、之を掌の中でこすり、……之を爐上の砂入の鉄製容器に入れて熱を加え、ギザギザの截断面を平滑にし、然る後にフスマ糠を入れた袋の中で磨き上げ」たのであろうか。現在、真鍮や鉄の小製品の角取りに使用されている例を挙げてみよう。まず六角形の鉄製容器の中に製品とともに小砂利と水を加え、何時間か回転させておく。するときれいに角がとれる。当時の人々も、このような原理を使用しガラス玉を磨いたのであろうと想像している。

製作及び切り離し技法については、棒状ガラスを截断する方法と針金等に巻きつけるいわゆる巻きつけ方法とが知られている(小田1971)。(69)・(135)など側面が平たい白玉の様なものについては、その周囲に残る縞状の引き伸ばし痕などより判断すると、棒状ガラスを截断したものと思われる。

小玉については、孔径の等しいものが多いこと、直径・厚さもそれと関連が見られることが表2から窺える。たとえば孔径1mm・1.2mm・1.5mmを測るものが多く、それらは直径4mm・厚さ2mm程でそれぞれよく似た形状をしている。また3項目とも全く等しい数値を示すものも見られる。詳細に観察してみると、気泡が孔と垂直方向に流れているものが若干存在すること、切り離し瘤が側面より周囲に残っているものが圧倒的に多いことから、巻きつけ技法によって製作された可能性が大きい。それもあり手慣れた工人によるものであると言える。しかし中には様相を若干異にするものも存在しており、これらについては今後検討していきたい。

4 宝幢寺3号墳と大麻町周辺の古墳について

a. 3号墳の年代と古墳群の形成

本墳は検出された埋葬形態、副葬遺物、墳丘上の須恵器の年代観に従えば、中期後葉、実年代にしてほぼ5世紀後葉の築造が考えられる。旧地形の復元を行えば墳丘は南に下降する尾根鞍部に位置しており、地山の砂岩風化粘土を約40cm盛り上げて構築された直径11.3mの円墳となる。副葬遺物には棺外（棺上）遺物として直刀、槍、刀子状鉄器の武器・工具類、棺内遺物として裝飾類の勾玉・小玉がある。所謂大形円墳に比べると、墳丘の小規模性にも拘わらず相対的に副葬遺物が豊富であり、一応中期古墳のセット関係を示している。このうち槍については、大まかには棺外副葬という前期以来の原則を保持しているものの、5世紀中葉以降、槍から鉾への副葬の転換が行なわれるという指摘（菅谷 1975）とは若干の時間的懸隔を生じさせており、槍の副葬が当該地域では5世紀後葉まで存続することは確実となる。基本的に後期古墳形成以前の最終段階の所産であることには間違いないが、本古墳と吉野川を挟んで対峙する南岸下流域での前期末から中期中葉の古墳では、奥谷2号墳第1主体（一山 1980）、清成1号墳竪穴式石室（立花、天羽 1969）にみられる様に長柄式武器の副葬は鉾が主体となっており、断絶した地域相が看取される。

ところで前章で述べた様に、本墳は全長42mの前方後円墳である宝幢寺1号墳の位置する尾根の延長上にあり、本墳の西側が大きく落ち込んだ谷を形成するところから、区画された支脈に位置する宝幢寺古墳群の1基として捉えることを可能にしている。本古墳群の形成時期については、その盟主墳ともいえる1号墳が所謂柄鏡式の平面プランを有す前方後円墳であり（立花 1971）、円筒埴輪を伴っていたという以外に具体的な年代を決定する資料に乏しい憾みがある。しかしながら現在は崩壊している円墳の2号墳が竪穴式石室を有し、須恵器を出土していることや本墳の年代様相、また本古墳群域と考えられる地点からの馬形埴輪の出土（秋山 1976）などを考慮に入れば、本古墳群の盛行は中期中葉以降にあり、各古墳の造営に時間的連続性を求める以上、1号墳の築造に隔絶した年代観を指摘することはできない。大要前期末から中期前葉の年代に収まるのではないだろうか。このことは旧板野郡に属する盛土の前方後円墳を中心とする古墳群の生成が、ほぼ中期前葉以降に行なわれることと有機的な関連を示している様に思われる。例えば全長65mを測る愛后山古墳は、短甲片、鉄剣片、銅鏡、管玉、ガラス小玉を出土した竪穴式石室をもつ前方後円墳であるが、5世紀前葉の年代観が与えられており（森 1967）、周辺地域では本例に先行する古墳は現在のところ知られていない。また当該地域での核となる天河別神社

古墳群は2基の前方後円墳を含む11基の古墳から構成されるが、尾根上に位置する6基の造営が5世紀前葉から5世紀後葉・6世紀初頭にかけて順次行なわれるという一系列的な在り方を示しており(菅原編 1980)、宝幢寺古墳群もそうした時代・地域的動向の理解内で捉えうるものと思われる。

現行の古墳群の把握・命名は各支脈を基準して行なわれてきており、阿讃山脈の支脈という独立した山塊ではないために起こる群・地区設定の不鮮明さは否めないが、詳細な実態把握によっては将来的に一定古墳群中の各支群として再構成させうる蓋然性を強くしている。いずれにしても当該地域での盟主墳として捉えうる盛土墳造営開始の時期は、ほぼ中期古墳の範疇に属しうるものであり、宝幢寺古墳群もそうした動向の中で位置付けられよう。

b. 吉野川下流域における古墳時代中期の文化相(予察)

阿波における前期後葉から中期初頭にかけての古墳の形成は、吉野川南岸下流域に顕著である。奥谷1号墳(天羽・岡山 1973)、髯山古墳(田所 1915)、勢見山古墳(山田 1969)、曾我氏神社古墳群(天羽 1980)、前山古墳(末永・森 1963)、奥谷2号墳(一山 1980)、国高山古墳(阿南市史編纂委員会 1967、天羽 1978)、清成古墳(立花・天羽 1969)などが相次いで造営されており、現時点では北岸下流域よりも早い段階に盛土墳が展開している。このうち大麻町地域の古墳群と類似構造一すなわち、大局的には前期以降山麓を占有し、古式の前方後円墳あるいは前方後円形状の積石塚を初現とし、その後盛土の前方後円墳を中心として展開する古墳群構成一を呈す、眉山周辺から鮎喰川、気延山一帯にかけての旧名方郡城³³の古墳群の動態をみれば、前期末には狭少な竪穴式石室と碧玉製腕装類に代表される、所謂畿内型古墳を形成しているが、中期前葉以降では、恵解山1、2、8、9号墳(末永・森 1966、森 1968)、尼寺1号墳(立花・天羽 1969)、鶴島山古墳群(元興寺文化財研究所考古学研究室 1979)などに認められる箱式石棺形態に主体を置いている。副葬遺物は相対的に少なくなるが、恵解山古墳群では武器類の副葬と共に、前期以来の祭祀的要素を根強く温存している。

こうした埋葬形態の変化は、新宮塚古墳(田中 1968)、清成1号墳、内容古墳(三木 1962)など前期末・中期初頭の段階からすでに認められ、該時期の竪穴式石室墳とは異なった位置付けを必要とするが、中期での数量的な増大は明らかとなる(立花 1970)。淡野丸山古墳(田中 1968)の様に典型的な畿内型の中期古墳も若干は形成されるが、全体として在地文化への傾斜の進行が看取される。埋葬方法では恵解山2・8・9号墳の様に二

棺並置を一つの特徴とするものがあるが、通って曾我氏神社1号墳、奥谷2号墳では竪穴式石室を並置しており、二棺並置の思想的営為が前期末から継続していることが窺われる。同時埋葬ではないが、清成1号墳も同様の意味をもつものと思われる。

これに対し、北岸下流域、旧板野郡においては、愛后山古墳、天河別神社1、2、5号墳の竪穴式石室、天河別神社6号墳の箱式石棺、天河別神社4号墳の礎床・木棺直葬（粘土槨の退化形態の可能性も考えられる）、宝幢寺3号墳の木棺直葬など、埋葬形態におけるバリエーションや萩原墳墓群、天河別神社4号墳、宝幢寺3号墳、日出D号古墳（森・白石編 1968）にみられるTK208・23段階の須恵器の搬入が指摘できる。箱式石棺は概して後期に顕著であるが、総じて少ないこと（立花 1970）はほぼ確実である。調査例の少ない感みはあるが、二棺並置は現時点では明示できない。

これらの事実は、吉野川南岸下流域の古墳の様相が前期から中期にかけて畿内の影響を離れ、地方色を強めていったのに対し、北岸下流域では愛后山古墳、天河別神社古墳群に示される様に、内部主体に結晶片岩を搬入、使用するという、石室構築にあたっての南岸地域とのイデオロギーの基盤を共有しながらも、一方において中期畿内文化圏の影響の下に本格的に古墳群を展開させたことを示唆するものであり、際立った対照を呈すものといえよう。

こうした関係も後期には再度逆転し、南岸地域での横穴式石室の盛行、北岸地域での中期埋葬形態の継承というプロセスをたどる様であるが、派生する多くの問題は、多元的な文化波及の実態追求と共に、よりミクロ的な検討を通して今後明らかにしていかなければならない課題を提供している。

註(1) 菅原編『天河別神社古墳群調査概報』徳島県教育委員会 1980. P.25に一部掲載した。

(2) 本形態の名称については卵形両溝式土鍾（森浩一・白石太一郎編『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』1968 同志社大学文学部文化学科）、有溝土鍾（大野左千夫『有溝土鍾について』『古代学研究』86 1978）などがあるが、本報告では暫定的に有溝土鍾と呼称する。

(3) 徳島県での低墳丘をもつ古墳は名西郡石井町気延山山墳に認められる。詳細は不明であるが竪穴式石室、箱式石棺を主体とする様である。

(4) 主体部上面を礎床によって被覆する形態は徳島県では萩原墳墓群に顕著なほか、ケンレイサン古墳、尾寺古墳（立花博『鳴門市大麻町谷口山の組合式箱形石棺と徳島県内の組合式箱形石棺について』『徳島県博物館紀要』1集 1970）、鶴島山2号石棺墓（元興寺文化財研究所考古学研究室『徳島市鶴島山古墳群の調査—発掘調査報告書』1979）などにみ

られる。これらはいずれも無墳丘にちかく、小竪穴式石室、箱式石棺を主体とするものであるが、形成時期に本墳とパラレルな関係にあるものがある。可視的には外部表象の機能を共有しているが、同一の系譜にあるか否かは現時点では明確にすることはできず、後日を期したい。

- (5) 徳島県下での明確な木棺直葬は報告されておらず、本例が現時点では唯一である。
- (6) ここで言う神出窯系片口鉢は「胎土、燒成、色調、形態の觀察から、平安末～鎌倉前半の神出古窯址群土陶片の系譜を引くと思われる資料」として理解する（松藤和人「同志社キャンパス内出土の土器・陶磁器の編年」同志社キャンパス内出土の遺構と遺物—同志社校地埋蔵文化財調査報告資料編Ⅱ（1978））。ただし、神出窯自体の操業年代において、13世紀中葉以降の存続が不明であり、明石市大久保町魚住古窯址群などとの比較検討も残されている。
- (7) 鳴門市域では北端の鳴門町大毛島から阿讃山脈東南の大麻町にかけて出土が認められるが吉野川南岸、徳島市域に達しているかどうかは確認していない。
- (8) 河野維次の教示。
- (9) 松永住美氏の教示。
- (10) 近年、42基の一石五輪塔が宝徳寺に集められ、そのうち2基が在銘である。「永祿12年」（1569）銘のものは鳴門市大麻町池谷字西谷、「元亀」（1570—1572）銘のそれは大麻町高島にあった様である。山内一雅氏の教示による。
- (11) 寛永年間（1624—1643）と伝えられる。
- (12) 志解山古墳群、名東古墳群、気延山古墳群など。
- (13) 北岸地域において、結晶片岩を用いない竪穴式石室の類例として阿波郡土成町十楽寺山古墳が指摘できる。円墳の墳頂部に2基の竪穴式石室を有しており、砂岩を素材としている。石室規模は1号主体の全長2.83m、東小口幅97cm、西小口幅92cm、2号主体の全長2.27m、東小口幅65cm、西小口幅70cmを測る（立花博「原始社会」『土成町史』上巻 1975）。1号主体の東側で壺形土器の出土が報告されており、中期の年代観が与えられているが、主体部は4基以上存在する様である。記述の壺形土器は叩き目をハケで消す技法を用いており、内内式～布留式古段階併行期のものと思われる。結晶片岩を用いる古墳の系譜と異なる可能性が強いと考えられ、後日資料を明示したい。松永住美、小笠原賢、菅原1980年踏査。

文 献

- 秋山泰 1976「原始・古代」『鳴門市史』上巻
- 阿子島功 1976「地質」『鳴門市史』上巻
- 阿子島功 1978「低地の微地形と海水準変動（2）—吉野川下流平野および四万十川河口平野—」『地理学評論』51—8
- 阿南市史編纂委員会編 1967『阿南市史』
- 天羽利夫・岡山真知子 1973「原始・古代の徳島」『徳島市史』第1巻
- 天羽利夫 1976「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化』3
- 天羽利夫 1978「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』9
- 天羽利夫 1980「徳島だより」『考古学研究』106
- 一宮松次 1966「阿波の荘園」『徳島県史』第2巻
- 一山典 1980「徳島市の原始・古代—埋蔵文化財資料展—」 徳島市教育委員会
- 宇野隆夫 1978「京大病院遺跡出土の土器—古代末から中世—」『京大大学構内遺跡調査研究年報』昭和52年度 京大大学埋蔵文化財研究センター
- 梅原末治 1927『銅鐸の研究』資料編・図録編
- 大野左千夫 1978「有溝土鍾について」『古代学研究』86
- 岡崎正雄ほか 1976「安富中学校前東遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』 兵庫県社会文化協会
- 沖野舜二 1965「検地と年貢」『徳島県史』第3巻
- 小田幸子 1971「ガラス工」『新版考古学講座』9
- 元興寺文化財研究所考古学研究室編 1979「徳島市鶴島山古墳群の調査—発掘調査報告書—」
- 黒島林古墳群発掘調査団編 1977『黒島林第5, 6号墳調査報告』
- 小林行雄 1964『続古代の技術』
- 近藤照明 1976「気候」『鳴門市史』上巻
- 末永雅雄・島五郎 1962「徳島県文化財調査報告書 第4集—樋取谷出土蔵骨器関係資料—」 徳島県教育委員会
- 末永雅雄・森浩一 1963「前山古墳」 徳島県文化財調査報告書 第6集 徳島県教育委員会
- 末永雅雄・森浩一 1966「徳島県徳島市眉山周辺の古墳調査報告」 徳島県文化財調査報告書第9集 徳島県教育委員会

- 菅原康夫編 1980『天河別神社古墳群調査概報—県道鳴門 池田線改良工事に伴う調査—
徳島県教育委員会
- 菅谷文則 1975『前期古墳の鉄製ヤリとその社会』『権原考古学研究所論集 創立三十五周年
記念』
- 鈴木重治 1972『鳴門森崎貝塚』 鳴門市教育委員会
- 鈴木重治・菅原康夫編 1977『相国寺旧寺域内の発掘調査—成安女子学園校地内の埋蔵文化
財—』 成安女子短期大学校地学術調査委員会
- 鈴木重治・松藤和人・菅原康夫編 1978『常盤井殿町遺跡発掘調査概報—同志社女子大学心
和館増築地点の調査—』 同志社女子大学 同志社大学校地学術調査委員会
- 立花博・天羽利夫 1969『石井町文化財調査報告書第4集（清成・尼寺古墳発掘調査概報）』
石井町文化財保護委員会
- 立花博 1970『鳴門市大麻町谷口山の組合式箱形石棺と徳島県内の組合式箱形石棺について』
『徳島県博物館紀要』1集 昭和44年度
- 立花博 1971『宝徳寺古墳の実測』『徳島県博物館報』12
- 立花博ほか 1979『徳島県文化財調査概報』昭和52年度 徳島県教育委員会
- 田所市太 1915『阿波国屋河内の古墳』『考古学雑誌』第10巻7号
- 田中英夫 1968『徳島市洗野古墳群の出土品』『古代学研究』53
- 田中新史・小田幸子 1972『小田部古墳の調査』市原市教育委員会
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 出口大士 1965『新田開発』『徳島県史』第4巻
- 東京国立博物館 1978『古代東洋ガラス』
- 徳島県博物館 1974『阿波の古代寺院』
- 豊田進 1974『阿波の陶磁』
- 浪花勇次郎・三好昭一郎 1964『平安時代の廃寺』『徳島県史』第1巻
- 西山要一 1975『紀淡海峡海底採集の中国陶磁器』『古代研究』5
- 日本考古学協会編 1962『日本考古学辞典』
- 福井好行 1976『鳴門市の荘園』『検地と新田開発』『鳴門市内の板碑』『鳴門市史』上巻
- 福井好行・小川耕 1976『近世—農業』『鳴門市史』上巻
- 松田真一編 1976『新庄大野谷山古墳群—北葛城郡新庄町寺口火野谷山古墳群発掘調査報告
—』 奈良県立権原考古学研究所
- 真野修 1974『龜岡山周辺の古窯址—神出古窯址群—Ⅰ』『神戸古代史』1—3
- 三木文雄 1962『利包及び内谷組合式石棺の研究』『石井』 徳島県文化財調査報告書第5集
- 水野清一・小林行雄編 1959『図解考古学辞典』
- 村上正名 1976『遺跡出土の中国陶磁にみる日宋交易』『古代文化』28—1

- 森浩一 1967「徳島県板野郡愛后山古墳」『日本考古学年報』15 日本考古学協会
- 森浩一 1968「眉山周辺の古墳 恵解山第9号墳調査報告」徳島県文化財調査報告書第10集 徳島県教育委員会
- 森浩一・白石太郎編 1968「紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告」同志社大学文学部文化学科
- 山田良三 1969「筒形銅器考」『古代学研究』55

表2 勾玉 小玉観察表

番号	直径	厚	孔径	色	調	備考	番号	直径	厚	孔径	色	調	備考
1				濃い灰味青		勾玉	34	4×3.8	2	1.6	#		
2	5.5×5	4	1	みるあい		研磨痕	35	4	2	2~1.2	#		切り離し瘤
3	4	2	2~1	薄い灰味青			36	4	2	1.2	#		
4	4×3	1.5	1.5~1	#		切り離し瘤、括内	37	4.5×3.7	2	1.5	#		切り離し瘤、2ヶ所
5	4	2	2	#		#	38	3.8	2	1.2	#		
6	4×3	2	1.5~1	#			39	3.7	2	1.2	#		切り離し瘤
7	4.5×3	2	2	#		切り離し瘤、括内	40	4	2	1.5	#		
8	4×3	2	2~1	#		#	41	4×3.7	2	1.2	#		切り離し瘤、3ヶ所
9	4	2	2	#		#	42	4×3.5	2	1.5	#		切り離し瘤
10	4	2	2	#		切り離し瘤、孔縁部	43	4	2	1.2	#		#
11	4	2	1	#			44	3.8×3.4	2	1.5	#		
12	4	2	1	#			45	4×3.2	2	1.5	#		切り離し瘤
13	3	1.5	1.2	#		切り離し瘤	46	3.8×3.5	2	1.5	#		
14	4	2	1.5	#			47	4×1.5	2	1.3	#		切り離し瘤
15	3.7×2.5	2~1.5	1.2	#		切り離し瘤、孔縁部	48	3.8	2	1.5	#		
16	3.5	1.5	1	#			49	4×3.2	2	1.5	#		
17	4	2	1.5	#			50	5×4.5	2.2	1.5	濃い灰味青		孔周辺磨耗
18	4×3	1.5	2	#			51	4.2×4	2	1.5	#		#
19	4	2	1.5~1	#		切り離し瘤	52	3	2.5~1.8	1	薄い灰味青		切り離し瘤
20	4	2	2	#			53	3.7	2	1.2	#		
21	4	2	1.5	#			54	3.7×3.5	2	1.2	#		孔周辺磨耗
22	4	2	1.5	#			55	3.5	2	1	#		切り離し瘤
23	4	2	1.7	#		切り離し瘤	56	3.2	2~1.8	1	#		#
24	4×3.5	2	2	#		切り離し瘤	57	3.4	2	1	#		#
25	4	2	1.2	#		#	58	4×3.6	2	1	#		孔周辺磨耗
26	4	2~1.5	1.2	#		切り離し瘤	59	3.5	2	1.5	#		切り離し瘤
27	4×3.7	2	1.2	#			60	4	2	1.2	#		切り離し瘤 孔周辺磨耗
28	4×3	1.5	1.5	#		切り離し瘤、孔縁部	61	4×3.5	2~1.2	1.5	#		切り離し瘤
29	4×3	2	1.2	#		#	62	4×3.8	1.5	1.5~0.5	#		#
30	4×3.7	2	1.6	#			63	3.6	2~1.5	1	#		
31	4×3	2.3~2	1	#		切り離し瘤	64	3.8	2	1.5	#		切り離し瘤 孔周辺磨耗
32	4	2	1.7	#		切り離し瘤	65	4	2.2	1.5~1	濃い灰味青		孔周辺磨耗
33	4×3.7	2	1.5	#			66	3.8	2	1.2	薄い灰味青		

番号	直径	厚	孔径	色調	備考	番号	直径	厚	孔径	色調	備考
67	3.5	2.2~2	1	薄い灰味青		100	3.8	2	1.5	"	
68	3.6	2	1.6	"	孔周辺磨耗	101	4×3.8	1.5	1~0.7	"	孔周辺磨耗
69	4	2	1	"	研摩機、孔周辺磨耗	102	4×3.6	3.5~1.2	1.2	"	切り離し傷、突出
70	3.8	2	1.5	"	切り離し傷	103	3.8	2	1.5	"	
71	3.8	2~1.2	1.2	"	孔周辺磨耗	104	4×3.8	1.8	1.5	"	切り離し傷
72	3.6	1.8	1.2	"	切り離し傷	105	3.6	2	1	"	
73	3.8×3.5	2	1	"	"	106	3.8×3.3	2	1.2	"	切り離し傷
74	3.5	2	1	"		107	3.5	1.7	1.2~0.8	"	切り離し傷
75	3.8	1.8	1.2	"	孔周辺磨耗	108	3.8×3.4	2	1.3	"	
76	3.8	1.8	1	"		109	3.4	1.7	2	"	切り離し傷
77	3.8	1.8	1.2	"	切り離し傷	110	3.8×3.6	2	1	"	
78	3.8×3.6	2	1.2	"		111	3.4	2	1	"	
79	4×3.6	2	1.2	"		112	3.4	2	1	"	切り離し傷
80	4	2	1	"	切り離し傷	113	3.6	1.8	1.2	"	"
81	3.4	2	1.5	"	孔周辺磨耗	114	3.4	1.8	1.2	"	
82	3.7×3	1.8	1.2	"	切り離し傷	115	4×3.8	2.5	1	"	孔周辺磨耗
83	3.6	2	1	"		116	4×3.8	2	1	"	
84	4×3.5	2	1.2	"		117	3	1.8~1	1.6	"	
85	4×3	2~1.2	1.5	"	切り離し傷、横円	118	3.8×3.6	2	1	"	孔周辺磨耗
86	4×3.6	1.8	1.2	"	"、2y所	119	4	3	1	"	"、研摩
87	3.5	2	1	"		120	4	2	1	"	"、"
88	4	2~1.2	1	"	切り離し傷	121	4	2.5	1	"	切り離し傷、研摩 孔周辺磨耗
89	4×3.6	2	1	"	"	122	5	2.6	1	"	孔周辺磨耗、研摩
90	3.6	1.8~1.2	1.4	"	"、孔周辺磨耗	123	5	4.2	1.4	"	研摩痕
91	4×3	1.6	1	"	切り離し傷、横円	124	4	2.5	1	"	孔周辺磨耗、研摩
92	3.6	2	1	"		125	4	2.2	1	"	"、"
93	4	2	1.2	"	切り離し傷、孔変形	126	3.8	2.2	1	"	"、"
94	3.8	2	1.3	"		127	4	2.2	1	"	切り離し傷、研摩 孔周辺磨耗
95	3.8×3.4	2	1	"		128	4	2.2	1	"	孔周辺磨耗、研摩
96	3.8	2.2	1	"	切り離し傷	129	4	2	1.2	"	"、"
97	3.6	2	1.2	"	"	130	4	2	1	"	切り離し傷
98	3.8	2	1.5	"	"	131	4	3	1	"	切り離し傷、研摩 孔周辺磨耗
99	3.8	2	1.5~1	"		132	3.5	1.8	1	"	

番号	直径	厚	孔径	色 調	備 考
133	4.5×3.2	2	1	薄い灰味青	切り離し型、美品
134	4×3.8	2.8	1	"	孔周辺磨耗、磨滅
135	7×6	5	1.8	"	研磨痕
136	4	2.2	1	"	切り離し型、磨滅 孔周辺磨耗
137	3.8×3.5	1.8	1	"	
138	4	2	1	"	孔周辺磨耗、磨滅
139	4.2	2	1	"	" "
140	4	2.2	1.2	"	切り離し型、磨滅 孔周辺磨耗
141	4	2.5~2	1	"	孔周辺磨耗、磨滅
142	4	2.5~2	0.7	"	" "
143	4	2	1	"	" "
144	4	2	0.7	"	切り離し型 孔周辺磨耗
145	3.8	2	1.8	"	切り離し型
146	3.9×3.6	2	1	"	
147	3.8×3.6	2	1.2	"	
148	3.8	2	1.6	"	切り離し型
149	3.8	2	1.2	"	"
150	4×3.9	1.8	1	"	"
151	4	2~1	0.6	"	"
152	3.8×3.6	2~1.2	1.2	"	
153	3.8	2	1.2	"	
154	3.8×3.6	2	1~0.6	"	切り離し型
155	4×3.8	2	1	"	"
156	4	2.2	0.7	"	孔周辺磨耗、磨滅
157	3.5×3.2	1.8	1.6	"	
158				薄い茶(今中非味)	均玉、琥珀製
159				薄い茶(今中非味)	均玉、琥珀製
160				青緑	均玉、翡翠製

(単位mm)

表3 各調査区出土遺物集計表

器種	器形	調査区						個数計	占有率 (%)
		A	B	C	D	E	F		
弥生土器	甕		5	1				6	0.13
	壺		2		1			3	0.07
	不明		88			1		89	1.96
	小計		95	1	1	1		98	2.16
土師器	甕				5	5	4	14	0.31
	壺				3	5	1	9	0.20
	高坏				1			1	0.02
	坏	1			26	45	14	86	1.90
	蓋				2	1		3	0.07
	皿	2	3	2	55	47	9	118	2.60
	埴	1	3		19	8	2	33	0.73
	不明	85	45	61	1134	606	111	2042	45.01
	小計	89	51	63	1245	717	141	2306	50.86
土師質土器	鼎					4		4	0.09
	埴				5	4		9	0.20
	皿	1				3		4	0.09
	鉢				2			2	0.04
	羽釜	3			3	4	2	12	0.26
	土塼			1	2	1	2	6	0.13
	不明	20		3	29	40	3	95	2.10
小計	24		4	41	56	7	132	2.91	
黒色土器	不明				2	6		8	0.18
	小計				2	6		8	0.18
瓦器	埴				3	2		5	0.11
	不明	3			9	21		33	0.73
	小計	3			12	23		38	0.84

器種	器形	調査区						個数計	占有率 (%)
		A	B	C	D	E	F		
		個数							
須惠器	甕	3	6		15	2	2	28	0.62
	壺	11		2	9	6	1	29	0.64
	高坏				9			9	0.20
	坏	11	4	2	32	13	3	65	1.43
	蓋	12	7	3	59	15	5	101	2.22
	埴	1			1	1	2	5	0.11
	瓶				4	11		15	0.33
	匙					1		1	0.02
	不明	228	45	59	542	201	19	1094	24.09
	小計	266	62	66	669	250	32	1345	29.66
須惠質土器	片口鉢	3			5	18		26	0.57
	甕				27	18		45	0.99
	不明			2	11			13	0.29
	小計	3		2	43	36		84	1.85
灰釉	長頸壺				1	1		2	0.04
	壺				1			1	0.02
	碗					2	1	3	0.07
	不明				2	7		9	0.21
	小計				4	10	1	15	0.33
緑釉	埴						1	1	0.02
	不明				5	2		7	0.16
	小計				5	2	1	8	0.18
青磁	碗	4		1	5			10	0.22
	皿				1	2		3	0.07
	不明	5		3	5	2		15	0.33
	小計	9		4	11	4		28	0.62

器種	器形	調査区						個数計	占有率 (%)	
		A	B	C	D	E	F			
白磁	碗	1						1	0.02	
	皿	1				2		3	0.07	
	不明	11		1	1	2		15	0.33	
	小計	13		1	1	4		19	0.42	
陶器	唐津	碗				8		8	0.18	
		皿				1		1	0.02	
		鉢				1		1	0.02	
		不明	6	4	3	1	2		16	0.35
		小計	6	4	3	1	12		26	0.57
	施釉	粥瓶		1					1	0.02
		甕	1	2					3	0.07
		壺	2						2	0.04
		蓋	1						1	0.02
		皿	1						1	0.02
	釉	盤				1			1	0.02
		碗				5			5	0.11
		不明	37	5	24	34	9		109	2.41
		小計	42	8	24	40	9		123	2.71
		無施釉	擂鉢				1	3		4
	鉢						1		1	0.02
	不明		18	2	5	9	3		37	0.82
	小計		18	2	5	10	7		42	0.93
	小計		66	14	32	51	28		191	4.21
	磁器	碗	4	3		1			8	0.18
不明		64	14	20	25	9		132	2.91	
小計		68	17	20	26	9		140	3.09	
瓦		18		5		10		33	0.73	
	小計	18		5		10		33	0.73	

器種	器形	調査区						個数計	占有率 (%)
		A	B	C	D	E	F		
		個数							
土	有構				1	7		8	0.18
	管状			1	7	8		16	0.35
	不明				1	1		2	0.04
	小計			1	9	16		26	0.57
石		2	2	2	6	4		16	0.35
	小計	2	2	2	6	4		16	0.35
サマ カ イト 銅片			1	2	10			13	0.29
	小計		1	2	10			13	0.29
チヤ ー 銅片		15	1		5			21	0.46
	小計	15	1		5			21	0.46
鉄製品		6	1	1				8	0.18
	小計	6	1	1				8	0.18
銅製品					1			1	0.02
	小計				1			1	0.02
果実種子					1			1	0.02
	小計				1			1	0.02
鉛				1	1			2	0.04
	小計			1	1			2	0.04
瓦質土器					1			1	0.02
	小計				1			1	0.02
伏見人形		1						1	0.02
	小計	1						1	0.02
かまど						1		1	0.02
	小計					1		1	0.02
総計	個数	583	244	205	2147	1177	182	4538+ α	
	占有率(%)	12.85	5.38	4.52	47.30	25.94	4.01		100

※本表作成時では整理作業を完了していないため土師器、土師質土器・黒色土器・瓦器などに関して、数量が増える可能性を残している。

表4 D・E・F調査区層位別出土遺物集計表

器種	器形	D		E		D+E		D		E		F		D+E+F	
		6.7		10.11		/		8.9		12		6.7.10		/	
		個数	%	個数	%	総個数	%	個数	%	個数	%	個数	%	総個数	%
弥生土器	壺	1	0.10			1	0.10								
	不明									1	0.09			1	0.09
	小計	1	0.10			1	0.10			1	0.09			1	0.09
土師器	甕	1	0.10			1	0.10	1	0.09	5	0.43	4	0.34	10	0.86
	壺	2	0.20	1	0.10	3	0.29			4	0.34	1	0.09	5	0.43
	高坏							1	0.09	1	0.09			2	0.17
	坏	10	0.98	15	1.47	25	2.45	3	0.26	24	2.07	14	1.20	41	3.53
	蓋	1	0.10			1	0.10	1	0.09	1	0.09			2	0.17
	皿	35	3.43	15	1.47	50	4.90	9	0.77	18	1.55	9	0.77	36	3.10
	埴	7	0.69	1	0.10	8	0.78	7	0.60	4	0.34	2	0.17	13	1.12
	不明	379	37.16	186	18.24	565	55.40	217	18.67	280	24.10	111	9.55	608	52.32
	小計	435	42.65	218	21.37	653	64.02	239	20.57	337	28.98	141	12.13	717	61.69
	土質器	甕	1	0.10			1	0.10			2	0.17			2
埴								5	0.43	4	0.34			9	0.77
皿										3	0.26			3	0.26
鉢		1	0.10			1	0.10	2	0.17					2	0.17
羽釜		1	0.10			1	0.10	1	0.09	4	0.34	2	0.17	7	0.60
土埴								1	0.09	1	0.09	2	0.17	4	0.34
土器	不明	9	0.88			9	0.88	1	0.09	8	0.69	3	0.26	12	1.03
	小計	12	1.18			12	1.18	10	0.86	22	1.90	7	0.60	39	3.36
	不明			6	0.59	6	0.59	2	0.17					2	0.17
黑色土器	小計			6	0.59	6	0.59	2	0.17					2	0.17
	不明							1	0.09	1	0.09			2	0.17
瓦器	埴							1	0.09	1	0.09			2	0.17
	不明	1	0.10	2	0.20	3	0.29			12	1.03			12	1.03
	小計	1	0.10	2	0.20	3	0.29	1	0.09	13	1.12			14	1.20

器種	調査区 順位 調査区 器種	D		E		D+E		D		E		F		D+E+F	
		6.7		10.11				8.9		12		6.7.10			
		個数	%	個数	%	総個数	%	個数	%	個数	%	個数	%	総個数	%
		形状													
須 惠 器	襖							11	0.95	2	0.17	2	0.17	15	1.29
	壺	4	0.39			4	0.39	3	0.26	3	0.26	1	0.09	7	0.60
	高坏	6	0.59			6	0.59	3	0.26					3	0.26
	坏	5	0.49	4	0.39	9	0.88	18	1.55	7	0.60	3	0.26	28	2.41
	蓋	19	1.86	5	0.49	24	2.35	16	1.38	6	0.52	5	0.43	27	2.32
	壘							1	0.09			2	0.17	3	0.26
	瓶							3	0.26	11	0.95			14	1.20
	匙									1	0.09			1	0.09
	不明	152	14.90	43	4.22	195	19.12	152	13.08	75	6.45	19	1.64	246	21.17
	小計	186	18.20	52	5.10	238	23.33	207	17.81	105	9.04	32	2.75	344	29.61
須 惠 土 器	片口鉢	5	0.49	3	0.29	8	0.78								
	襖	27	2.65	18	1.76	45	4.41								
	不明	10	0.98			10	0.98								
	小計	42	4.12	21	2.06	63	6.17								
灰 釉	長乘壺	1	0.10			1	0.10								
	壺							1	0.09					1	0.09
	碗									2	0.17	1	0.09	3	0.26
	不明			1	0.10	1	0.10	1	0.09	4	0.34			5	0.43
	小計	1	0.10	1	0.10	2	0.20	2	0.17	6	0.52	1	0.09	9	0.77
緑 釉	壘											1	0.09	1	0.09
	不明	2	0.20			2	0.20	1	0.09	1	0.09			2	0.17
	小計	2	0.20			2	0.20	1	0.09	1	0.09	1	0.09	3	0.26
青 磁	碗	5	0.49			5	0.49								
	皿	1	0.10			1	0.10								
	不明	5	0.49			5	0.49								
	小計	11	1.08			11	1.08								

器 種	器 形	調査区		D		E		D+E		D		E		F		D+E+F		
		層位		6.7		10.11		/		8.9		12		6.7.10		/		
		個数	%	個数	%	総個数	%	個数	%	個数	%	個数	%	総個数	%			
白 磁	碗																	
	皿																	
	不明	1	0.10			1	0.10											
	小計	1	0.10			1	0.10											
陶	壺																	
	甕																	
	壺																	
	蓋																	
	皿																	
	碗																	
	不明	7	0.69	4	0.39	11	1.08											
	小計	7	0.69	4	0.39	11	1.08											
	器	鉢																
		無鉢			1	0.10	1	0.10										
不明		2	0.20			2	0.20											
小計		2	0.20	1	0.10	3	0.29											
瓦				8	0.78	8	0.78											
	小計			8	0.78	8	0.78											
土 鉢	有溝	1	0.10			1	0.10			6	0.52			6	0.52			
	管状							3	0.26	8	0.69			11	0.95			
	不明							1	0.09	1	0.09			2	0.17			
	小計	1	0.10			1	0.10	4	0.34	15	1.29			19	1.64			

調査区 階位 調査対象種別 器種	器形	D		E		D+E		D		E		F		D+E+F	
		6.7		10.11		/		8.9		12		6.7.10		/	
		個数	%	個数	%	総個数	%	個数	%	個数	%	個数	%	総個数	%
石		1	0.10			1	0.10			4	0.34			4	0.34
	小計	1	0.10			1	0.10			4	0.34			4	0.34
鉄		3	0.29			3	0.29	5	0.43					5	0.43
	小計	3	0.29			3	0.29	5	0.43					5	0.43
サヌクイト 銅片								3	0.26					3	0.26
	小計							3	0.26					3	0.26
チャート 銅片								1	0.09					1	0.09
	小計							1	0.09					1	0.09
銅製品		1	0.10			1	0.10								
	小計	1	0.10			1	0.10								
果実種子										1	0.09			1	0.09
	小計									1	0.09			1	0.09
かまど															
総計	個数・占有率(%)	707	89.31	313	30.69	1020	100	475	40.88	505	43.46	182	15.66	1062	100

表5 出土土器観察表

調査区	出土層	器種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
B 調査区	5 層	弥 生 土 器		Fig 29-1	<ul style="list-style-type: none"> 平底。 体部はやや外反しながら外上方にひろく。 	<ul style="list-style-type: none"> 粘土紐巻き上げ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡赤褐色。 胎土疎，3mm以下の砂粒を多く含む。 焼成不良 底部のみ残存。
				Fig 29-2	<ul style="list-style-type: none"> 平底。 体部はやや内湾気味に立ち上がり，外上方にのびる。 	<ul style="list-style-type: none"> 粘土紐マキアゲ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> 明赤褐色 胎土は極めて粗く，砂粒，小石粒を多量に含む。 焼成はあまい。 底部のみ残存。
				Fig 29-3	<ul style="list-style-type: none"> 平底。 体部はやや内湾気味に立ち上がり，外上方に伸びる。 	<ul style="list-style-type: none"> 粘土紐巻き上げ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> 明赤褐色を呈す。 胎土は粗く5mm以下の砂粒を多く含む。 焼成不良 底部のみ残存。
				Fig 29-4	<ul style="list-style-type: none"> 平底。 体部は，外上方にひろがる。 	<ul style="list-style-type: none"> 粘土紐巻き上げ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> 暗赤褐色を呈す。 胎土は粗く，3mm以下の砂粒を多く含む。 焼成不良 底部のみ残存。

調査区	出土 位置	器種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
B 調査区	5層	弥生土器	壺	Fig.29-5	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 頸部はゆるく外上方に外反する。 ◦ 頸上部に、3帯のヘラ描き沈線文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 粘土紐マキアゲ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 明茶褐色。 ◦ 胎土は粗く、砂粒を多量に含む。 ◦ 焼成はあまい。
				Fig.29-6	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 大きく外反する口縁部を存す。 ◦ 口縁端部は丸くおさめる。 ◦ 指頭痕をもつ凸帯を三段有す。 ◦ 突帯上部に3帯、下部に5帯のヘラ描き沈線文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 粘土紐巻き上げ成形。 ◦ 凸帯を貼付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 淡黄褐色を呈す。 ◦ 胎土は粗く、5mm以下の砂粒を多く含む。 ◦ 焼成は極めて悪い。 ◦ 口頸部のみ残存。
A 調査区	2層	磁器	碗	Fig.31-1	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 体部は丸味をもって外上方に拡がる。 ◦ 口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ ミズビキ・ロクロ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 黄味乳灰色の磁胎。 ◦ 胎土密。 ◦ うすオリーブ色の施釉。 ◦ 中国製青磁。
				Fig.31-2	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 平底。 ◦ 体部は稍曲して外上方に広がる。 ◦ 内底面及び体部下半に象嵌を認める。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ ミズビキ・ロクロ成形。 ◦ 底部削り出し。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 明茶灰色の磁胎。 ◦ 胎土密。 ◦ 灰緑色の施釉。 ◦ 外底面は素地をとどめる。 ◦ 中国製青磁。

調査区	出土層 位置	器種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
A 調査区	2層	磁器	碗	Fig.31-3	<ul style="list-style-type: none"> 高台を削り出す。 高台裏に削り出しによる段を形成する。 内底面に象嵌を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ミズビキ・ロクロ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> 青灰色の素地。 胎土緻密。透明に近い明緑灰色の施釉高台部畳付まで釉薬を認める。 中国製青磁。
				Fig.31-5	<ul style="list-style-type: none"> 断面カマボコ状の口縁部を削り出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ミズビキ・ロクロ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> 華南系灰白磁。
				Fig.31-4	<ul style="list-style-type: none"> 体部は外上方に伸び、口縁部はやや外反する。 口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ミズビキ・ロクロ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> 中国製白磁。
D 調査区	8層	土師器	平	Fig.32-3	<ul style="list-style-type: none"> 外底面は平坦に形成される。 体部はほぼ直線状に外上方にひろがる。 体部と底部の境はナデによる明瞭な段を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ成形。 ナデ調整、高台部は入念なナデを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> 明赤褐色。 胎土は緻密。 焼成良好。
				Fig.32-4	<ul style="list-style-type: none"> 平坦な底部と外上方に伸びる体部とからなる。 断面三角形の高台を貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 明赤褐色を呈す。 胎土は精選されている。 焼成良好。
	7層	土師賞土器	鉢	Fig.32-19	<ul style="list-style-type: none"> 体部は緩やかに外反しながら立ち上げる。 高台は緩やかに外反して拡がり、端部を平坦におさめる。断面三角形を呈す。 底部は湾曲してのびる。 	<ul style="list-style-type: none"> 粘土紐マキアゲ成形。 外底面と高台の接合面に指押えをとどめる。 ナデ調整。 内底面及び体部下部に、ややあらい縦方向のハケ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 明赤褐色。 胎土は粗く、砂粒を多量に含む。 焼成はあまい。

調査区	出土層 位階	器種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
D 調 査 区	7 層	土 師 賞 土 器	羽 釜	Fig. 32-20	<ul style="list-style-type: none"> ○ 垂平にのびる銜部と垂直な体部からなる。 ○ 口縁端はやや肥厚し、外下方に拡張する。 ○ 銜部は断面台形を呈し、端面は明瞭な稜線を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ マキアゲ・ミズビキ成形。 ○ 体部内面に指押え。 ○ 銜部・体部接合面下端に指押え。上部は入念なナデ調整を施す。 ○ 銜は貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 暗赤褐色。 ○ 胎土は粗く、砂粒・黒雲母を多量に含む。 ○ 焼成良好、堅緻。
				Fig. 32-1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 擬宝珠形つまみを付す。中央部は僅に突起する。 		<ul style="list-style-type: none"> ○ 灰白色を呈す。 ○ 胎土は緻密。 ○ 焼成良好。
	Fig. 32-2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 天井部はややふくらむ。 ○ 口縁部は外下方にのび、端部を丸くおさめる。 ○ 口縁部外面には弱い凹線をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ マキアゲ・ミズビキ成形。 ○ ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 淡青灰色。 ○ 胎土やや粗い、細砂粒を含む。 ○ 焼成良好。 			
	8・9 層	須 恵 器	壺	Fig. 32-5	<ul style="list-style-type: none"> ○ 体部は内湾気味に立ち上がる。 ○ 高台は外下方に拡がり、弱い凹線状の段を形成する。 ○ 底部は平坦 ○ 体部と内底面の境には入念なナデ痕をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ マキアゲ・ミズビキ成形。 ○ ヨコナデ調整。 ○ 高台貼り付け。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 乳灰色。 ○ 胎土はやや粗い、細砂粒を含む。 ○ 焼成ややあまい。
				Fig. 32-6	<ul style="list-style-type: none"> ○ 平坦な底部と外上方にひろがる体部とからなる。 ○ 断面梯形の高台を貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 乳白色。 ○ 胎土中に砂粒を含む。 ○ 器面の磨減が著しい。

調査区	出土層 位置	種類	器形	挿図番号	形態の特 徴	成形・調整法	備 考
D 調 査 区	8 ・ 9 層	恵	須	Fig.32-7	<ul style="list-style-type: none"> 平坦な底部と丸味をおびて立ちあがる体部とからなる。 底部はやや肥厚する断面長方形の高台を貼り付ける。 底部と体部の境は丸味をおびてやや外に張り出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 明乳灰色。 胎土は精選されている。 焼成はあまい。 器面の磨減が著しい。
				Fig.32-8	<ul style="list-style-type: none"> 平坦な底部と外上方に拡がる体部とからなる。 体部と高台部境外面には弱い段を形成する。 外下方に拡がる断面台形の高台を貼りつける。 高台裏は平坦面を形成する。 体部内面には明瞭なロクロ目をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 外面へラ削り。 ヨコナデ調整。 高台貼り付け。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面暗灰色。 内面灰白色。 胎土は粗く、砂粒を含む。 焼成良好。 外面に自然釉をとどめる。
			Fig.32-13	<ul style="list-style-type: none"> 坏部・脚柱部裾を欠失。 脚柱部は中空で、不整円形をなす。 外反して立ち上がる。 坏部との接合面内面に弱い段を形成する。 外面に二条の弱い沈線を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 脚内面上端部はナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 暗灰白色。 胎土は緻密。黒雲母を含む。 焼成良好。 脚内外面に自然釉が部分的に認められる。 	
			高	Fig.32-14	<ul style="list-style-type: none"> 坏部、脚柱部裾を欠失。 脚柱部は中空。 脚柱部は外反して立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 脚柱部内面上端にナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 黒灰色。 胎土は緻密。砂粒を含む。 焼成良好。

調査区	出土層位	部種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
D 調査区	8・9層	須恵器	高 杯	Fig. 32-15	<ul style="list-style-type: none"> ○脚柱部は僅かに外反する。 ○杯部は外上方にひろがる。 ○脚柱部と杯部の内面接合部には、明瞭な段を有す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○マキアゲ・ミズビキ成形。 ○脚柱部内部はナデ調整。 ○杯部内外面、脚柱部外面ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ○明青灰色。 ○胎土やや緑、細砂粒を混える。 ○焼成良好。
			瓶	Fig. 32-9	<ul style="list-style-type: none"> ○体部は丸味を帯びて、外上方に鋭く立ち上がる。 ○体部下半は肥厚し、焼成時のき裂をとどめる。 ○高台は外下方に拡がり、端部を平坦に形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○マキアゲ・ミズビキ成形。 ○体部内外面に入念なヨコナデ調整。 ○外底面に不整方向のナデ。 ○高台は貼り付け。 	<ul style="list-style-type: none"> ○淡灰青色。 ○胎土緻密、黒雲母細砂粒を含む。 ○焼成良好。
			鉢	Fig. 32-10	<ul style="list-style-type: none"> ○体部は直線状に外上方にのびる。 ○体部器壁内面には凹凸をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体部外面ヨコナデ調整。 ○体部内面ナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ○青灰色。 ○胎土は緻密、砂粒、黒雲母を多量に混える。 ○焼成良好。
	7層	須恵土器	片 口 鉢	Fig. 32-11	<ul style="list-style-type: none"> ○外上方にひろがる体部と内傾する口縁部とからなる。 ○端部は丸くおさまる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○マキアゲ・ミズビキ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ○灰青色。 ○胎土は粗く細砂粒を多量に含む。 ○焼成良好。
			鉢	Fig. 32-12	<ul style="list-style-type: none"> ○外上方にひろがる体部と僅かに内傾する口縁部とからなる。 ○口縁部はやや下方にひろがり、端部は丸くおさまる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○マキアゲ・ミズビキ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面、暗灰色。 ○内面、乳灰白色。 ○胎土は粗く、細砂粒を多量に含む。 ○焼成良好。

調査区	出土層 位相	種類	器形	挿図番号	形態の特 徴	成形・調整法	備 考
D 調 査 区	7 層	磁 器	碗	Fig 32-17	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾する。 ◦ 口縁部は肥厚し、丸味を帯び、カマボコ状の断面を呈す。断面には空隙をとどめる。 	◦ ヨコナデ調整。	◦ 灰白磁。
				Fig 32-18	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。 ◦ 口縁端は丸くおさめる。 ◦ 体部内外面に櫛状の曲線文を掻く。 ◦ 釉の剥落がみられる。 	◦ ミズビキ・ロクロ成形。	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 乳灰白の磁胎。 ◦ 胎土密。 ◦ 灰緑色及び薄黄茶の二色が斑々に施釉されている。 ◦ 同安窯系青磁。
	S D 3 0 1	土	環	Fig.33-7	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 体部はやや張り出して外上方にのびる。 ◦ 外底面はほぼ平坦である。 ◦ 低い高台をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ マキアゲ成形。 ◦ ヨコナデ調整、高台部は入念なナデを施す。 ◦ 高台は貼付。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 黄味乳灰色。 ◦ 胎土密、やや細砂粒を含む。 ◦ 焼成良好。
				Fig 33-15	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 平底。 ◦ 体部はやや急に立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ マキアゲ、ミズビキ成形。 ◦ ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 明赤褐色。 ◦ 胎土精選。 ◦ 焼成良好。
		高 器 環	Fig 33-17	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 脚柱部はやや内傾して、外上方にひろがる。 ◦ 内面は中空。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 脚柱部は芯棒に粘土を巻きつけて成形。 ◦ 脚柱部と環部を接合する。 ◦ 脚柱部にヘラ削りを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 乳白色。 ◦ 胎土中に砂粒を含む。 ◦ 焼成はあまい。 ◦ 器面の磨滅が著しい。 	
			Fig.33-5	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 体部は丸味をおびて立ち上がる。 ◦ 扁平な高台を貼り付ける。端部は平坦に形成される。 ◦ 底部やや肥厚す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ マキアゲ成形。 ◦ ナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 淡赤灰色。 ◦ 胎土は緻密。 ◦ 焼成ややあまい。 	

調査区	出土層 位階	器種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
D 調 査 区	S D 3 0 1	恵	蓋	Fig.33-1	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は水平にのびる。 偏平なつまみを有す。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> 黄味乳白色。 胎上やや疎、細砂粒を含む。 焼成きわめてあまい。
				Fig.33-2	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は上方へふくらむ。中央に偏平で窪んだつまみを有す。 内面頂部にやや平坦面をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 天井部外面にヘラ削り調整。 擬宝珠つまみを貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 暗灰青色。 胎土は緻密、微砂粒を含む。 焼成良好。
				Fig.33-3	<ul style="list-style-type: none"> ほぼ平坦な天井部とやや内傾する端部とからなる。 口縁端部はそり気味に丸くおさめる。外面に弱い凹線をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面に回転ヘラ削りを施す。内面はロクロ目をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 灰色。 胎土中に砂粒を含む。 焼成良好。
			器	Fig.33-4	<ul style="list-style-type: none"> 高台は外下方に開く、外下端に浅い凹線を認める。 内底面はやや窪む。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 高台は貼り付け。 外底面、ヘラ削り。 体部と高台部の接合面は入念なヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 暗灰青色。 胎土は緻密、微砂粒を含む。 焼成良好。 底部内面に二条のヘラ記号あり。
				Fig.33-6	<ul style="list-style-type: none"> 体部は高台上端より緩やかに内傾して立ち上がる。 高台は外下方に広がる。断面長方形。 内底面に一条の浅い沈線をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 内底面に不整方向のナデ調整。 貼り付け高台。 	<ul style="list-style-type: none"> 灰白色。 胎土は緻密、微砂粒を多量に含む。 焼成不良。

調査区	出土層位	種類	器形	標図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
D 調 査 区	S D 3 0 1	恵 須 壺	環	Fig 33-8	<ul style="list-style-type: none"> 体部は緩やかに立ち上がる。 高台は断面梯形。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 貼り付け高台。 	<ul style="list-style-type: none"> 暗灰白色。 胎土は緻密、微砂粒を多量に含む、黒雲母を含む。 焼成普通。
				Fig 33-9	<ul style="list-style-type: none"> 頸部は外上方にのび、ほぼ直角に外反し、口縁部でわずかに内湾する。 口縁端部はやや内傾させてつまみ出す。 内外面をもとに緑灰色の自然釉付着。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部内面叩きののちヨコナデ。 外面ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 灰青色～淡赤紫色を呈す。 胎土0.5～0.15mm程の砂粒を含む。
				Fig 33-10	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部はやや肥厚し、玉縁状を呈す。 口縁端は内傾し、丸くおさめる。 口縁部と体部の境には弱い段を存す 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 部分的にヘラ痕がみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面暗青灰色。 内面青灰色。 胎土やや粗、細砂粒を含む。 焼成良好、堅緻。
				Fig 33-12	<ul style="list-style-type: none"> 頸部は外反する。 口縁内端はつまみ出され、浅い沈線をとどめる。上端面は平坦に形成され、外端を丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面黒青色、内面、口縁部暗灰色。 胎土はやや粗い、微砂粒を多く含む。 焼成良好、堅緻。
			Fig 33-13	<ul style="list-style-type: none"> 頸部は外反する。 口縁端部は丸くおさめる。 口縁端内面には弱い段を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 青灰色。 胎土はやや粗い、微砂粒を多量に含む。 焼成良好。 	

調査区	出土層 位置	器種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
D 調査区	S D 3 0 1	須 恵 器 皿	瓶	Fig 33-11	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は緩やかに外反し、端部は丸味をおびて平坦に形成される。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面暗灰青色。 内面乳赤色。 胎土は緻密、微砂粒を多く含む。 焼成良好、堅緻。
				Fig 33-14	<ul style="list-style-type: none"> 底部はやや丸味を帯びた平底。 体部は、内湾気味に外上方に立ち上がる。 口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 青灰色。 胎土は粗く、砂粒小礫を含む。 焼成良好。
			瓶	Fig 33-16	<ul style="list-style-type: none"> 内底面に灰釉をとどめる。 底部糸切り後、高台を貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面、ヘラ状工具による削り。 	<ul style="list-style-type: none"> 灰緑色～灰色を呈す。 外底面に墨書をとどめる。
E 調査区	7 層 水 田 址	施 釉 陶 器	瓶	Fig 34-1	<ul style="list-style-type: none"> 体部は僅かに内湾して外上方に広がる。 口縁端部は丸くおさめる。 体部外面にロクロ目をとどめる。 体部内面にハゼワレの現象が認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> ミズビキ・ロクロ成形。 ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 灰白色の陶胎。 胎土はやや粗い、細砂粒を含む。 明灰黒色の施釉。 唐津焼。

調査区	出土層位	器種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
E 調 査 区	7 層 水 田 址	釉 陶	施 碗	Fig.34-2	<ul style="list-style-type: none"> ・体部は「く」の字形に弱く外反して拡がる。 ・口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミズビキ・ロクロ成形。 ・素地にナデの痕をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・赤褐色の陶胎。 ・胎土は密、細砂粒を含む。 ・緑灰色の施釉。 ・外面の体部下部に素地をとどめる。 ・唐津焼。
				Fig.34-3	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は内傾し、下端を丸くおさめる。 ・体部外面に明瞭な稜を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミズビキ・ロクロ成形。 ・体部外面にロクロ目をとどめる。 ・貫入が認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・乳灰色の陶胎。 ・胎土は緻密。 ・灰青色の施釉。 ・唐津焼。
				Fig.34-4	<ul style="list-style-type: none"> ・体部は水平のにのびる。 ・高台はほぼ垂直に下りる。 ・底部は厚みをもつ。 ・高台及び外底面に素地をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミズビキ・ロクロ成形。 ・高台外面にヨコナデ調整。 ・削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ・陶胎は淡橙色、外底面、高台は部分的に暗褐色。 ・胎土緻密。 ・焼成良好。 ・暗灰黄緑色の施釉。 ・唐津焼。
	SD201	土 師 器	土 師 罎	Fig.23	<ul style="list-style-type: none"> ・体部は緩やかに内傾し、立ち上がる。 ・体部外面に指頭圧痕を明瞭にとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・粘土紐マキアゲ成形。 ・ナデ調整。 ・口縁部内面に斜めハケ調整を施す。 ・体部にタテハケ調整を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・にぶい黄褐色。 ・胎土疎、2mm以下の砂粒を多く含む。 ・焼成良好。

調査区	出土層 位置	部種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
E 調 査 区	12	土 師 層	土 師 器	Fig.35-2	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 体部は外上方に広がる。 ◦ 断面三角形の高台を貼り付ける。 	◦ マキアゲ成形。	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 明赤褐色。 ◦ 胎土は緻密、わずかに砂粒を含む。 ◦ 焼成良好。 ◦ 磨滅している。
				Fig.35-3	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 平底。 ◦ 底部と体部の境にナデによる弱い段を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 粘土紐マキアゲ。 ◦ ナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 明橙色を呈す。 ◦ 胎土緻密。 ◦ 外底面に粘土紐マキアゲ痕跡をとどめる。
				Fig.35-4	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 平底。 ◦ 体部はやや屈曲して外上方に伸びる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 粘土紐マキアゲ成形。 ◦ ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 明赤褐色を呈す。 ◦ 胎土は精選されている。
				Fig.35-5	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 平坦な底部とやや屈曲して直線的に広がる体部とからなる。 ◦ 口縁端部を丸くおさめる。 ◦ 口縁端部内側に一条の沈線を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 粘土紐マキアゲ。 ◦ ナデ調整。 	◦ 明赤褐色を呈す。
				Fig.35-16	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 体部は外上方に伸びる。 ◦ 口縁部は「く」の字形に大きく外反する。 ◦ 口縁端部を上方につまみ上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 粘土紐マキアゲ成形。 ◦ ナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 明赤褐色を呈す。 ◦ 胎土中に砂粒を多く含む。 ◦ 器壁が磨滅しているため、体部外面のハケの単位不明。

調査区	出土層 位階	器種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
E 調 査 区	12 層	土 師 器	甕	Fig 35-17	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は「く」の字形に外反し、端部は僅かに内傾し、丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 粘土紐マキアゲ成形。 口頸部内面にヨコハケ調整。 口縁端外面に指押え、ヘラ削り痕をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 赤褐色。 胎土は粗く、砂粒及び黒雲母を多量に含む。 焼成良好、堅緻。 磨滅している。
				Fig 35-18	<ul style="list-style-type: none"> 頸部は「く」の字形に緩やかに外反する。 口縁端部は僅かに肥厚し、下端をつまみ出す。 	<ul style="list-style-type: none"> 粘土紐マキアゲ成形。 ヨコナデ調整、体部内面ヨコハケ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 赤褐色。 胎土は粗く、3mm内外の小礫及び砂粒を多量に含む。 焼成はややあまい。 磨滅している。
		須 恵 蓋 器	Fig 35-12	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は口縁部との境から急に立ち上がり、平坦面を形成する。 口縁部はやや外下方にひろがり、端部を丸くおさめる。 口縁部と天井部の境に弱いヘラ削りを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ヨコナデ調整。 天井部外面に回転ヘラ削り調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 灰青色。 胎土は緻密、わずかに微砂粒を含む。 焼成良好、堅緻。 口縁部及び体部内面約々に自然釉をとどめる。 天井部内面に、重ね焼きの痕を認める。 	

調査区	出土層位	器種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
E 調査区	12	須恵	瓶	Fig. 35-13	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は僅かに上方へふくらむ。 口縁はほぼ垂直にのび、端部を丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 入念なヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 暗灰色。 胎土緻密、微砂粒を多く含む。黒雲母を含む。 焼成良好。
				Fig. 35-14	<ul style="list-style-type: none"> 体部は外上方にたちあがる。 低い高台を貼りつける。高台裏に弱い凹線を施す。 体部外面にロクロ目をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整、体部内面は入念なヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 乳青灰色。 胎土緻密、砂粒を含む。 焼成はややあまい。
				Fig. 35-6	<ul style="list-style-type: none"> 肩部は丸味をおびて大きく張り出す。 頸部は緩やかに「く」の字状に外反する。 頸部、体部の内面境には、指押えによる段を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 頸部、体部の接合部分に指押え痕があり、指紋も残る。 	<ul style="list-style-type: none"> 乳灰色。 頸部にはぶい暗褐色、肩部はあわい灰緑色。 胎土密、微砂粒を含む。 焼成良好、堅緻。 頸部内外面、肩部外面に自然釉が認められる。後者は剥落して斑らになっている。
				Fig. 35-9	<ul style="list-style-type: none"> 平底で、内底面に粘土縷巻き上げ痕をとどめる。 体部はややふくらみをもって立ち上がり、肩部は丸みをもってすばまる。 頸部は外反して拡がる。 外底面にヘラ起し痕をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 底部と体部を貼り付ける。 外接合面はナデ調整の後、ヘラ削り。 内接合面は指押え 体部内外面にロクロ目をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 暗灰青色。 外面、灰紫色。内面、灰青色。 胎土は緻密。 焼成良好、堅緻。

調査区	出土層 の時期	器種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
E 調 査 区	12 層	須 恵 器	瓶	Fig. 35-11	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外反する。 口縁端部はやや丸味をおびた方形の断面を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黒灰色を呈す。 胎土中に微砂粒を含む。
				Fig.35-8	<ul style="list-style-type: none"> 外上方にひろがる体部と内湾する口縁部とからなる。 口縁部は全体に丸味をおびる。 体部外面にロクロ目をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> 青灰色。 胎土密、細砂粒を含む。 焼成はややあまい。
	11 層	須 恵 器	片 口 鉢	Fig.35-7	<ul style="list-style-type: none"> 外上方にひろがる体部と丸味をおびて内傾する口縁部とからなる。 体部と口縁部の境は丸味をおび、端部は丸くおさめられる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外面、乳灰色、体部内外面及び口縁部内面、乳灰色。 胎土緻密、細砂粒を含む。 焼成はあまい。
				Fig. 35-10	<ul style="list-style-type: none"> 体部はほぼ垂直に立ち上がる。 口縁部は外上方に拡張する。上端面は丸くおさめられ、上端面は平坦に形成される。 	<ul style="list-style-type: none"> ミズビキ・ロクロ成形。 ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 灰赤褐色の陶胎、口縁上端及び内体面は暗灰赤褐色。 胎土はやや粗い、細砂粒を含む。 外面にはほとんど剥離したざらざらの自然釉が認められる。
			土 鉢 器				

調査区	出土層位	部種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
E 調査区	12層	灰	釉 陶 器	Fig. 35-15	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 体部は緩やかに外上方に広がる。 ◦ 高台は外下方に張り出し、端部は内傾する。 ◦ 内底面に重ね焼き痕をとどめる。 ◦ 体部外面下端及び高台との接点に、灰釉のたまりがみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ マキアゲ・ミズビキ成形。 ◦ ヨコナデ調整。体部外面にヘラナデ調整。 ◦ 貼り付け高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 乳灰色。 ◦ 胎土はやや粗い、砂粒を含む。 ◦ 灰釉を認める。
				Fig. 35-1	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 外上方に広がる口縁部を有す。 ◦ 口縁端部はつまみあげて、僅に内傾する。 ◦ 口縁部内面に一条の沈線を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ ロクロ成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 胎土極めて緻密。 ◦ 透明度の高い緑灰色の釉薬を施す。 ◦ 瀬戸焼。
	S D 3 0 3	環 須 恵 頸 壺 器	環	Fig. 36-1	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 体部の立ち上がりはやや内傾する。 ◦ 口縁部端は僅かに肥厚し、内端は段を形成する。 ◦ 受部はやや外上方にのびる。 ◦ 底部は内湾気味に立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ マキアゲ・ミズビキ成形。 ◦ ヨコナデ調整。 ◦ 天井部外面の$\frac{2}{3}$に回転ヘラ削り。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 黒青灰色。 ◦ 胎土密、砂粒を多く含む。 ◦ 焼成良好。
				Fig. 36-2	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 肩部はやや張り出し、弱い稜を形成する。 ◦ 胴部は丸味を帯びてふくらむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ マキアゲ・ミズビキ成形。 ◦ 胴部、肩部内外面に入念なヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 暗青灰色。 ◦ 胎土緻密、微砂粒僅かに含む。 ◦ 焼成良好。
			嬰	Fig. 36-3	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 外反する頸部と上下に拡張する口縁部とからなる。 ◦ 口縁端は内側につまみ出され、端部は丸くおさめらる。 ◦ 口縁部外面にはヨコナデによる弱い凹線を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ マキアゲ・ミズビキ成形。 ◦ ヨコナデ調整。 ◦ 頸部外面に荒いカキ目を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 淡青灰色。 ◦ 胎土緻密、細砂粒、黒雲母を含む。 ◦ 焼成良好。

調査区	出土層 位階	器種	器形	挿図番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
F 調 査 区	6・7・10層	須 蓋	土 師 境 器	Fig. 37-11	<ul style="list-style-type: none"> ・体部は丸味を帯びて立ち上がる。 ・断面三角形の高台を貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マキアゲ成形。 ・ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ・乳赤褐色。 ・胎土は精選されている。 ・黒雲母・細砂粒を含む。 ・焼成良好。
				Fig.37-1	<ul style="list-style-type: none"> ・天井部は上方へふくらむ。 ・口縁は僅かに内傾する。 ・端部は丸くおさまる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マキアゲ・ミズビキ成形。 ・ヨコナデ調整。 ・外面、天井部ヘラ削り。 	<ul style="list-style-type: none"> ・暗灰青色。 ・胎土は緻密。 ・焼成良好。
				Fig.37-2	<ul style="list-style-type: none"> ・天井部はほぼ平坦で、口縁部は内湾気味に下降する。 ・天井部と口縁部の境には粗いヘラ削り痕をとどめる。 ・口縁端部は丸くおさまる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マキアゲ・ミズビキ成形。 ・口縁部の内外に回転ヨコナデ調整。 ・天井部にヘラ削り調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ・灰味黄茶色。 ・胎土はやや粗い。細砂粒及び3mm以下の小礫を含む。 ・自然釉が認められる。
		器	環	Fig.37-6	<ul style="list-style-type: none"> ・高台は低く、外上方にひろがる。端部は丸く、底部は平坦。 ・体部は丸味をもって立ちあがる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マキアゲ・ミズビキ成形。 ・内底面に不整方向のナデ、他ヨコナデ(右回転)。 ・貼り付け高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒青灰色。 ・胎土は粗く砂粒を多く含む。 ・焼成良、堅緻。 ・内外底面に墨書。

調査区	土層 位置	土層 種類	土層 形状	挿入番号	形態の特 徴	成形・調整法	備 考
F 調 査 区	6 ・ 7 ・ 10 層	土	坏	Fig 37-12	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 底部は平坦におさめる。 ◦ 体部はやや内湾し、外方に拡がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 粘土紐マキアゲ成形。 ◦ ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 明橙色。 ◦ 胎土精選されている。 ◦ 焼成良好。
				Fig 37-13	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 底面は平坦。 ◦ 体部は緩やかに外上方にのび、口縁端部は丸味をおびておさめる。外面には僅かに粘土紐巻き上げの痕跡をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 粘土紐マキアゲ成形。 ◦ ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 淡赤褐色。部分的に赤味白色の所あり。 ◦ 胎土は精選されている。細砂粒・黒雲母を含む。 ◦ 焼成良好。
			Fig 37-14	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 口縁部は「く」の字状に外反す。端部は丸くおさめる。 ◦ 口縁部、体部境外面に一条の弱い凸線がみられる。 ◦ 口縁部、体部内面境には明瞭な稜をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ マキアゲ成形。 ◦ ヨコナデ調整。 ◦ 体部外面にヘラナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 暗赤褐色。 ◦ 体部上部から頸部にかけて黒色を呈す。内面黒色。 ◦ 胎土中に砂粒及び金雲母を含む。 	
		Fig 37-15	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 口縁部は「く」の字状に外反する。端部は外下方に僅かに拡がり、平坦面を形成する。 ◦ 体部は外下方に拡がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 粘土紐マキアゲ成形。 ◦ 口縁部、頸部、内面境にオサエ痕をとどめる。 ◦ 体部外面に荒いタテハケ目。 ◦ 口縁部内外面ヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 明赤褐色。 ◦ 胎土中に砂粒を多量に含む。 ◦ 堅緻に焼成。 		
		器					

調査区	出上 管径	器種	器形	挿図番号	形態の特 徴	成形・調整法	備 考
F 調 査 区	6・7・10層	患	環	Fig.37-4	<ul style="list-style-type: none"> 高台を貼りつける。 	<ul style="list-style-type: none"> 高台部ヨコナデ調整。 内外面ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面は灰青色、外面は青灰色を呈す。 胎土は黒色砂粒を含む。
				Fig.37-3	<ul style="list-style-type: none"> 平坦な底部と外上方に拡がる体部とからなる。 丸味をおびた断面梯形の高台を貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 入念なヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 乳灰色。 胎土は緻密、わずかに砂粒を含む。 焼成はあまい。
			境	Fig.37-5	<ul style="list-style-type: none"> 体部は直線状に外上方にのびる。 高台は短く垂直に下る。端部を平坦に形成する。 体部と高台部の境は不明瞭。 体部内外面に明瞭なロクロ目をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 体部内面下端は、ヨコナデの後指オサエされ、高台貼りつけのち再びナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面、暗灰青色。内面、暗灰色。 胎土緻密微砂粒及び黒雲母を含む。 焼成良好、堅緻。
		器	嬰	Fig.37-7	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は「く」の字状に外反する。 口縁部外面には明瞭なロクロ目をとどめる。 口縁端部はやや外方に肥厚し、上端部は凹線状の窪みを形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> マキアゲ・ミズビキ成形。 ヨコナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 暗青灰色。 胎土はやや粗い、砂粒を多量に含む。

付載 山の下東遺跡発掘調査報告

ここに付載する山の下東遺跡は、県道バイパス鳴門、池田線改良工事に伴う発掘調査の一環で、昭和53年11月24日から55年2月14日まで行なったものである。調査地点は、鳴門市大麻町萩原山の下に所属する。現地目は、水田となっており、萩原墳墓群の位置する山塊のすぐ西の地点にあたる。

I 遺跡の概要 (Fig. 2, 3 PL1, 2)

調査区はほぼ全域にわたって明治時代以降の大谷焼陶土用粘土採掘のため、大きく掘削されていた。そのため遺構は殆ど消失しており、かろうじて調査区南西端で中世に属する水路、土坑などを検出しえたにとどまる。

以下、検出された遺物について説明を加える。

溝 (SD01) 調査区北西より南に弧状に走る小溝である。上面は削平されており、痕跡を検出したにとどまる。幅約44cm、深さ6cmを測る。溝 (SD02) に切られ、土坑 (SK12) を切っている。

水路 (SD02) 調査区北西中央部より南西に向って走る溝で、水路 (SD03) を切り込み、水路 (SD04) に流れ込んでいる。北西への続きは、採土土坑に破壊されている。上辺幅50~60cm、深さ40cmを測る。約90°Cの溝底傾斜をもち、検出された溝の両端で4cmの高低差がある。溝内より土師質場が出土した。

水路 (SD03) 調査区南西部を北から南に流れている。上辺幅1.3m、底幅50cm深さ30cmを測り、断面形状はU字形を呈す。溝底にレベル差を存していないが、砂堆積が認められ、流水があったことは確実である。

水路 (SD04) 調査区南西端で検出された。調査面積が狭少のため、規模、形状については明らかにしえないが、幅3m以上を測るものと思われる。溝壁は肩部より緩やかに下降しており、30cm以上の深さを有しているが、規模のわりには深度が浅い。溝壁立ち上がり部分には、直径13cm前後の杭痕跡が44



Fig. 1 調査風景

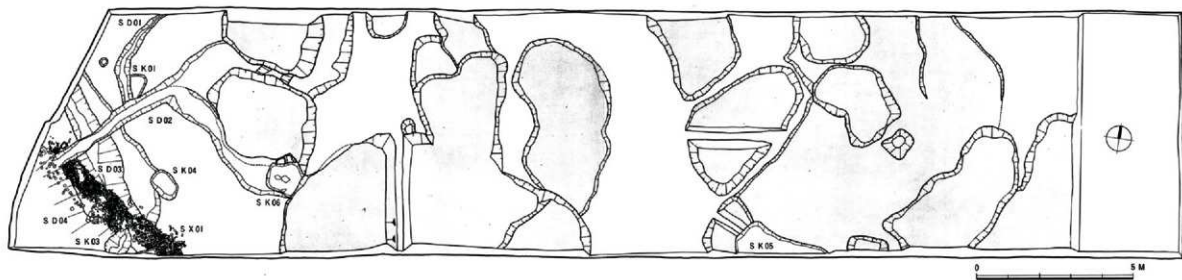


Fig. 2 山の下東道路遺構配置図

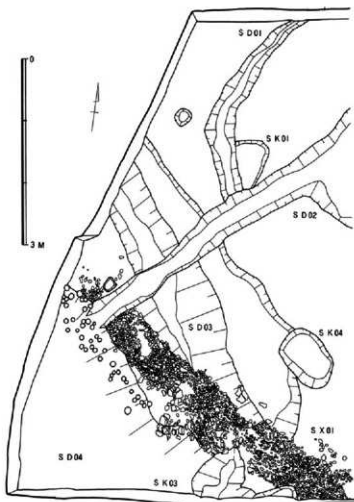


Fig. 3 中世遺構実測図

箇所検出され、護岸が施されていたことが確認された。杭そのものの遺存はないが、ほぼ垂直に打ち込まれるもの、杭の周りを石で固定したものも指摘できる。杭間隔は7~10cmと密である。杭は深いもので壁面より約30cm下にまで達している。護岸方向の規則性は明瞭ではないが、2~3列にわたって打ち込まれたようである。護岸のとぎれる南西部には10~20cm程度の大きさをもつ集石があり、取水のために用いられた可能性がある。溝内堆積土は16層以上に分かれ、砂と粘質土の堆積が認められる (Fig. 4)。

また、南東部には洗掘痕跡が指摘できる。基幹的農業用水路と思われ、溝内より、中国製白磁碗、青白磁合子、瓦器片が出土した。

道路 (SX01) 水路 (SD04) の肩部に平行してのびる、小礫を敷きつめた道路である。走行方向N56°Wを示す。幅約60cmで規則性を有しており、所謂「二尺道路」に該当するものと思われる。礫数は10cm程度の厚さを有しており、礫間には土師質土器細片が含まれている。SD04と有機的な関連をもつものであろう。

土坑 (SK04) 道路 (SX01) の南東部に位置する。長円形の平面プランを呈し、



Fig. 4 SD04 南壁溝内土層堆積断面実測図

1. 耕作土 (黒褐10Y R 土)
2. 床土 (明黄褐2.5Y 土)
3. 褐10Y R 土
4. オリーブ褐2.5Y 土 (円礫を含む)
5. 暗褐10Y R 土
6. にぶい黄褐10Y R 土 (小礫を含む)
7. 褐10Y R 土 (礫・土師器片を含む)
8. 黄褐2.5Y 土 (土師器片を含む)
9. 暗褐10Y R 土
10. 灰黄2.5Y 土 (SD03極めて良質のシルト)
11. 灰5Y R 土
12. 黄褐2.5Y 土 (遺物包含層・黄褐10Y R 土の斑文を認める)
13. 灰黄2.5Y 土 (遺物包含層・黄褐10Y R 土の斑文を認める)
14. 褐10Y R 土 (互を含む)
15. 礫溜め
16. にぶい黄褐10Y R 土
17. オリーブ褐2.5Y 土 (礫混じり攪乱)
18. にぶい黄褐10Y R 土 (黄褐10Y R 土の斑文を認める)

坑底中央部には人頭大の石が2個据えられていた。

II 出土遺物

出土した遺物は僅かで、殆んどが採土による攪乱のため避離している。遺物は鎌倉時代に属するものであり、瓦器、土師質土器、焼締陶器、中国製磁器などがある。

1 中世遺物 (Fig. 5 PL 4, 5)

(1)は土師質小皿で底径7.6cmを測る。外底面と体部の境にはヨコナデを施す。SD02出土。

(2)は口径16cmを測る青磁碗である。体部は直線に外上方にのび、端部は丸くおさめる。体部外面には二条、内面には三条の沈線、及び雲文状の窠影が施されている。緑灰色を呈す。SK05出土。

(3)は口径18.2cmを測る同安窯系の青磁碗である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端を丸くおさめる。体部内外面に櫛描き文を施す。器壁の磨滅が進行しており、釉薬の剝離が認められる。SD03溝底出土。

(4)は高台径3cmを測る瓦器碗である。体部外面には指頭圧痕をとどめ、内面には暗文が

長軸1m、短軸70cm、深さ20cmを測る。須恵質片口鉢片が出土した。

土坑 (SK05) 調査区中央部南壁に接して検出された不整形な土坑である。青磁片、土師器鼎脚部などを出土した。

土坑 (SK06) 土坑 (SK04) の東側で検出された。一部採土土坑によって切られている。直径1m、深さ30cmを測る不整形円形プランを呈す。

認められる。白石
 太郎氏の編年観
 によるⅡ-3型式
 (白石太郎「越
 智氏居館出土の瓦
 器-瓦器の終末年
 代に関連して-」
 『古代学研究』85
 1977) に対応させ
 ることができる。
 SD 0 4 出土。

(5)は景德鎮窯系
 の青白磁合子身で
 ある。

口径5cm, 残存高2.5cmを測る。体部外面を菊座型に分けている。徳島県下での中国製磁器類は今後出土の増加が予想されるが、類別としてはほかに滝の宮経塚出土例がある。SD 0 4 出土。

(6)は福建省民窯製品と推定される青磁碗である。高台を削り出しており、外底面には、兜巾をとどめる。体部外面、高台との境には削り出しによる弱い段を形成している。SD 0 4 出土。

(7)は口径26cm, 残存高4.5cmを測る土師質碗である。体部に屈曲する口縁がつき、端部が垂直に立ち上がる。体部外面には指頭圧痕をとどめており、内外面にススの付着が認められる。13世紀初頭に位置付けられよう。SD 0 2 出土。

2 その他の遺物

有舌尖頭器 (Fig. 6, 7) 第2層 (床土層) で1点検出された。サスカイトを素材とする。先端部と基部の一部を欠く。全体に磨減が進行しており、剥離面は明瞭ではないが、両側縁から押圧剥離によって調整している。残存長2.3cm, 舌部長3mm, 厚さ



Fig. 6 第2層出土の
 有舌尖頭器

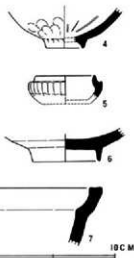


Fig. 5 中世遺物実測図



Fig. 7 有舌尖頭器
 実測図

6mmを測る。周辺地域では、椛地区、大谷地区に出土がある（天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化』3 1976）。

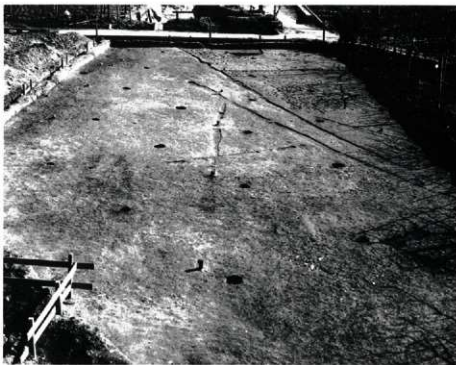
その他、小片のため図示しえないが、香川県十瓶窯系甕片の出土がある。甕壁に格子状の叩き目をとどめており、かめ焼谷窯の製品の可能性（森浩一、伊藤勇輔「香川県綾南町十瓶山北窯跡調査報告」『若狹、近江、讃岐、阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学文学部文化学科 1971、田村久雄、渡部明夫、町川義晃「綾南町陶窯跡群採集の須恵器」『香川史学』9 1980）を指摘しておきたい。

Ⅲ まとめ

本調査区は大部分が採土のため攪乱をうけており、遺構を面として把握することはできなかった。しかし調査区の南西端で検出された一連の遺構は、出土資料の年代観によれば、13世紀前葉～中葉の間に属させることのできるものであり、特に断片的とはいえ、護岸をもつ水路と石敷道路は当該地域の村落に伴う基幹的用水路の在り方を示すものとして注意でき、例えば、中世絵巻などにみられる村落景観の具体相の一端を窺いうるものと思われる。

遺物では、遺存していた遺構からの出土資料の中で、比較相対的には日常雑器類と同程度中国製磁器の出土が目立っている。前章の中内遺跡で指摘した様に、農村部へもかなりの磁器類が日常容器として流入していたことはほぼ確実であり、今後セットを含めた一括資料の出土が望まれる。

圖 版



上 A調査区全景（東より）

下 D調査区第I遺構面（近世水田址）全景（西より）



上 E調査区第Ⅰ遺構面全景（東より）
下 E調査区第Ⅱ遺構面全景（東より）

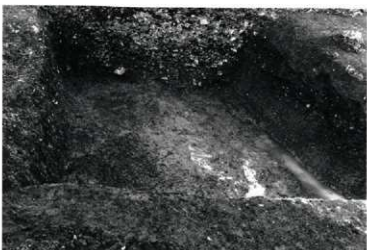
西より



東より



南より



A調査区第I遺構面自然流路全景

南より



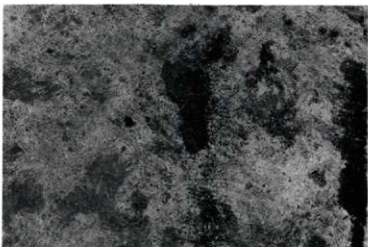
南より



北より



D調査区第I遺構面（近世水田址）の細部状況



E調査区第I遺構面（近世水田址）足跡検出状況



上 D調査区第Ⅱ遺構面土坑墓群全景（西より）

下 D調査区第Ⅲ遺構面全景（西より）

SK201 (東より)



SK203 (東より)



SK203 (南より)



西より



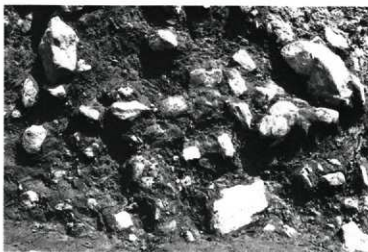
北より



南より



D調査区第Ⅲ遺構面SD301全景



D調査区SD301遺物出土状況

D調査区SD303
自然木出土状況



D調査区SD303
土層堆積状況



E調査区SD303
自然木出土状況



D・E調査区SD303各部状況

D調査区SD303全景
(北より)



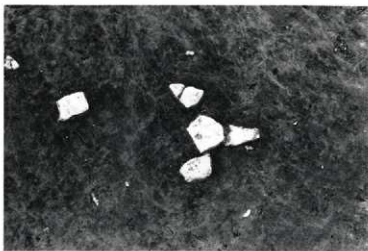
SK307
(東より)



SD302
(北より)



D調査区第Ⅲ遺構面の遺構



B調査区弥生土器出土状況



■13 上 E調査区第Ⅲ遺構面宝幢寺3号墳全景（東より）
下 F調査区宝幢寺3号墳間溝検出状況（南より）



E調査区宝徳寺3号墳墳頂部礫群全景（上 北より 下 南より）



E調査区宝幢寺3号墳墳頂部碑群検出状況（上 西より 下 南より）

墳頂部礫群須恵器散布状況
(南より)



周溝全景
(北より)



周溝内須恵器出土状況
(南より)





上 E調査区宝幢寺3号墳遺物出土状況(西より)
下 E調査区宝幢寺3号墳主体部全景(西より)

西より



南より

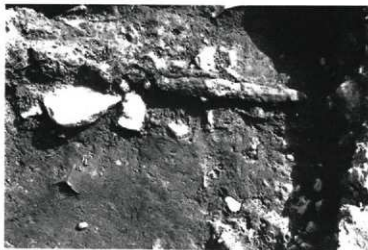


北より



E調査区宝幢寺3号墳墳頂部礫群と内部主体の関係

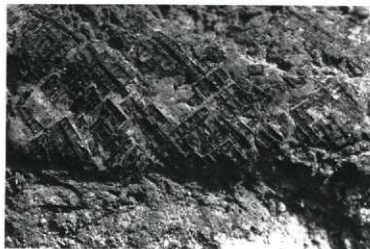
全景



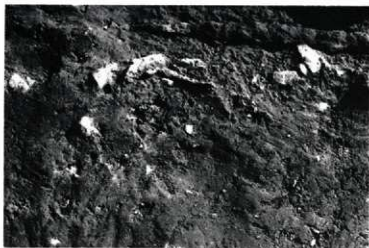
柄の状況



柄の細部



刀子状鉄器
出土状況



第1玉群出土状況



第2玉群出土状況



全景
(西より)



内部主体全景
(西より)

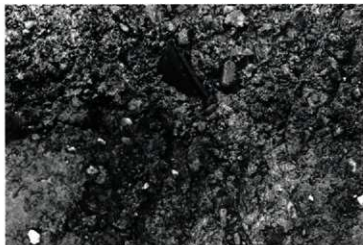


墳丘部盛土状況



E調査区宝幢寺3号墳細部状況

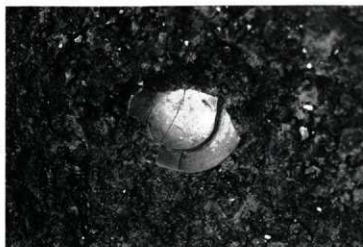
E調査区
SD201内
遺物出土状況



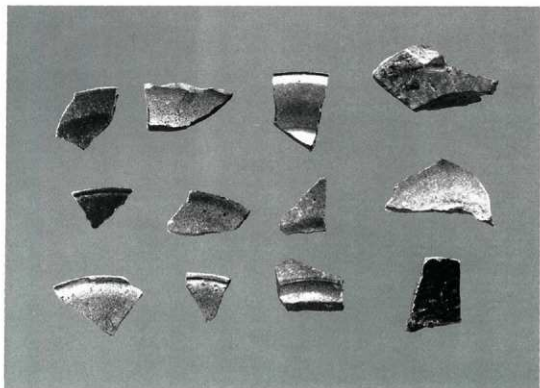
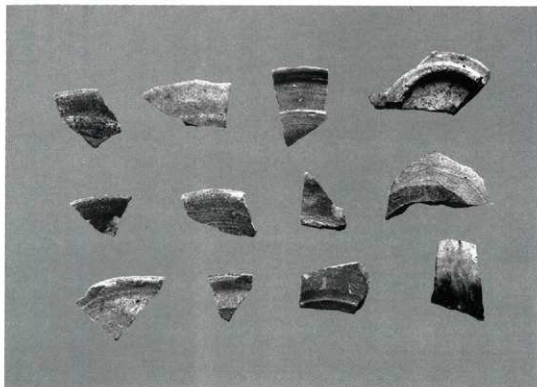
E調査区
第Ⅲ遺構面
直上遺物出土状況

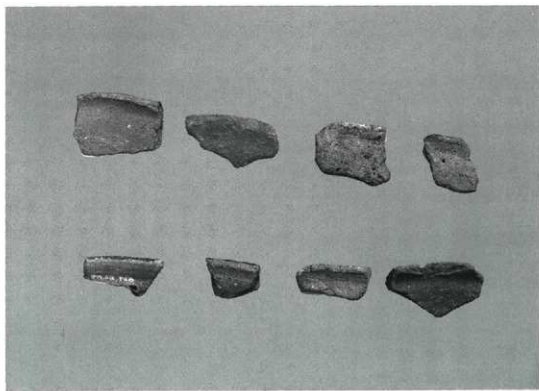
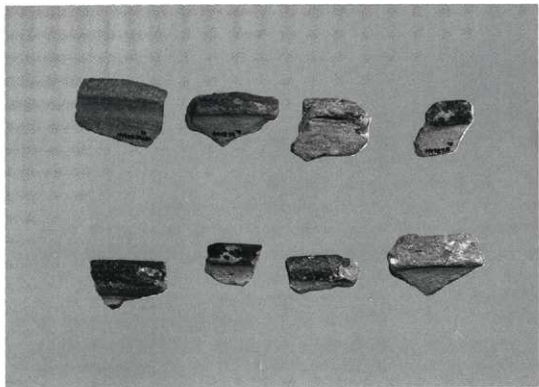


F調査区
第Ⅲ遺構面
直上遺物出土状況

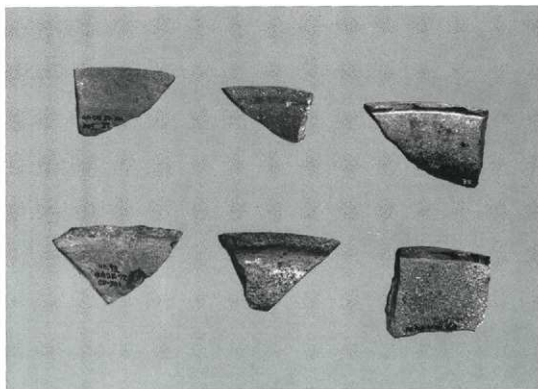
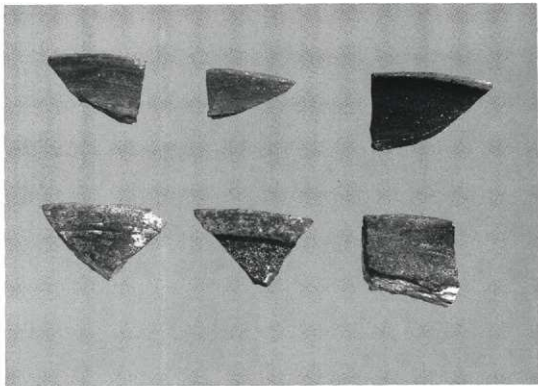


E・F調査区遺物出土状況

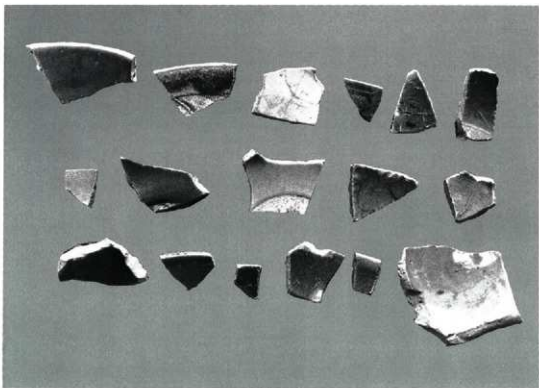
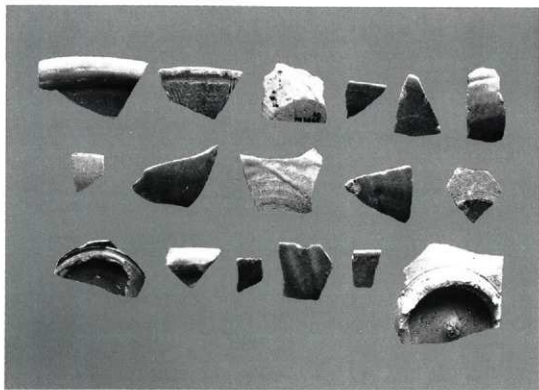




須惠質片口録



須恵貫土器



中国産磁器

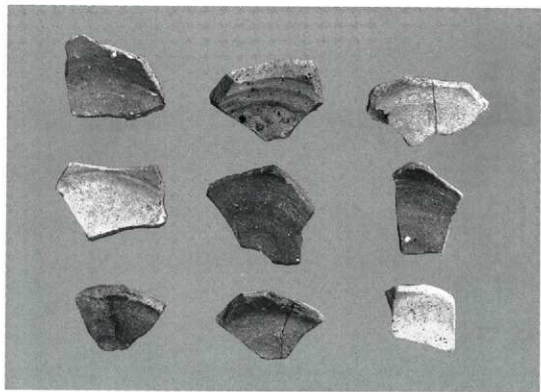
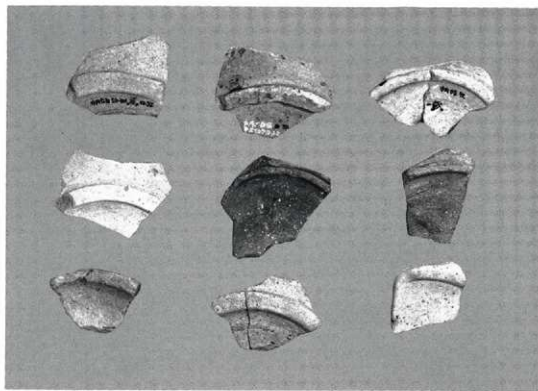
F調査区出土
須恵器



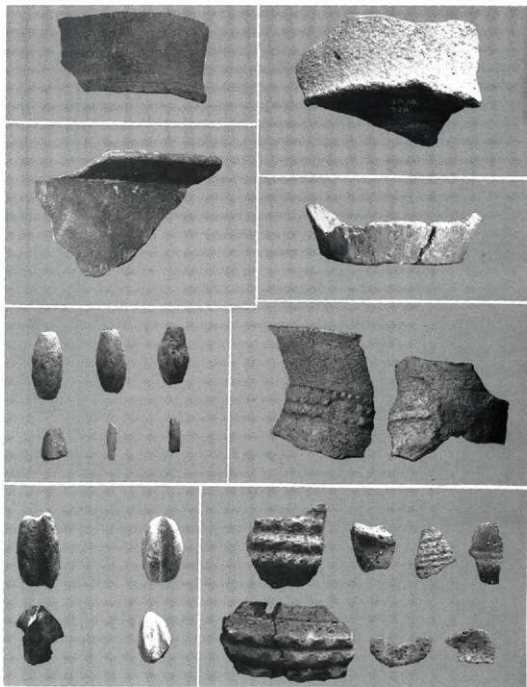
D調査区SD303出土
灰釉陶器



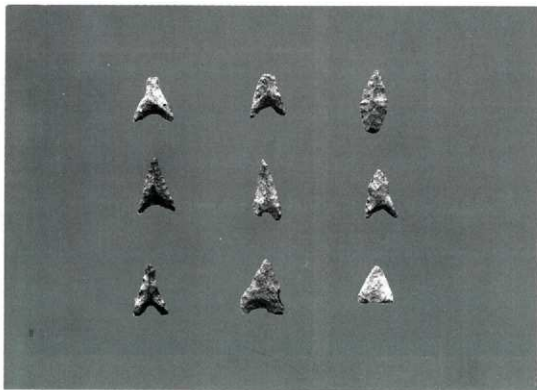
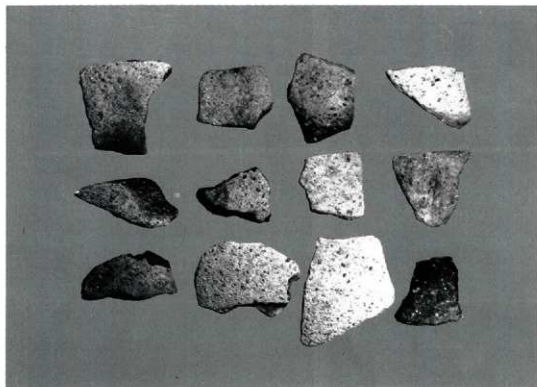
D・F調査区出土の墨書土器



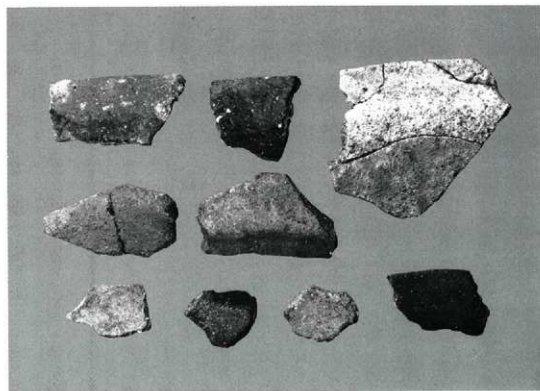
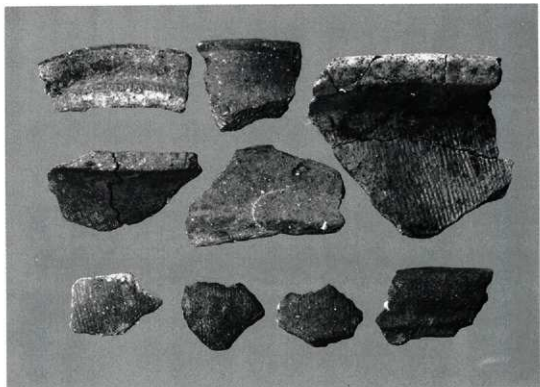
D調査区第Ⅲ遺構面出土須恵器



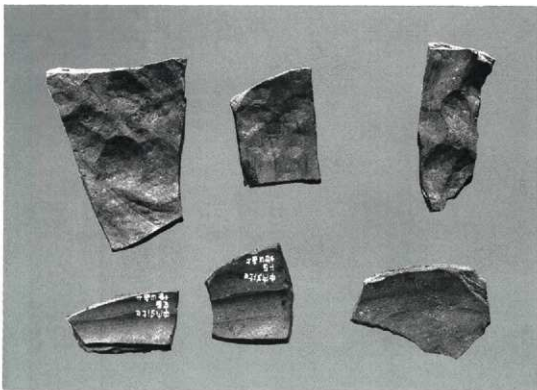
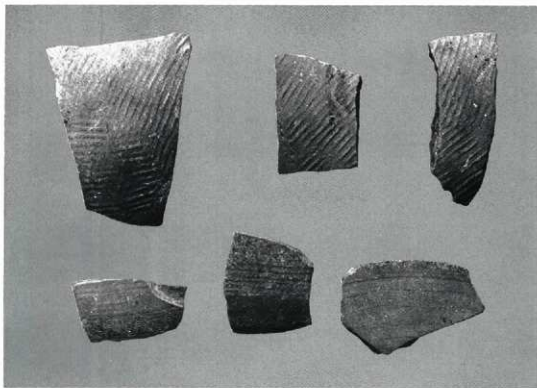
各調査区出土土器



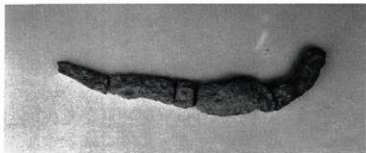
B・C調査区出土弥生土器、石鏃



F調査区出土土師器



F調査区宝幢寺3号墳丘上出土須恵器

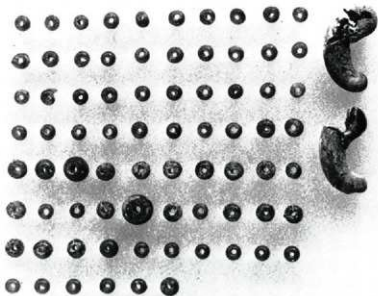
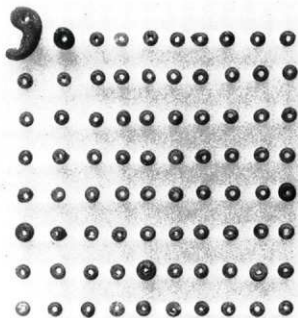


槍
刀子状鉄器

直
刀



宝幢寺3号墳出土鉄器



宝幢寺3号墳出土玉類



上 山の下東遺跡全景（西より）

下 山の下東遺跡SD103, 104全景（南より）

山の下東遺跡
全景
(東より)



SD103
全景
(西より)

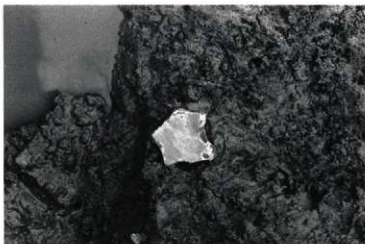


SD103
土層堆積状況
(北より)



山の下東遺跡遺構検出状況

SD04
白磁出土状況



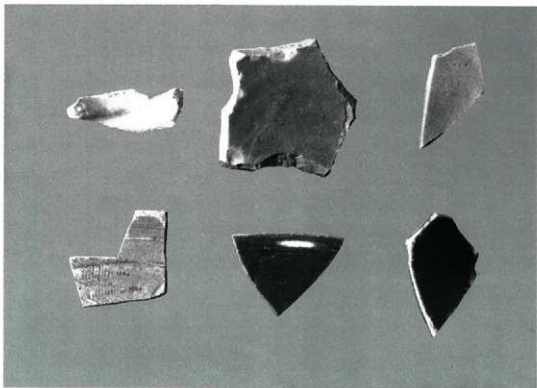
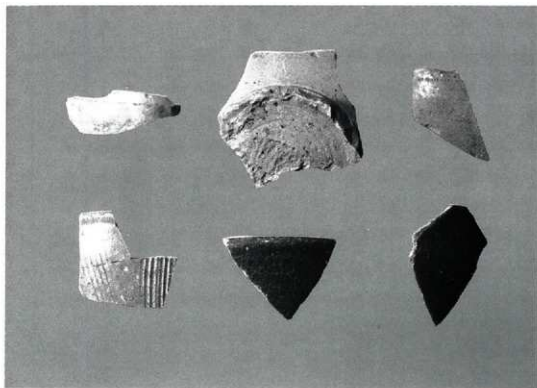
SD04
青白磁出土状況

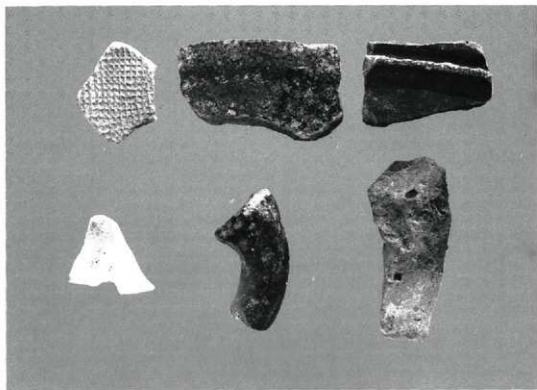


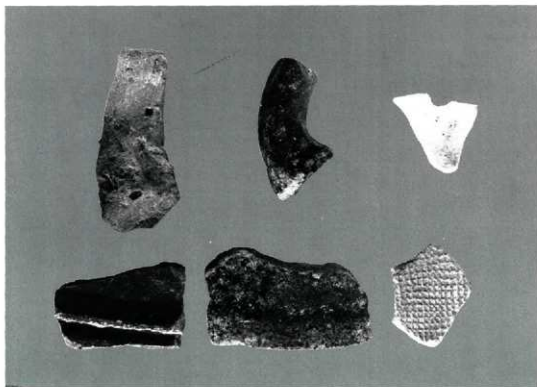
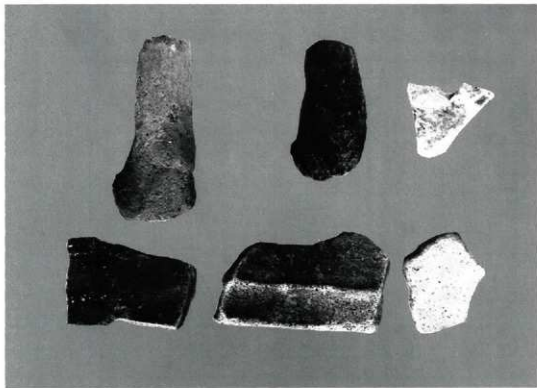
SD03
青磁出土状況



山の下東遺跡遺物出土状況







中 内 遺 跡

編集・発行 徳島県教育委員会
徳島市かちどき橋1丁目

印刷 教育出版センター
徳島市佐古3番町8-14

1981. 3. 31

中内遺跡 正誤表

ページ	行	誤	正
7	9	秋山秀雄氏	秋山日出雄氏
15	Fig 12	(スケール数値)	0から5 m
19	13	土埴墓	土塙墓
21	10	孤状	弧状
28	1	刀先	刃先
32	23	偏平	扁平
37	1	青緑色	青緑色
40	15	円弧叩き	円弧叩き
41	Fig 41	(スケール数値)40cm	20cm
43	Fig 43	(スケール数値)10cm	5 cm
46	11	突線紐式	突線紐式
51	13	狭んで	狭んで
51	28	愛宕山古墳	愛宕山古墳
52	20	碧玉製腕装類	碧玉製腕飾類
53	4,12	愛宕山古墳	愛宕山古墳
54	21	阿波郡土成町	板野郡土成町
57	1	愛宕山古墳	愛宕山古墳
70	12	沈緑文	沈緑文